The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トランスナショナリティ研究
Author(s)	小泉，潤二；栗本，英世
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13163
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Osaka University
The 21st Century COE Program
Interface Humanities
Research Activities 2004-2006

トランスナショナリティ研究

Osaka University The 21st Century COE Program Interface Humanities Research Activities 2004-2006

大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006

文学研究科　人間科学研究科　言語文化研究科　コミュニケーションデザイン・センター

第3巻
トランスナショナリティ研究
Transnationality Studies

目　次

007　はじめに　トランスナショナリティ研究の射程
小泉潤二／栗本英世

第Ⅰ部　トランスナショナリティ研究の展開

049　複数のグローバル化
代替的な（ネイティブに代わる）トランスナショナルな過程と行為者たち
グスタボ・リンス・ヒベイロ　（久保明教訳）

109　グローバル化を問い直す
ドミニカ共和国におけるジェンダーと輸出加工労働
ヘレン・サファ　（田沼幸子訳）

123　トランスナショナリズム研究の課題
人類学の観点から
上杉富之

145　歴史、アイデンティティ、記憶の巻きついた力
ヴァレンタイン・ダニエル　（松川恭子／田口陽子訳）

167　『再魔術化する世界』をめぐって
山之内 靖

第Ⅱ部　ローカリティを超えて——事例研究

195　マグレブ系移民とフランス
〈ローカリティ〉のかたち
植村清加

217 モンゴル・ウランバートル市におけるトランスナショナルな場の生成
西垣 有

247 「アニヤラ」から「カクテル・パーティー」へ
海外に登場するインドの儀礼パフォーマンス
竹村嘉晃

267 マレーシアにおける徳教(dejiao) の展開
華人新興宗教の一形態
黄 蘊

295 周辺世界における農民と廃品回収業
東インドネシア、西ティモールの事例
森田良成

309 おわりに
栗本英世

311 執筆者紹介(五十音順)

はじめに
トランスナショナリティ研究の射程

小泉潤二／栗本英世

1. トランスナショナリティ研究プロジェクト

本報告書は、「トランスナショナリティ研究プロジェクト」の最終報告書である。

トランスナショナリティ研究プロジェクトは、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」を構成する六つの研究プロジェクトの一つとして、2002年11月に開始した。2006年度は5ヵ年計画の最終年度である。現時点で、正味4年間の成果について報告することになる。

「インターフェイスの人文学」は、当初は七つの「事例研究」から出発した。3年目からは六つの「モデル研究」を行った。トランスナショナリティ研究は、出発時の事例研究の一つであり、最後まで続いたモデル研究でもあった。

この「トランスナショナリティ」(transnationality) という言葉は、ほとんど造語である。トランスナショナル (transnational) という形容詞、またトランスナショナリズム (transnationalism) という名詞は、関連する概念としてのグローバル (global) という形容詞、またグローバリゼーション (globalization) やグローバリズム (globalism) という名詞ほどではないにしても、きわめて頻繁に使われるようになった。トランスナショナルな現象に対する関心は、ますます強くなりつつあるようにみえる。私たちは、さまざまなトランスナショナルな現象を広く指し示すために、「トランスナショナル」を抽象名詞化する「トランスナショナリティ」という言葉を使った。広く流通している「トランスナショナリズム」を使わなかったのは、「トランスナショナリズム」が「トランスナショナル」な現象を指すというよりは、「トランス＝ナショナリズム」という、「ナショナリズムを越えて」「国家より広い場で」という意味合いで用いられることも多いからである。私たちの意図は、トランスナショナリティという「旗」を場の中央に立てることによって、トランスナショナル

な現象に広範な角度からアプローチすることだった。

プロジェクトの開始時の2002年11月に、私たちは趣意書あるいはミッション・ステートメントの中で、次のように述べた。

≪プロジェクトの趣旨≫

個別の人類学的研究は、従来ひとつの空間的な「場所」(ロケーション、ローカリティ)と強く結びついてきた。しかし、現在では、調査研究の対象を個別の閉じられた空間に限定することは、対象の実態に即していないばかりか、現実の認識と理解をむしろ阻害する。求められているのは、個別の空間に確実な足場を置きつつも、より広い空間、および時間に視点を拡大していくことであろう。

本研究は、「トランスナショナリティ」概念を核として、こうした展開を目指すものである。具体的には3つの柱を立て、個別の事例を収集し分析しつつ総合化を図る。第一の柱は、いわゆるグローバル化にともなう、ヒト、モノ、情報のトランスナショナルな流れの様態の分析である。流れのギャップや不均等性、およびある場所での滞留にも留意する。第二に、グローバル化の進展とコスモポリタニズムの発現にともなう反動あるいは平行現象として、ナショナルまたエスノ・ナショナルな次元で閉じようとするモメントの分析がある。トランスナショナルな次元に開かず新たに勃興するナショナリズム、所属の政治学(ポリティクス・オヴ・ビロンギング)の隆盛、移民の排斥やゼノフォビアの進行、先住性(オートクトニー)概念の強化、「民族紛争」の深刻化などが具体的なテーマである。第三の柱は、特定の場と結びつかない、「脱領域化」(デテリトリアライズ)されたアイデンティティの分析である。ディアスポラや難民、NGOやビジネスにおけるトランスナショナルなネットワーク形成などが重要な主題である。

本プロジェクトは、上記主題の追求を通じて、現代世界の理解に適した新しい人類学の構築を目指すとともに、「インターフェイスの人文学」の確立と発展への貢献を図ることを目的とする。

この立場、あるいは捉え方は、4年経った現在でも変わらない。研究プロジェクトのメンバーを別にして、研究あるいはプロジェクトの内容や進め方について、中途で変更された部分はなかった。

2.「インターフェイスの人文学」の中のトランスナショナリティ研究プロジェクト

「インターフェイスの人文学」というCOEプログラムは、「インターフェイス」という概念を中心に組織されている。この「界面、境界面、共通領域、出会う場」を意味するインターフェイスという概念は、人類学を中心に展開されてきたトランスナショナリティ研究プロジェクトに深く関係する。「私たちwe」と「彼らthey」を二分することにはさまざまな批判があり、自分たちと「他者」、自文化と異文化を対比的に捉えること自体に問題があることは明らかであるにしても、ともかくその二者の間の「界面」に意識を集中してきたのが人類学である。また、人類学が調査研究の対象とする社会や文化が限りなく多様となり、初期の人類学の「未開社会の研究」というイメージなどで単純化することは不可能になっているにしても、そうした対象となる社会や文化自体が「インターフェイス」そのものになっているという一般化は可能である。現代のグローバル化の中で、メトロポリスもサテライトも、中心的な大都市も周辺的な農村も、日本の中のごく近くで激しい変動に巻き込まれている大空間も、はるかかなたに孤立し表面的には動きがないようにみえる小空間も、すべて現代の「界面」に置かれている。さまざまな人びとが出会い、あるいは衝突しながら社会的現実がつくられていく現場は、いつも「インターフェイス」なのである。

「インターフェイスの人文学」というプログラムの全体を貫いてきた、あるいは貫くことが明らかになってきたテーマとしての「臨床」(clinical studies) と「横断」(transversal/trans-boundary studies) も、それぞれトランスナショナリティ研究プロジェクトにとって本質的な特徴である。そもそも人類学が「臨床的」(clinical) である (べき) こと、事例を比較して一般化するよりは、フロイトが典型的にそうしたように事例の中で一般化すべきことを強調したのはクリフォード・ギアツである。人類学を中核で特徴づけるフィールドワークという技法は、フィールドに赴き、そこに住み込みあるいは滞在し、人びとの語りを聞き続けるという作業である。人類学者が、都会でも農村でも日本でもアフリカでも、どこで調査をするにしても、人の語りをフィールドノートに書きつけるという作業が研究の出発点であり回帰点でもあるということは、当分の間は変わりそうもない。

一方「横断」という要素も、「臨床」以上にさまざまな側面から人類学を特徴づけている。人類学は国家や社会や文化を「横断して」フィールド調査を行う一方、社会学や政治学、経済学や哲学など学問領域を「横断して」理論や分析概念を常に学際的に求めている。

恒常的な越境者で確信犯的な領空侵犯者である人類学者は、とくに1990年代には自己批判を強め、ほとんど自虐的になったこともある。批判が行き過ぎたことへの反省あるいは反動がいま起こりつつあるように思われるが、「横断」という要因がなければ、たとえば先住民について語る権利は人類学者にあるのか、といった疑問はそもそも出ないはずである。人類学から「横断」を取りはずせば、ほとんど何も残らないかもしれない。

3. 研究活動あるいは拠点形成事業

トランスナショナリティ研究プロジェクトにおけるCOE事業推進の中心となったのは、大阪大学大学院人間科学研究科基礎人間科学講座の人類学研究分野である。これに同講座の文明動態学研究分野、また社会環境学講座の現代社会学研究分野の研究者が加わった。5年の間に多少の変動はあったが、プロジェクトを進めてきたコアメンバーは以下の通りである。

小泉潤二（代表　人類学）
栗本英世（人類学）
中川　敏（人類学）
春日直樹（人類学）
三島憲一（文明動態学・現代思想）
木前利秋（現代社会学）
ヴォルフガング・シュヴェントカー（文明動態学）

本研究プロジェクトが行ってきた事業は、次のようにまとめられる。

1）トランスナショナリティ研究プロジェクトセンターの設置
2）「トランスナショナリティ研究セミナー」の実施
3）関連のワークショップとシンポジウムの開催
4）関連の現地調査の実施
5）研究員とRAの雇用

6) 若手研究者養成のための院生派遣
7) 文献資料の収集とデータベースの構築
8) 新しい教育科目
9) 広報事業
10) その他

以下、それぞれについて説明する。

1) トランスナショナリティ研究プロジェクトセンターの設置

2002年のプロジェクト発足と同時に、プロジェクト推進のための施設上の拠点を大阪大学大学院人間科学研究科棟本館の528号室に設置し、「トランスナショナリティ研究プロジェクトセンター」として整備した。このセンターには、21世紀COEプログラム関係のすべての資料や文書を集中するとともに、人類学研究室の助手と新たに採用されたRA(リサーチ・アシスタント)がプロジェクト関係の事務や企画の仕事に従事してきた。

2)「トランスナショナリティ研究セミナー」の実施

私たちが行ってきたCOE関連事業の中で、最も重要であり最大の成果があったのが、このトランスナショナリティ研究セミナーの実施である。2002年12月に記念すべき第一回を開催して以来、トランスナショナリティ研究セミナーシリーズは回を重ね、実質4年の間に80回以上開催される研究フォーラムに発展した。年平均で約20回、ほぼ2週に一度のペースということになる。ときには講師の都合で、同じ週に複数回のセミナーを開くこともあった。セミナー開催記録を本章の末尾に付けている(資料1)。より詳しい情報についてはウェブページ(http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/トランスナショナリティ研究のページ)を参照していただきたい。

こうした連続開催が可能になったのは、RAをリーダーとして多数の大学院生の間で役割を分担し、講師への連絡、広報のためのチラシの作成と発送、セミナー会場の設営と受付、セミナーの音声・映像の記録、懇親会の準備、音声記録のテキスト化などの作業を、ルーティン化して組織的に行ったからである。セミナー開催のノウハウは組織文化として研究室に定着した。この点、歴代の大学院生たちに深く感謝したい。

講師の選定と連絡は、当初はすべて教員が行った。トランスナショナリティ研究セミ

ナーシリーズの講師としてふさわしい研究を行っている方々を、プロジェクトのコアメンバーの人的ネットワークを通じて、あるいはまったく新規に連絡して招聘した。講師となっていただいた方々は、この分野で文字通り世界を牽引している研究者から、非常に若く有望な研究者まで含まれている。国外の研究者の場合は直接本国から招聘した場合もあるが、常に来日する研究者についての情報収集に努め、適切と思われる場合に日程調整を行ってセミナーに招聘した。セミナーの知名度が上がった最近では、講師が自薦してくること、あるいは講師に近い方から推薦いただく場合もある。

セミナーが定着するにつれ、セミナーの実務ばかりでなく招聘講師の選定も、大学院生が主体性をもてるよう配慮した。当初より大学院生から招聘講師の希望を募った場合もあったが、とくに最近はセミナーの企画運営も大学院生が行える方向になっている。若手研究者を養成する研究拠点の形成という、COE事業の理念に沿ったものである。

セミナーの司会は、コアメンバーが交代で担当した。セミナーはすべて録音して記録するとともに映像化し、録音テープを起こしてテキスト化し、講師と聴衆の許可を得た上で、ウェブ上で公開している。セミナーに関心を持ちながらセミナー自体には参加することができなかった方々のためである。ウェブ上に掲載した講演テキストは、さらに洗練加筆して、本プロジェクトの報告書に収められたものも多い。現在もこのようなかたちで論文化しつつあるものも多く、このCOEプログラムが終了した後も、継続して論集化していくことになる。後で述べるように、このセミナーシリーズは21世紀COEプログラムとともに終息させるべきものではない。「どこまでも続いていく」ことが望まれる。

こうして定着した「金曜セミナー」により、共通の問題領域に関心を持つ人びとの人的ネットワークを飛躍的に拡大することができた。同時に、この領域に存在するいくつもの問題の焦点が、徐々に見えてくるようになった。

トランスナショナリティ研究セミナー、略称ＴＮセミナーは、私たちのプロジェクトを牽引する「機関車」のようなものである。定期的に走り続けるセミナーの後ろから、他の事業がついていったようなところがある。

3）関連のワークショップとシンポジウムの開催

TNセミナーに連動し、焦点を絞り込んで、いくつものワークショップやシンポジウムを開催した（資料2参照）。トランスナショナリティ研究プロジェクト単独開催のシンポジウム「トランスナショナリティ研究の地平」(2003年11月29日－30日)、日本文化人類学会

と共催した国際ワークショップ「人類学の複数化とトランスナショナルな関係」(2005年2月13日)のほか、トランスナショナリティ研究グループの特任研究員や大学院生が中心となる「ポスト・ユートピア研究会」主催のシンポジウム、「ポスト・ユートピア / フィールドからのアプローチ」(2005年10月29日−30日)を共催した。国立民族学博物館主催の国際シンポジウム「現代世界における人類学的知識の社会的活用」(2004年10月28日−30日)では渋沢民族学振興基金とともに共催者となり、10月29日の分科会「開発と文化」を担当した。このほか、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の事業の中で、他の研究グループとともに開催したワークショップなどがある。

4) 関連のプロジェクト

本プロジェクトは、コアメンバーが関わる他のいくつものプロジェクトとの協力関係にある。2003年には、小泉潤二が実行委員会副委員長兼事務局長である国際研究集会(FIEALC 2003 OSAKA、ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟第11回大会)を実施するに際し、9月22日開催のトランスナショナリティ研究セミナー——ヘレン・サファ「グローバリゼーションを問い直す——ドミニカ共和国におけるジェンダーと輸出加工労働」——を、FIEALC 2003 OSAKAのプレコングレス・セミナーとして実施した。2002年に、春日直樹を研究代表者として開始した科学研究費補助金による特定領域研究「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」は、中川敏と栗本英世を研究分担者としてその後5年間にわたって実施されてきたが、このプロジェクトにおける調査研究はトランスナショナリティ研究プロジェクトの経験的な、また理論的な研究内容を大幅に豊かにした。2005年に開始した、科学研究費補助金によるプロジェクト「境界の生産性とトランスナショナリティに関する文化人類学的研究」(研究代表者　小泉潤二)は、トランスナショナリティ研究の中から生まれた現地調査プロジェクトである。また、栗本英世は2001年から2004年にかけて、研究代表者として科学研究費補助金によるプロジェクト「難民をめぐる社会・政治的諸力の相互作用——アフリカ北東部・大湖地方における強制移住、国家、国際機関・NGO」および2005年から2008年にかけて「スーダンにおける戦後復興と平和構築の研究」を実施して事例研究を推し進め、トランスナショナリティ研究の重要な部分を占める難民研究と紛争研究に大きな貢献をもたらした。

5) COE特任研究員の招聘・雇用

COE特任研究員は国内外から公募し、以下の3名を採用した。

＊李晓杰 Li Xiaojie　中華人民共和国上海復旦大学中国歴史地理研究所助教授
任期：2003年4月1日～2004年2月29日
研究テーマ：キリスト教宣教師の文化活動と中国政府との軋轢（1830-1900）
＊デレジェ・フェイサ Dereje Feyissa　マックス・プランク社会人類学研究所研究員
任期：2003年5月16日～2005年2月28日
研究テーマ:「近代性のローカル・プロジェクト」と「遠隔地エスニシティ」—アニュワ・ディアスポラの場合
＊田沼幸子
任期：平成16年4月1日～
研究テーマ：「ポスト・ユートピアのキューバ」

本プロジェクトでは、COE研究員を海外学術調査に派遣した。李研究員は、中国の北京と上海で近代中国におけるキリスト教受容に関する文献資料を収集し、デレジェ研究員は、ケニア、スーダン、エチオピア、ドイツ、オランダ、アメリカで、アニュワ人とヌエル人との民族間関係のトランスナショナルな側面に関する調査研究をおこなった。（後者の派遣費用は、科学研究費補助金によるプロジェクト「難民をめぐる社会･政治的諸力の相互作用——アフリカ北東部・大湖地方における強制移住、国家、国際機関・NGO」［研究代表者、栗本英世］によった。）田沼研究員はアメリカにおいてキューバに関する資料の収集・分析を行い、アメリカのカリブ海地域の研究者と意見を交換した。

RA（COE）として採用されたのは、以下の大学院生である。

＊後藤正憲：平成14年11月25日～平成15年2月28日
＊中川　理：平成14年11月25日～平成15年2月28日
＊松川恭子：平成14年11月25日～平成15年2月28日
＊森田良成：平成15年4月1日～平成15年6月30日
＊木村　自：平成15年7月1日～平成16年2月29日
＊加藤敦典：平成16年4月1日～平成17年3月31日
＊上田　達：平成17年5月1日～

6）大学院生の現地調査派遣

若手研究者育成のため、本プロジェクトに関連するテーマの調査研究に従事する本研究科大学院生（博士後期課程）がおこなうフィールドワーク・現地調査に対する助成をおこなった。助成の対象となったのは、平成14年度3名、15年度6名、16年度2名、17年度4名、のべ15名である。

≪院生派遣一覧：氏名、調査国、研究題目≫

平成14年度

黄　蘊（香港・マレーシア）「ペナンにおける教育事情の現地調査」

徐　素娟（中国）「健楽県での『花児』を軸とする民族関係についての現地調査」

森田良成（インドネシア）「クパン市でのティモール人都市生活者についての現地調査」

平成15年度

熊谷高秋（メキシコ）「マヤの木彫りの人類学」

徐　素娟（中国）「中国甘粛省蓮花山地域における多民族間の交流について」

田沼幸子（キューバ）「20世紀におけるキューバ人と外国人（非キューバ人）の結婚に見る『愛』と経済、革命の相互関係の変遷」

黄　蘊（マレーシア）「マレーシア・ペナンの宗教組織と華文教育」

森田良成（インドネシア）「東インドネシア、クパン市における、アトニ人『くず屋』の生活の実践とアイデンティティ」

竹村嘉晃（インド・日本）「インド・日本における『インド古典舞踊』の受容と消費に関する研究」

平成16年度

流川冬子（アメリカ領サモア）「グローバル化と女性の化粧行動の変容——アメリカ領サモアにおける人類学的研究」

岡本由良（ラトビア）「二言語状況における思春期——ラトビアの村落で育つ子どもの言語空間の修辞的考察」

平成17年度

岡本由良（ラトビア）「二言語状況における思春期——ラトビアの村落で育つ子どもの言語空間の修辞的考察（継続）」

早川真悠（ジンバブエ）「トーマス・マプフーモ渡米の意図に関する調査研究」

豊平豪（フィジー）「フィジーの民主主義――『選挙』『投票』に関する人類学的考察」
ウッスィ アラカキ（ブラジル）"Gender and Migration: The Case of Brazilian Nikkeijin Women in Japan"

助成は競争ベースとし、助成希望者に所定の様式の研究計画書を提出させ、教員4名（人類学研究分野のコアメンバー）が審査し選考した。助成を受けた大学院生には研究成果の発表と調査報告書の提出を義務づけた。

7）文献資料の収集とデータベースの構築

平成14年度に、本プロジェクトに関連する英文・和文の書籍を購入し、データベース構築の作業を開始したが、その後予算配分が減少したため、この事業を進めることが困難になった。運営費交付金による資料収集は継続しているが、文献と情報の集積は研究拠点形成にとって不可欠であるため、今後、別の予算によりデータベース化事業を進めなければならない。

8）新しい教育科目

トランスナショナリティ研究プロジェクトと大学院教育を連動させ研究拠点を形成するため、平成14年度より21世紀COE科目の指定を行った。その後カリキュラム自体を改変し、現在の人間科学研究科のカリキュラムには、以下のCOE科目が正式に追加されている。

インターフェイス人類学特講Ⅰ、Ⅱ
インターフェイス人類学特別講義Ⅰ、Ⅱ
インターフェイス文明学特定演習Ⅰ、Ⅱ
インターフェイス文明学特別演習Ⅰ、Ⅱ

9）広報活動と報告書の作成

上記のように、トランスナショナリティ研究プロジェクト、とくにトランスナショナリティ研究セミナーについては、「インターフェイスの人文学」のホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/）の「トランスナショナリティ研究」のページを通じて広報に努めた。これまでに作成した報告書は以下の通りである（詳細は資料3参照）。

『場を越える流れ』(トランスナショナリティ研究1、2003年)
『境界の生産性』(トランスナショナリティ研究2、2004年)
『グローバル化と市民社会』(トランスナショナリティ研究3、2004年)
『〈日本〉を越えて』(トランスナショナリティ研究4、2006年)
『ポスト・ユートピアの民族誌』(トランスナショナリティ研究5、2006年)

10) その他

若手研究者の育成は、21世紀COEプログラムの主要な目的のひとつである。RAとして雇用されたか、あるいはセミナーでの発表を通じて本プロジェクトに参画した博士後期課程の大学院生、および現地調査の助成を受けた大学院生の就職状況は以下の通りである。

(氏名、所属・職)

太田心平　大阪大学大学院人間科学研究科・特任助手
木村　自　国立民族学博物館・機関研究員
黄　　蘊　北陸大学未来創造学部・講師
後藤正憲　北海道大学スラブ研究センター・COE共同研究員
田沼幸子　大阪大学・COE特任研究員
中川　理　大阪大学大学院人間科学研究科・助手
松川恭子　奈良大学社会学部・専任講師

4. 本報告書について

冒頭で本報告書は「最終報告書」であると書いた。しかし「最終」という言葉は、内容にそぐわないところがある。「トランスナショナリティ研究」は、ある一つの(限定のはっきりした)研究領域や問題領域とは言い難い。むしろトランスナショナリティという概念が引き起こすイマジネーションや問題意識、またその概念が現実の見え方に与える影響が重要である。トランスナショナリティ、つまり「トランスナショナル性」という切り口で現代社会を見たときに、何が見えるようになるかが問題である。だから、トランスナショナリティに関わる現象を「綿密に整理」して「秩序だてる」ことはおそらくできないし、この

問題領域をどこまでどの方向に進んでも、「この領域はここまでである」という境界標識が示されるわけではない。トランスナショナリティという概念は、私たちをある方向へ導き続けるだけである。進んでいく中で、さまざまな問題群に光があたる、あるいは結晶化することになる。具体的には、以下のような問題群を考えることができる——境界の生産性、ボーダーの現象学、人の移動の政治経済学、移民・難民の生存戦略論と社会経済学、トランスナショナルな状況下における個人と集団のアイデンティティの再構築、国家間関係と多文化主義、国民国家の変容と再編成、トランスナショナルな介入としての開発・国際協力と人道援助などである。

これらの多様な、しかし相互に関連した問題群は、すでに本研究プロジェクトで検討されてきた。しかし、私たちの認識の深化にともない、問題群自体が変容していく。また、現代世界のトランスナショナルな状況は、日々変動している。この意味では、トランスナショナリティ研究には終わりがない。5年間のプロジェクトとしての21世紀COEプログラムは完了するが、トランスナショナリティ研究プロジェクトには終わりがない、というより終わりがないほうがよい。

だから本報告書は、最終報告というよりは、現在進行中のプロジェクトに関する「現状報告」に近いところがある。しかし、現状報告とはいっても、本報告書にはトランスナショナリティ研究プロジェクトの最良の成果が収められている。

本報告書は、2部構成になっており、それぞれ5編の論文からなる。「トランスナショナリティ研究の展開」と題された第Ⅰ部の5論文は、いずれもトランスナショナリティ研究セミナーでおこなわれた講演がもとになっている。「複数のグローバル化——代替的な(ネイティヴに代わる)トランスナショナルな過程と行為主体」の著者グスタボ・リンス・ヒベイロ博士は、若くしてブラジル人類学会会長となり、現在小泉潤二が代表幹事を務めている人類学会世界協議会(WCAA – World Council of Anthropological Associations)の創設にも主要な役割を果たした人類学者である。「上からの」グローバル化に対抗する、ラディカルな「反グローバル化」と穏健的な「代替グローバル化」という2種類の世界規模の社会運動の展開が、詳細に分析されている。著者がとくに注目しているのは、三つのグローバル化の多様な主体間の、時とともに変化する連帯、共闘、野合の関係である。そして、こうした状況の民族誌的研究の必要性を強調する。後半部分は、「下からの」グローバル化の事例として、ブラジル・パラグアイ・アルゼンチンの三国国境地域で展開している、大

規模な商業活動——国民国家の観点からすれば「密輸」——、およびこの活動の結果として、ブラジルの首都ブラジリアの一画に発展した「パラグアイ・マーケット」の記述と分析にあてられている。本論文はその後ブラジルで出版され、ブラジル政治学会（ABCP）とエーデルシュタイン社会研究センターの「グローバリゼーション研究賞」を与えられた。今後、日本語で書かれた、グローバル化に関する人類学的研究の必読文献のひとつに加えられることになろう。

「グローバル化を問い直す——ドミニカ共和国におけるジェンダーと輸出加工労働」の著者ヘレン・サファ教授は、アメリカにおけるラテンアメリカ・カリブ海研究のリーダーのひとりであり、世界最大のラテンアメリカ研究学会（LASA – Latin American Studies Association）の会長も務めた。労働移民や、賃金労働の展開にともなう家族関係やジェンダー関係の変容を主要なテーマに調査研究を続けてきている。本論文では、経済の自由化の結果、ドミニカ共和国に設置された「自由貿易特区」の外国資本の工場における女性労働者の問題が、過去の調査データと比較しながら論じられている。「グローバル・スタンダード」からはほど遠い、いまだに劣悪なドミニカの女性労働者の雇用条件や、アメリカ本国における経済の自由化のネガティヴなインパクトなど、グローバル化の影の部分にも焦点があてられている。

「トランスナショナリズム研究の課題——人類学の観点から」（上杉富之）は、「トランスナショナリズム研究」というジャンルの成立と展開を、欧米の文献を参照しつつ、明快に論じたものである。上杉教授は、人類学からトランスナショナリズムにアプローチするには、たんに「国境を越える」という意味でのトランスナショナルな現象に注目するだけではなく、多重的な帰属や多元的ネットワークを問題化していく必要があると主張している。

ヴァレンタイン・ダニエル教授は、アメリカで大学院教育を受け、コロンビア大学の教授を勤めるスリランカ人人類学者である。母国の暴力的な民族紛争や難民問題について、すぐれた論考を発表している。「歴史、アイデンティティ、記憶の巻きついた力」は、著者自身が経験したエピソードに基づきながら、植民地の支配者であったイギリス人と現地人と、シンハラ人とタミール人とのあいだの屈辱的な個別の記憶が、時間を経て暴力的な行為として発現するメカニズムが説得的に論じられている。通底するテーマは、人種や民族の境界を超えた対話の困難性である。しかし、著者は和解や共存への希望を捨ててはいない。扱われている事例は血塗られた暴力的なものだが、ヘーゲルやニーチェを引用した

議論の知的洗練の度合いは群をぬいている。民族誌と理論の両立が達成された卓越した論考である。

「『再魔術化する世界』をめぐって」の著者、山之内靖教授は、マルクス、ウェーバー、ニーチェなどに関する長年の研究で著名な社会科学者である。トランスナショナリティ研究セミナーの講演では、19世紀末から20世紀初頭に形成された知的伝統に依拠しつつも、その批判的再読によってグローバル化という21世紀の問題を縦横に論じた。その知的関心の若々しさは印象的であった。山之内教授の魅力的な語り口をそこなわないため、本論文は講演録にほとんど手を加えず、質疑応答もそのまま収録したことをお断りしておく。

第Ⅱ部「ローカリティを超えて——事例研究」には、若手研究者5名のフィールドワークに基づく論考が収録されている。最初の論文の著者、植村清加氏は、成城大学常民文化研究所の研究員である。他の4名は大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究分野の大学院生、あるいは元大学院生である。若手研究者とのネットワーク形成と、若手研究者の養成は、トランスナショナリティ研究プロジェクトの優先課題であったから、第Ⅱ部はその成果の一端である。

「マグレブ系移民とフランス——＜ローカリティ＞のかたち」（植村清加）は、パリ郊外に居住する北アフリカからの移民を調査対象に、共和国の理念と現実、市民と移民の境界、移民の社会的ネットワークなどを主題として論じたものである。明確な境界では区切られていない、トランスナショナルな「ローカリティ」のあり方の議論は興味深い。

「モンゴル・ウランバートル市におけるトランスナショナルな場の生成」で著者の西垣有は、ポスト社会主義時代のモンゴル国の首都における居住空間の変容を問題としている。土地制度の変革、経済の自由化、海外からの送金、開発援助など、さまざまな変化のモメントのからまりあいを分析することで、あらたな社会空間生成の解明を目指している。

インドのある地域で伝承されてきた「伝統儀礼」も、ナショナル、トランスナショナルな文脈の変化のなかで、その形式と内容を劇的に変容させつつある。「『アニヤラ』から『カクテル・パーティー』へ——海外に登場するインドの儀礼パフォーマンス」（竹村嘉晃）は、「テイヤム儀礼」に生じている現在進行中のダイナミズムの分析である。

華人研究は、日本における移民研究のなかで重要な位置を占めている。「マレーシアにおける徳教（dejiao）の展開——華人新興宗教の一形態」（黄蘊）は、この領域における貢献のひとつである。起源は近代はじめの中国にあるが、むしろ華人の移動先で発展した新興宗教「徳教」の発展のあり方を、マレーシアの事例をもとに論じている。

「周辺世界における農民と廃品回収業——東インドネシア、西ティモールの事例」(森田良成)は、本報告書のなかで、唯一「モノ」に焦点をあてた論文である。発展途上国インドネシアのなかでももっとも周辺に位置する西ティモールにおける、出稼ぎ農民が営む廃品回収業を詳細に描くことによって、貧しくはあるがある程度の自律性は維持している地方農民の生き方の意味を問いかけている。

5. おわりに——制度的な成果

大阪大学は2007年4月に、グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)を設置する。国際協力と共生社会のための研究と教育と実践を行うために新設されるこのセンターは、大阪大学と大阪外国語大学との統合による組織再編の一環であるが、トランスナショナリティ研究プロジェクトが進めてきた拠点形成事業に基づくところが大きい。少なくともこれまでの拠点形成の推進がなければ、新センターの形態や規模は大きく異なるものとなったはずである。その意味でこのセンターは、トランスナショナリティ研究プロジェクトの制度的な成果である。本章を閉じるにあたり、グローバルコラボレーションセンターを基盤として、トランスナショナリティ研究プロジェクトの関心と活動が、国際協力のための研究や実践とともにさらに発展していくことを希望したい。

[こいずみじゅんじ・大阪大学大学院人間科学研究科教授]

[くりもとえいせい・大阪大学大学院人間科学研究科教授]

資料1. トランスナショナリティ研究セミナー開催記録

講演者の所属・職名はすべて講演当時。
※印を付した報告は、本書を含めたトランスナショナリティ研究班の報告書に収録。これまでに刊行された報告書については資料3を参照のこと。

＊第1回（2002年12月20日）
吉原和男（慶應義塾大学文学部・教授）
「同姓団体による文化復興運動——タイ人華人社会の事例」（※）
＊第2回（2003年2月21日）
伊豫谷登士翁（一橋大学大学院社会学研究科・教授）
「グローバリゼーション・スタディーズの課題」（※）
＊第3回（2003年3月6日）
石川　登（京都大学東南アジア研究センター・助教授）
「東南アジア島嶼部のフロンティア空間——ボルネオ島西部インドネシア／マレーシア国境地帯からの視点」（※）
＊第4回（2003年3月14日）
田中雅一（京都大学人文科学研究所・助教授）
「もうひとつの在日——米軍基地の人類学的研究をめぐって」（※）
＊第5回（2003年3月28日）
竹沢泰子（京都大学人文科学研究所・助教授）（※）
「今ふたたび、人種とは何か——現代の人種主義を見つめるために」
＊第6回（2003年4月18日）
赤嶺　淳（名古屋市立大学・助教授）
「海域アジア史構築の可能性」（※）
＊第7回（2003年5月9日）
ケイ・ウォレン Kay B. Warren（ハーバード大学人類学部・教授）
「暴力と開発——中南米、中部アフリカ、南アジアの事例」（英語講演）
Violence and Development: Case Studies from Central and South America, Central Africa, and

South Asia.

＊第8回（2003年5月30日）

陳　天璽（国立民族学博物館・助教授）

「越境する華人たちを見つめる目」（※）

＊第9回（2003年6月13日）

エイミー・ボロヴォイ Amy Borovoy（プリンストン大学東アジア研究学部・助教授）

「日本研究と〈日本人の自我〉の人類学――日米の対話」（英語講演）

Japan Studies and the Anthropology of the Japanese Self: Dialogues between Japan and the U.S..

＊第10回（2003年6月20日）

デレジェ・フェイサ Dereje Feyissa（大阪大学21世紀COEプログラム・COE特任研究員）

「論争を超えて――エスニシティ研究の経験論的再考」（英語講演）（※）

Conflict and the Politics of Identity: The Trans-National Dimension of Anywaa-Nuer Conflict.

＊第11回（2003年6月27日）

齋藤千恵（南山大学人類学研究所・研究員）

「トランスナショナル・コミュニティにおけるエスニシティの形成――二つのナショナル・イデオロギーと移民のストラテジー」（※）

＊第12回（2003年9月19日）

藤巻正巳（立命館大学文学部・教授）

「熱帯のメトロポリス――クアラルンプルのエスノスケープの変容とトランスナショナリティ」

＊第13回（2003年9月22日）

ヘレン・サファ Helen Safa（フロリダ大学人類学部、ラテンアメリカ・カリブ海研究所・名誉教授）

「グローバリゼーションを問い直す――ドミニカ共和国におけるジェンダーと輸出加工労働」（英語講演）（※）

Questioning Globalization: Gender and Export Processing in the Dominican Republic.

（ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟第11回大会（FIEALC 2003 OSAKA）プレコングレス・セミナーを兼ねる）

＊第14回（2003年10月14日）

クラウディオ・ロムニッツ Claudio Lomnitz（シカゴ大学歴史学部／人類学部・教授）

「危機の時代——歴史性、犠牲、メキシコシティにおける壮大なる失態」(英語講演)

Times of Crisis: Historicity, Sacrifice, and the Spectacle of the Debacle in Mexico City.

＊第15回 (2003年10月24日)

駒井　洋 (筑波大学社会学系・教授)

「日本型多文化主義の可能性」(※)

＊第16回 (2003年10月31日)

川上郁雄 (早稲田大学日本語研究教育センター／大学院日本語教育研究科・教授)

「越境する家族——在豪ベトナム系住民と在日ベトナム系住民の比較研究」(※)

＊第17回 (2003年11月14日)

トーマス・P・ギル Thomas P. Gill (明治学院大学国際学部・助教授)

「ホームレス文化——野宿対策の日米英比較」(※)

＊第18回 (2003年11月26日)

ハルミ・ベフ Harumi Befu (スタンフォード大学・名誉教授)

「外国人労働者が変える日本文化論」(※)

＊第19回 (2003年12月5日)

花渕馨也 (北海道医療大学・講師)

「密航する女性たち——コモロにおけるポストコロニアルな欲望と戦略」

＊第20回 (2004年1月23日)

ウルフ・ハナーズ Ulf Hannerz (ストックホルム大学・教授)

「コスモポリタニズム再考——文化と政治」(英語講演)

Rethinking Cosmopolitanism: Culture and Politics.

＊第21回 (2004年1月30日)

ロジャー・グッドマン Roger Goodman (オクスフォード大学現代日本研究・教授)

「日本における児童虐待問題——児童虐待の『発見』と防止策の展開」(※)

＊第22回 (2004年2月13日)

デレジェ・フェイサ Dereje Feyissa (大阪大学21世紀COEプログラム・COE特任研究員)

「トランスナショナル・エスニシティ——権威付与のエスニックな政治学における、グローバルな正当化ディスコースの流用」(英語講演)

Transnational Ethnicity: Appropriation of Global Legitimizing Discourses in the Politics of Ethnic Entitlement.

＊第23回（2004年2月19日）

李　暁傑 Li Xiaojie（大阪大学21世紀COEプログラム・COE特任研究員、復旦大学中国歴史地理研究所・助教授）

「衝撃と反応——1807年から1899年におけるキリスト教宣教師の活動と中国政府との軋轢」（英語講演）

The Impact and the Response: The Christian Missionaries' Activities and Their Conflicts with the Chinese Government, 1807-1899.

＊第24回（2004年4月23日）

渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科 ボランティア人間科学講座・助教授）

「災害ボランティアのトランスナショナリティ——阪神・淡路大震災の被災地から考える」

＊第25回（2004年5月14日）

武内進一（日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター　国際関係・紛争研究グループ長代理）

「アフリカの紛争とトランスナショナリティ」

＊第26回（2004年5月21日）

加藤敦典（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程　大阪大学21世紀COEプログラム・RA）

「ベトナム農村における民事紛争調停の実践——トランスナショナル状況における国民国家と村落」

田沼幸子（大阪大学21世紀COEプログラム・COE特任研究員）

「話せないことを語る：cuento（クエント）から見る現代キューバ」

＊第27回（2004年6月4日）

クウェシ・クァ・プラー Kwesi Kwaa Prah（アフリカ社会高等研究所・所長）

「アフリカ——アラブの境界地域におけるナショナリズム、市民権、コンフリクト」（英語講演）

Nationalism, Citizenship and Conflict in the Afro-Arab Borderlands.

＊第28回（2004年6月11日）

ヴァレンタイン・ダニエル E. Valentine Daniel（コロンビア大学・教授）

「難民：避難に関する言説」（英語講演）（※）

Refugees: A Discourse on Displacement.

＊第29回（2004年7月2日）

稲賀繁美（国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学・教授）

「岡倉天心とインド——越境する近代国民意識と汎アジア・イデオロギーの帰趨」

＊第30回（2004年7月9日）

ニティ・パワカパン Niti Pawakapan（シンガポール大学人文社会学部東南アジア研究科・助教授）

「タイ・ビルマ国境地域における交易と密輸」（英語講演）

Trade and Smuggling in the Thailand-Burma Borderlands.

＊第31回（2004年7月16日）

箕浦康子（お茶の水女子大学・客員教授）

「親の海外駐在と子ども——在外日本人児童と在日インターナショナルスクールの調査から」（※）

＊第32回（2004年7月17日）

前川啓治（筑波大学大学院人文社会科学研究科国際政治経済学専攻・教授）

「人類学と国際文化論ないし政治経済学」

＊第33回（2004年7月24日）

山之内 靖（フェリス女学院大学国際交流学部・名誉教授）

「『再魔術化する世界』をめぐって」（※）

＊第34回（2004年9月28日）

マルクス・S・シュルツ Markus S. Schulz（ニューヨーク大学ラテンアメリカ・カリブ研究センター・講師）

「サパティスタのトランスナショナル・ネットワーク」（英語講演）

The Transnational Network of the Zapatistas.

＊第35回（2004年10月1日）

デイヴィッド・ブレイク・ウィリス David Blake Willis（相愛大学人文学部・教授）

「太平洋におけるクレオール時代——トランスナショナル日本と境界地域のクレオール化についての覚書」（英語講演）（※）

Creole Times in the Pacific: Notes on Creolization for Transnational Japan and Her Borderlands.

＊第36回（2004年10月15日）

志水宏吉（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

「学校文化とエスニシティ——ニューカマー外国人への教育支援をめぐって」(※)

＊第37回（2004年10月26日）

アンソニー・リード Anthony John Stanhope Reid（シンガポール国立大学アジア研究所・所長）

「インドネシア、イスラーム、アチェー」(英語講演)

Indonesia, Islam and Aceh.

＊第38回（2004年11月5日）

オラディン・E・ボラグ Uradyn E. Bulag（ニューヨーク市立大学・助教授）

「チンギス・ハーンの頭蓋骨と魂を狩る——歴史・イデオロギー・人種的イメージのなかのユーラシア辺境地帯」(英語講演)

Hunting Chinggis Khan's Skull and Soul: Eurasian Frontiers of Historical, Ideological and Racial Imaginations.

＊第39回（2004年11月12日）

藤川隆男（大阪大学大学院文学研究科・教授）

「1850年代のオーストラリアの反中国人運動における先住民の忘却」

＊第40回（2004年11月19日）

河村哲二（武蔵大学経済学部・教授）

「グローバリゼーションとアメリカ経済」

＊第41回（2004年11月26日）

太田心平（日本学術振興会特別研究員）

「『絶望移民』を生む力——現代韓国における386世代の感情生成について」

＊第42回（2004年12月3日）

岩渕功一（早稲田大学国際教養学部・助教授）

「トランスナショナルな現象を社会学、人類学、民俗学、歴史学を横断する視点から読み解くために」(※)

（第4回「イメージとしての〈日本〉」研究ワークショップと共催）

＊第43回（2004年12月10日）

井野瀬久美惠（甲南大学文学部・教授）

「大英帝国という歴史空間を再考する——サラ・フォーブス・ボネッタはどう語られた

のか」

＊第44回（2004年12月17日）

コスタス・ラパヴィツァスCostas Lapavitsas（ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院法社会科学部・助教授）

「貨幣と信用の構成要素としての権力と信頼」（英語講演）

Power and Trust as Constituents of Money and Credit.

＊第45回（2005年1月28日）

ミリー・クレイトンMillie Creighton（ブリティッシュ・コロンビア大学人類学・社会学科・助教授）

「日本人性を想像し、日系を定義する——日系人のトランスナショナルなネットワーキング」（英語講演）

Imaging Japaneseness, Defining Nikkei: The Transnational Networking of People of Japanese Descent.

＊第46回（2005年2月18日）

グスタボ・リンス・ヒベイロGustavo Lins Ribeiro（ブラジリア大学人類学部・準教授）

「複数のグローバル化——<ネイティヴにかわる>トランスナショナルな行為者たち」（英語講演）（※）

Other Globalizations: Alter-native Transnational Agents.

＊第47回（2005年3月4日）

アユミ・タケナカ Ayumi Takenaka（ブリン・モア・カレッジ・助教授）

「再移民——なぜ、移民たちは日本や英国からアメリカを目指すのか」（英語講演）

Secondary Migration: Why Do Immigrants Re-migrate from Japan and the U.K. to the U.S.?

＊第48回（2005年3月22日）

マルティン・リーゼブロットMartin Riesebrodt（シカゴ大学社会学部・神学部・教授）

「『宗教概念』の関係的正当化にむけて」（英語講演）

Towards a Relational Legitimation of the Concept of "Religion."

＊第49回（2005年4月22日）

時安邦治（学習院女子大学国際文化交流学部・助教授）

公開講座・連続セミナー「グローバル化とシティズンシップ」第1回

「多文化的シティズンシップをめぐって」

＊第50回（2005年5月13日）

近藤英俊（関西外国語大学・特任助教授）

「オカルトモダニティー——アフリカにおける「呪術の近代」論再考」

＊第51回（2005年5月27日）

植村清加（成城大学民俗学研究所・研究員）

「マグレブ系移民とフランス——ローカリティとその拡張」（※）

＊第52回（2005年6月3日）

亀山俊朗（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

公開講座・連続セミナー「グローバル化とシティズンシップ」第2回

「近代的シティズンシップ概念の限界と可能性」

＊第53回（2005年6月17日）

渡辺　靖（慶應義塾大学環境情報学部・助教授）

「『アフターアメリカ』再訪」

＊第54回（2005年6月24日）

クリス・グレゴリー Chris Gregory（オーストラリア国立大学・準教授）

「トランスナショナルなプロセス——人類学理論の持続可能性と危機」（英語講演）

Transnational Processes, Sustainability and the Crisis in Anthropological Theory.

＊第55回（2005年6月27日）

宮崎広和（コーネル大学人類学科・助教授）

「知の技法としてのアービトラージ——贈与論と金融工学における複製・反復・希望」

＊第56回（2005年6月30日）

シュテフィ・リヒター Steffi Richter（ライプチヒ大学東アジア研究所日本学科・主任教授）

「趣味の競演、日本的身体の造形——三越デパートと近代的アイデンティティの『デパート化』」（英語講演）

Contesting Good Taste, Shaping Japanese Bodies: The Department Store Mitsukoshi and the "Departmentalization" of Modern Identities.

＊第57回（2005年7月1日）

宮崎恒二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

「境域とその変遷——サバ（マレーシア）における人の移動」

＊第58回（2005年7月8日）

ダリウシュ・ツィフォヌンDariuš Zifonun（コンスタンツ大学歴史学・社会学部・助教授）
「移民時代の社会学——概念的問題に対する取り組みと実証的研究による発見」（英語講演）
Sociology in the Age of Migration: Conceptual Issues and Empirical Findings.

＊第59回（2005年7月15日）
アルベルト・カンブロッシオ Alberto Cambrosio（マッギル大学医学部・医学の社会研究学科・教授）
「グローバリゼーション時代における生物医学ネットワーク」（英語講演）
Biomedical Networks in an Era of Globalization.

＊第60回（2005年7月22日）
三尾裕子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授）
「越境とアイデンティティ——中国系移民の「土着化」を中心に」

＊第61回（2005年10月7日）
渋谷　努（東北学院大学文学部・非常勤講師）
「パリ『郊外』での移民出身者を中心とした地域団体——地域意識の醸成過程に関する試論」

＊第62回（2005年10月14日）
縄田浩志（鳥取大学乾燥地研究センター総合的砂漠化対処部門・講師）
「アラビア半島と北東アフリカを結ぶレース用ラクダの生産と交易ネットワーク」

＊第63回（2005年10月21日）
上杉富之（成城大学文芸学部及び大学院文学研究科・教授）
「人類学から見たトランスナショナリズム研究——研究の成立と展開および今後の可能性」（※）

＊第64回（2005年11月11日）
土佐弘之（神戸大学大学院国際協力研究科・教授）
「倫理の跛行的グローバリゼーション——アフリカの人道的危機と国際社会」
（日本アフリカ学会関西支部例会を兼ねる）

＊第65回（2005年11月18日）
小田博志（北海道大学大学院文学研究科・助教授）
「他者を迎え入れる社会——異人歓待、アジール、入国管理」

＊第66回（2005年11月25日）

関　嘉寛（大阪大学コミュニケーションデザインセンター（CSCD）・助手）

公開講座・連続セミナー「グローバル化とシティズンシップ」第3回

「リスクのグローバル化と減災——被災者の人権を考える」

＊第67回（2005年12月2日）

樋口明彦（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

公開講座・連続セミナー「グローバル化とシティズンシップ」第4回

「社会的包摂と正義——グローバル化時代の2つの世界、2つの規範」

＊第68回（2005年12月9日）

トマス・ロイター Thomas Reuter（メルボルン大学人類学・地理学・環境研究学部／「エリザベス二世」上級研究員／オーストラリア人類学会前会長）

「2002年テロ攻撃以後のインドネシア・バリにおける新たな文化復興運動」（英語講演）

Globalisation and Regionalism: The Rise of a New Cultural Revival Movement in Bali, Indonesia, after the 2002 Terror Attack.

＊第69回（2006年1月27日）

出口　顯（島根大学法文学部社会文化学科・教授）

「スウェーデンの国際養子とアイデンティティ」

＊第70回（2006年2月10日）

イヤル・ベン アリ Eyal Ben-Ari（エルサレム・ヘブライ大学社会学・文化人類学科・教授）

「『人権』と『精密戦争』——アル-アクサ・インティファーダにおける犠牲者、イスラエル軍、グローバルな言説」（英語講演）

"Human Rights" and "Precision Warfare": Casualties, the Israeli Military and Global Discourses in the Al-Aqsa Intifada.

＊第71回（2006年2月24日）

内海博文（大阪大学大学院人間科学研究科・特任助手）

公開講座・連続セミナー「グローバル化とシティズンシップ」第5回

「人間の安全保障と秩序問題の現在——9.11以後の、2つのトランスナショナルな政治的秩序をてがかりに」

＊第72回（2006年3月10日）

報告1：シャリニ・ランデリア Shalini Randeria（チューリヒ大学・教授）

「新しいグローバルな構成の説明無責任性——狡猾な国家、国際機構、市民社会」(英語講演)

The New Global Architecture of Unaccountability: Cunning States, International Organisations and Civil Society.

報告2：ママドゥ・ディアワラ Mamadou Diawara (フランクフルト大学・教授)

「グローバルな歌い手——アフリカのローカル音楽とトランスナショナルな演奏家の出現」(英語講演)

Global Singers: Local Music in Africa and the Rise of Transnational Players.

＊第73回 (2006年4月21日)

厚東洋輔 (大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

「グローバリゼーションと社会概念の変容」

＊第74回 (2006年5月26日)

ジョン・リー John Lie (カリフォルニア大学バークレイ校社会学部・教授／国際・地域研究所長)

「ディアスポラのナショナリズム」(英語講演)

Diasporic Nationalism

＊第75回 (2006年5月26日)

ファトゥ・ソウ Fatou Sow (フランス国立学術研究センター (CNRS) 研究員・シェイク・アンタ・ディオップ大学準研究員)

「グローバリゼーションの文脈でアフリカ開発を再考する——もしジェンダーが問題になるならば」(英語講演)

Re-thinking African Development in the Context of Globalization: And if Gender Mattered.

(日本アフリカ学会第43回学術大会プレイヴェントを兼ねる)

＊第76回 (2006年6月16日)

三島憲一 (東京経済大学経済学部・教授)

「ドイツの外国人労働者をめぐる議論——現代の社会統合における文化論的錯覚について」

＊第77回 (2006年6月26日)

アンナ・ツィン Anna Lowenhaupt Tsing (カリフォルニア大学サンタクルーズ校・教授)

「先住民の声」(英語講演)

Indigenous Voice.

＊第78回（2006年7月7日）

小泉潤二（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

「『トランスナショナリティ』という問題群——グアテマラ北西部の30年から」

＊第79回（2006年10月20日）

ヴォルフガング・シュヴェントカー Wolfgang Schwentker（大阪大学大学院人間科学研究科・助教授）

「二十世紀におけるメガシティの誕生」

＊第80回（2006年11月2日）

石田慎一郎（日本学術振興会特別研究員）

「ADRの技術移転と多元的法体制の再編——ケニアの事例を中心に」（「臨床と対話」班と共催）

＊第81回（2006年11月17日）

木前利秋（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

「グローバル化の下での人権とシティズンシップ」

＊第82回（2006年12月22日）

真島一郎（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授）

「中間集団とトランスナショナリティ——《社会・体・倫理》の忘却にまつわる人類学史から」

＊第83回（2007年2月9日）

赤尾光春（北海道大学スラブ研究センター・研究員）

「講演タイトル未定」

＊第84回（2007年2月14日）

フランク・ハイデマン Frank Heinemann（ミュンヘン大学文化科学研究科・教授）

「講演タイトル未定」

＊第85回（2007年2月23日）

宮武公夫（北海道大学大学院文学研究科・教授）

「講演タイトル未定」

資料2. ワークショップとシンポジウムの開催記録

発表者・コメンテイターの所属・職名はすべて講演当時。
△印を付した報告は、本書を含めたトランスナショナリティ研究報告書に収録。これまでに刊行された報告書については資料3を参照のこと。

●トランスナショナリティ研究ワークショップ
「トランスナショナリティ研究の地平」(準備ワークショップ)
2003年7月15日～16日
会場：千里阪急ホテル

＊池田光穂（熊本大学文学部・教授）
「コスモポリタン再考——医療と統治術のはざまで」
＊石川　登（京都大学東南アジア研究センター・助教授）
「東南アジア島嶼部のフロンティア空間——ボルネオ島西部インドネシア／マレーシア国境地帯からの視点」
＊大塚和夫（東京都立大学人文学部・教授）
「イスラームとトランスナショナリティ——スワヒリ地域ラム島の事例を中心に」
＊春日直樹（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
「『僕たちは海、僕たちは大洋』」
＊栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
「難民・国内避難民の民族誌とトランスナショナリティ研究」
＊小泉潤二（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
「トランス『ナショナル』であること——国境を越える人類学者とODA」
＊中川　敏（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
「境界を越えるお金——送金から贈与へ」
＊山下晋司（東京大学大学院総合文化研究所・教授）
「国境を越える女性たち——バリ・カリフォルニア・日本」

●トランスナショナリティ研究シンポジウム「トランスナショナリティ研究の地平」
2003年11月29〜30日
大阪大学大学院人間科学研究科

「院生によるプレシンポ」
〈発表者〉
竹村嘉晃（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）（△）
中井潤子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程）（△）
中川　理（日本学術振興会特別研究員・大阪大学）（△）
松川恭子（日本学術振興会特別研究員・京都大学）（△）
山田仁史（京都造形芸術大学・非常勤講師）（△）
〈コメンテーター〉
村田晶子（総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程）
真鍋昌賢（大阪大学文学研究科・助手）

11月29日（土）
【セッション1】座長：小泉潤二
報告1：石川　登
「東南アジア島嶼部のフロンティア空間——ボルネオ島西部インドネシア／マレーシア国境地帯からの視点」（△）
報告2：中川敏
「境界を越えるお金——送金から贈与へ」（△）
【セッション2】座長：栗本英世
報告3：春日直樹
「『僕たちは海、僕たちは大洋』」（△）
報告4：山下晋司
「国境を越える女性たち——バリ・カリフォルニア・日本」（△）
報告5：大塚和夫
「イスラームとトランスナショナリティ——スワヒリ地域ラム島の事例を中心に」（△）
中間討論（座長：栗本英世）

11月30日（日）

【セッション3】座長：春日直樹

報告6：栗本英世

「難民キャンプという空間——ケニア・カクマにおけるトランスナショナリティの管理と囲い込み」(△)

報告7：池田光穂

「移民・難民・人類学者——グローバリゼーションとグアテマラ」(△)

報告8：小泉潤二

「トランス『ナショナル』であること——国境を越える人類学者とODA」(△)

総括討論（座長：小泉潤二）

●大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」ワークショップ

「地域から、地域を超えて——研究の視座を求めて」（トランスナショナリティ研究）

2004年12月20～21日

大阪大学中之島センター

1）発表者（所属・職）

小泉潤二　大阪大学大学院人間科学研究科・教授

春日直樹　大阪大学大学院人間科学研究科・教授

中川　敏　大阪大学大学院人間科学研究科・教授

栗本英世　大阪大学大学院人間科学研究科・教授

杉原　薫　大阪大学大学院経済学研究科・教授

足立　明　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

臼杵　陽　国立民族学博物館・地域研究企画交流センター・教授

黒木英充　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授

●国際シンポジウム「現代世界における人類学的知識の社会的活用」

主催：国立民族学博物館

共催：渋沢民族学振興基金、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

後援：日本文化人類学会

2004年10月28日～30日

（トランスナショナリティ研究プロジェクトは分科会5「開発と文化」を担当）

(1) 国際シンポジウム

会期：10月28、29日、会場：国立民族学博物館第4セミナー室

10月28日（木）

・オープニングアドレス：山下晋司（東京大学大学院・教授）

・基調講演：William Beeman（ブラウン大学・教授）

"*Learning to Live in One World*: Margaret Mead's Unfinished Work and its Wisdom for the International Community"

・分科会1「子どもとメディア」

座長：箕浦康子（お茶の水女子大学・客員教授）

パネリスト：趙韓恵淨（延世大学校・教授）、白石さや（東京大学大学院・教授）、松田美佐（中央大学・助教授）

・分科会2「民族誌映画の活用」

座長：大森康宏（国立民族学博物館・教授）

パネリスト：Wilton S. Dillon（スミソニアン協会・名誉教授）、永渕康之（名古屋工業大学大学院・助教授）、宮坂敬造（慶應義塾大学・教授）

10月29日（金）

・分科会3「男性と女性」

座長：山本真鳥（法政大学・教授）

パネリスト：Glenda S. Roberts（早稲田大学大学院・教授）、窪田幸子（広島大学・助教授）、菅原和孝（京都大学大学院・教授）

・分科会4「文化と政策」

座長：桑山敬己（北海道大学大学院・教授）

パネリスト：韓　敬九（韓国国民大学校・教授）、菊地　暁（京都大学・助手）、住原則也（天理大学・教授）

・分科会5「開発と文化」

座長：小泉潤二（大阪大学大学院・教授）

パネリスト：Kay Warren（ブラウン大学・教授）、池田光穂（熊本大学・教授）、鈴木紀

（千葉大学・助教授）

・「総括セッション」

座長：田村克己（国立民族学博物館・教授）

総括：波平恵美子（お茶の水女子大学・教授）

(2) 公開シンポジウム「現代世界の文化人類学：社会との連携を求めて」

10月30日（土）

・基調講演：Catherine Bateson（文化関係研究所・所長）

"An Anthropology for the Future"

・パネルディスカッション

パネリスト：山下晋司、箕浦康子、大森康宏、山本真鳥、桑山敬己、小泉潤二、波平恵美子

(3) 関連事業　マーガレット・ミードに関する上映会——ジャン・ルーシュが描くミード像

"Margaret Mead: A Portrait by a Friend"

●COEワークショップ「人類学の複数化とトランスナショナルな関係」

World Anthropologies and Transnational Relations

共催：日本文化人類学会

2005年2月13日、大阪大学中之島センター

第Ⅰ部

・基調講演 グスタボ・リンス・ヒベイロ Gustavo Lins Ribeiro（ブラジル人類学会会長／ブラジリア大学人類学部・アメリカ比較研究所・準教授）

「世界の人類学：現代人類学における国際政治（コスモポリティクス）、権力、理論」

World Anthropologies: Cosmopolitics, Power and Theory in Contemporary Anthropology

第Ⅱ部

・討論　「人類学の複数化と人類学会世界協議会（WCAA）の設立」

司会：小泉潤二（大阪大学・日本文化人類学会国際連携委員会委員長）

基調講演者：グスタボ・リンス・ヒベイロ（ブラジリア大学）

パネル：石川登（京都大学）、ジェリー・イーズ（立命館アジア太平洋大学）、栗本英世（大阪大学）、竹沢尚一郎（国立民族学博物館）、横山廣子（国立民族学博物館）（以上、日本文化人類学会国際連携委員会委員）、春日直樹（大阪大学）、桑山敬己（北海道大学）、中川敏（大阪大学）

●国際シンポジウム＜宗教・世俗主義・公共圏＞

Religions, Secularism, and Public Sphere

主催：国立民族学博物館

共催：大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」トランスナショナリティ研究プロジェクト

2005年3月24日、国立民族学博物館

・討論発題者

Talal Asad（ニューヨーク市立大学・教授）

大澤真幸（京都大学・教授）

臼杵　陽（国立民族学博物館地域研究企画交流センター・教授）

●ポスト・ユートピア研究会シンポジウム

「ポスト・ユートピア: フィールドからのアプローチ」

共催: 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」トランスナショナリティ研究プロジェクト

2005年10月29日－30日、大阪大学大学院人間科学研究科

10月29日

「様々な『ポスト』、様々な『ユートピア』」（田沼幸子）（△）

「地に呪われた者は立ち上がったのか」（石塚道子）（△）

「遠き眺め ― マレーシア・ナショナリズムの語り方」（上田達）（△）

「革命的なプランの跡で、希望なき民主主義へ？―― ベトナムにおける村落民主のゆくえ」（加藤敦典）（△）

「新しい社会的リアリティをつくる——フランスにおける相互扶助アソシアシオンの事例」(中川理)(△)

「いまそこにあるユートピア——ある労働者地下組織と『民主化』前後の韓国」(太田心平)

映画　『インタビュー』(Intervista)(25分) 上映

「映画『インタビュー』について」(大杉高司)(△)

＜コメント＞　冨山一郎 (△)

10月30日

「塗り込められた記憶——ニカラグア壁画運動の周辺から」(佐々木祐)(△)

「YUMA — ハバナで望む、ここではないどこか、私ではない誰か」(田沼幸子)(△)

「贈与と商品、反復と差異」(春日直樹)(△)

「"vivre au paradis"——移動、イスラーム『回帰』、フランス市民社会」(植村清加)(△)

「同床異夢——共産党根拠地延安 (1937年) の賀子珍、アグネス・スメドレー、呉広恵」(佐々木一惠)(△)

「教育に託した開発／発展への夢——内戦、離散とパリ人」(栗本英世)(△)

＜コメント＞　松田素二 (△)

資料3. トランスナショナリティ研究プロジェクト成果報告書収録論文

●『場を越える流れ』(トランスナショナリティ研究1、2003年)

責任編集：小泉潤二、栗本英世

はじめに——「トランスナショナリティ研究」の企画と運営、「トランスナショナリティ研究プロジェクト」の誕生　小泉潤二・栗本英世

第1部　研究領域の脱構築と創造

伊豫谷登士翁「グローバリゼーション・スタディーズの課題」

田中雅一「もうひとつの在日——米軍基地の人類学的研究をめぐって」

エイミー・ボロヴォイ「日本研究と日本人の自我の人類学——日米の対話」

田沼幸子「クバーナは解放されたか——革命キューバのジェンダー／人類学研究に関す

る一考察」

第2部　基礎概念の再検討——人種、エスニック集団、エスニシティ

竹沢泰子「今ふたたび、人種とは何か——現代の人種主義を見つめるために」

デレジェ・フェイサ「論争を越えて——エスニシティ研究の経験論的再考」

第3部　移動、アイデンティティ、トランスナショナリティ

吉原和男「同姓団体による文化復興運動——タイ華人社会の事例からトランスナショナリティを考える」

陳天璽「越境する華人たちを見つめる目」

斎藤千恵「トランスナショナル・コミュニティにおけるエスニシティの形成——二つのナショナル・イデオロギーと移民のストラテジー」

黄蘊「マレーシア・ペナンの宗教組織と華文教育に関する人類学的研究の課題と展望」

太田心平「蜜柑のシニフィエ——北済州住民の語りに見る在日同胞についての試論」

木村自「移民コミュニティにおける宗教実践上の差異と調整——台湾ムスリム社会における泰緬ムスリム/外省人ムスリム間の差異を事例として」

第4部　地域からの視点とトランスナショナリティ研究

石川登「東南アジア島嶼部のフロンティア空間——ボルネオ島西部インドネシア / マレーシア国境地帯からの視点」

赤嶺淳「海域アジア史構築の可能性——わたしの地域研究法」

森田良成「東インドネシア、クパンにおけるくず屋の生活の実践」

あとがき　小泉潤二

●『境界の生産性』(トランスナショナリティ研究2、2004年)

責任編集：小泉潤二、栗本英世

はじめに——本報告書について　小泉潤二・栗本英世

第1部

石川登「フロンティアと権力——東南アジア島嶼部ボルネオ島の事例」

中川敏「焼き畑からマレーシアへ——エンデ、三代のものがたり」

春日直樹「私たちは海、私たちは大洋」

山下晋司「国境を越える女性たち——バリ・カリフォルニア・日本」

大塚和夫「イスラームとトランスナショナリティ——スワヒリ地域ラム島の事例を中心に」

栗本英世「難民キャンプという空間——ケニア・カクマにおけるトランスナショナリティの管理と囲い込み

池田光穂「移民・難民・人類学者——グローバリゼーションとグアテマラ」

小泉潤二「トランス『ナショナル』であること——国境を越える人類学者とODA」

第2部

中川　理「あいまいな交換——フランスのあるSEL（地域交換システム）における交換とエスニックバウンダリー」

中井潤子「ビルマの南アジア系移民の土着ヒンドゥーイズムの生成——ビルマの『セカンド・インディア』・ズィヤワディ市の事例から」

山田仁史「民族間の交易品としての塩——近代台湾の諸民族誌から」

松川恭子「大衆劇ティアトルにみる『ゴア文化』の諸相」

竹村嘉晃「『インド古典舞踊』の受容と消費——南インド・ケーララ州のカラマンダラムで学ぶ外国人たち」

あとがき　小泉潤二・栗本英世

●『グローバル化と市民社会』（トランスナショナリティ研究3、2004年）

責任編集：木前利秋

はじめに——本報告書について　木前利秋

木前利秋「グローバル化の中の市民社会——今日の理論的課題」

亀山俊朗「シティズンシップの行方——グローバル化の中で」
時安邦治「市民社会とシヴィリティをめぐって」
樋口明彦「グローバリゼーションと社会的排除——メンバーシップの再編をめぐって」
木村裕之「フンボルトの大学理念からの決別——大学と市民社会」
関　嘉寛「グローバル化した世界におけるNGOの問題圏」
白石真生（書評論文）「グローバル化の時代における消費者と市民——N.ガルシア＝カンクリーニの所説を中心に」

あとがき　木前利秋

●『〈日本〉を越えて』（トランスナショナリティ研究4、2006年）
責任編集：小泉潤二、栗本英世

はじめに——本報告書について　小泉潤二・栗本英世

第1部　多文化社会の現状と可能性
駒井　洋「日本型多文化主義の可能性」
ベフ・ハルミ「外国人労働者が変える日本文化」
デイヴィッド・ブレイク・ウイリス（加藤敦典訳）「クレオールの時代——クレオール化（Creolization）とクレオール性（Créolité）についての覚え書き」
川上郁雄「越境する家族——在豪ベトナム系住民と在日ベトナム系住民の比較研究」
岩渕功一「メディア文化の国境の越え方」

第2部　学校教育とトランスナショナリティ
志水宏吉「学校文化とエスニシティ——ニューカマー外国人への教育支援をめぐって」
箕浦康子「親の海外駐在と子供——在外日本人児童と在日インターナショナルスクールの調査から」

第3部「外」からみた日本の社会問題
トム・ギル「日本のホームレスの事情とそれに関する行政対策——地域別・国際的な比

較研究」
ロジャー・グッドマン「日本における児童虐待問題——児童虐待の『発見』と防止策の展開」

●『ポスト・ユートピアの民族誌』(トランスナショナリティ研究5、2006年)
編集：田沼幸子

はじめに　田沼幸子

A) 分科会「ポスト・ユートピアの民族誌」
田沼幸子「ポスト・ユートピアについて」
田沼幸子「小さな、大きな物語——キューバの調査報告のための試論」
磯田和秀「ユートピアの忘れ得なさ——ある老人の独立インドをめぐる記憶／想起から」
藤原潤子「ポスト社会主義ロシアにおける呪術の復興」
小田　亮「コメント」

B) シンポジウム「フィールドからのアプローチ」
田沼幸子「はじめに——複数の『ポスト』、複数の『ユートピア』」
石塚道子「地に呪われたものは立ち上がったのか——マルティニクの煩悶」
上田　達「遠き眺め——マレーシア・ナショナリズムの語り方」
加藤敦典「革命的なプランの跡で、希望なき民主主義へ？——ベトナムにおける村落民主のゆくえ」
中川　理「新しい社会的リアリティをつくる——フランスにおける相互扶助アソシアシオンの事例」
太田心平「いまそこにあるユートピア——ある労働者地下組織と『民主化』前後の韓国」
大杉高司「映画『Intervista』と人類学」
冨山一郎「コメント」
佐々木祐「塗り込められた記憶——ニカラグア壁画運動の周辺から」
田沼幸子「YUMA——ハバナで望む、ここではないどこか、私ではない誰か」
春日直樹「贈与と商品、反復と差異」

植村清加「"vivre au paradis"——移動、イスラーム『回帰』、フランス市民社会
佐々木一惠「同床異夢——共産党根拠地延安（1937年）の賀子珍、アグネス・スメドレー、呉広恵」
栗本英世「教育に託した開発／発展への夢——内戦、離散とパリ人」
松田素二「コメント」
松前もゆる「母たちの出稼ぎ——社会主義と『ヨーロッパ』と男と女」
奥田若菜「『希望の首都』でありつづけるために」
西垣　有「ウランバートル、カラコルム、チンギス・ハーン——ポスト社会主義・モンゴルにおける都市の構想力」

第Ⅰ部
トランスナショナリティ研究の展開

複数のグローバル化◆

代替的な（ネイティブに代わる）(*訳注1) トランスナショナルな過程と行為者たち

グスタボ・リンス・ヒベイロ
（久保明教訳）

1989年から1991年にかけて「現実に存在する社会主義」が終焉を迎えたあと、この世界には、資本主義の完全なる勝利、つまり「現実に存在するグローバル化」が到来した。それはイデオロギーの危機の時代であり、より重要なことに、ユートピアの危機の時代であった。異なった未来への強力なヴィジョンはなくなり、テクノロジーの理想郷あるいは電子的ないしコンピュータ的な資本主義が自律的な強制力をもつようになった。フレキシブルでポスト・フォーディズム的な資本主義と、新たな段階に入ってきた時空間の圧縮が、インターネットによって強化されながら、あらゆる場所へ広がっていけるようになった。

第二次大戦後、「開発・発展（development）」とともに起こったこと（参照［Ribeiro 1992; Escobar 1995; Rist 1997］）と同様に、1990年代以降「グローバル化」は資本主義的な変容と統合過程の指標となった。さらに、「グローバル化」は、トランスナショナル、インターナショナル、あるいはナショナルなエリートたちが唱える、ひとつのイデオロギー、ユートピア、および真実を表す経文・教義となった。私が言いたいのは、冷戦時代を象徴するのが「開発」であるならば、「グローバル化」はポスト冷戦期（1989-91年～現在）を象徴しているということである。しかし違いがないわけではない。おもな違いは、冷戦の間には敵対する二つの勢力、資本主義と社会主義によって世界が分割され、鏡のように互いが互いの代替となるシステムがつくられていた。二極化された世界で、社会主義は資本主義に対する完全な代わりとして見られていたし、逆もまたそうであった。興味深いことに両陣営とも、生産力の発展こそ進歩とより良い生活を得るための手段であると信じていた。

覇権的なイデオロギーあるいはユートピア的理念である「開発」と「グローバル化」はともに、覇権対抗的な言説や実践にしばしば直面する。代替的開発をめぐる議論は、むしろ

◆――本稿はもともと2005年2月8日に大阪大学で行ったトランスナショナリティ研究セミナーのために準備したものである。

多様な権力の場であった。過去30年間、開発についての議論が位置づけられる権力の場においては、環境主義がもっとも明示的で効果的な代替であった。環境主義者のなかには、「ゼロ成長」といった旗印を掲げてあらゆる開発を強固に否定するラディカルな立場にたつものもいる。同時に、改良主義的な立場にたち、開発機関（世界銀行など）との交渉の必要性を認めるものもいる。このような交渉のプロセスの結果、1980年代後半には「持続可能な発展」が定義され、副次的に利用可能な戦略として公式化された。「持続可能な発展」というコンセプトや改良主義者の力がピークを迎えたのは、1992年にリオデジャネイロで開催された「環境と開発についての国連会議」[Ribeiro 1992; Little 1995] であった。驚くべきことではないが、この「リオ92国連会議」のあと、持続可能な発展というコンセプトは次第に代替としての特徴を失っていき、企業や政府の利害によって規定された標準的で制度的な言説となっていった。「持続可能な発展」というコンセプトがピークを迎えた時期は、冷戦の終結と一致している。それは、実際に存在していた社会主義が後景に退いた時代であり、19世紀のユートピア的なメタ物語がその限界に達した時代でもあった。資本主義一人勝ち時代の幕開けとともに、「開発・発展」はますます、良い生活と人類の運命のための新たな強力な処方としての「グローバル化」と同じ空間を共有しなければならなくなって来ている。

非覇権的なグローバル化

覇権的なグローバル化は、ネオリベラルな資本主義的目標を追求するマルチ／トランスナショナルなエージェントの活動によって特徴づけられてきた。国家の縮小、構造調整、民営化と起業と資本へのサポート、国内経済の海外市場への方向づけ、グローバルな自由貿易、労働法の弱体化、福祉国家の縮小あるいは段階的廃止などである。金融資本とトランスナショナルな企業は、しばしばグローバル化の主要なエージェントと考えられてきた。実際、グローバル化をめぐる議論は、強力なエージェントないしエージェンシーによってトップダウン式に主導されるプロセスに焦点を合わせる傾向があり、他のプロセスは無視されがちである。しかし、ネオリベラルなグローバル化に対する政治的な抵抗運動にとくに焦点をあてた、「下からのグローバル化」についての文献も増えている。そのおもな対象は、グローバルな市民社会やトランスナショナルな社会運動や活動家である［Agustin 2003; Edwards and Gaventa 2001; Keane 2003; Keck and Sikkink 1998; Rosenau 1992;

Seonane and Teddei 2001; Vieira 2001; Yuen 2001]。こうしたバイアスによって、研究者は他の覇権的ではない形のグローバル化を見逃すことになる。その一つを私は「下からの経済的グローバル化」と呼ぶ。

本稿において、私はグローバル化の政治経済（ポリティカル・エコノミー）における隠された側面に光を当てたい。それは、国民国家の規範的で抑圧的な役割が、政治および経済的局面において大きくないがしろにされるという側面である。「他なるグローバル化」を理解する視点から、私は代替的な政治的経済的プロセスとエージェントの有り様を探求していきたい。

1. 非覇権的な政治的グローバル化：反／代替グローバル化

1992年にリオデジャネイロで開かれた国連会議は、トランスナショナルなエリートたちにとっては、20世紀後半において最も重要な超世界規模の儀式であったが、代替的なグローバル化の運動にとっても重要な構造化の契機となった。国連会議は種々の環境NGOや社会運動にとって戦略的で先駆的な機会を与えた。それらは国連会議と平行して行われた「グローバル・フォーラム」（「世界社会フォーラム」の先駆となった）に集結し、現実の公的空間においてグローバルな市民社会が集う最初の機会となったのである［Ribeiro 2000］。環境運動のトランスナショナルな性格が、フォーラムの土台を提供した。そこではトランスナショナルな市民権といった概念についての議論がおこなわれただけでなく、より重要なことには、ネオリベラルなグローバル化を抑制する力としてのトランスナショナルなネットワークを表明することの土台になったのである。

「リオ92国連会議」はまた、グローバル化を推進するネットワークとそれに対抗するネットワークが出会う筋書きをつくる上での雛形を与えるものであった。この雛形は、次の各要素からなる三角形によって形成される。（I）グローバルでトランスナショナルな指導者や経営者の会合（リオではジャクゥアレパグアのコンヴェンション・センターで開かれた「環境と開発に関する国連会議」がそれに相当した）。（II）グローバルな市民社会のトランスナショナルなエリートたちの会合（リオでは、グローバル・フォーラムがそれに相当した）。（III）ネオリベラルなグローバル化に反対するトランスナショナルな活動家達による街頭デモ。

1992年以来、グローバル化に関して政治的な覇権対抗的試みが増えている。多元的な運動とその連立の構成は——多様な理念および政策的課題と同じように——二つの主要な党派にまとめることができる。一方は反グローバル化、もう一方は代替グローバル化（フランス人の呼び方ではaltermondialization）である[*1]。

この内部での区別は、「代替的開発」を目指した勢力においても存在した区分を引きずっている。つまり、二つの立場の違いは、ラディカルな見地に立つか、改良主義的な見地に立つかという違いを反映しているのである。グローバル化は不可避的なものではなくその進行を止めて根本的に変えることができると信じる人々は、反グローバル化の運動を形成する。これらの運動は通常、街頭デモを組織するといったその場かぎりの連合を通じて表明される。一方で、グローバル化の動きは徐々に抑制しうるし、すべきであるとした上で「もう一つの世界は可能だ」と信じる人々もいる。彼らは代替グローバル化の運動を形成し、1980～90年代に登場した新たな政治的主体としてのNGOの世界と深く結びついている。実際、彼らの多くは第二次世界大戦以来さまざまなNGOのネットワークを開発させてきたトランスナショナルな政治的エリートの一部をなしている。すなわちNGOや多国籍な機関、とくに国連や多国籍銀行、そして、各国政府などのエリートたちである。この二つの主要な潮流を念頭において、私は政治的で覇権対抗的な運動を、反／代替グローバル化運動として位置づけるのである。

反／代替グローバル化についての著作は、質的にも複雑さにおいてもまだまだ増えていく必要がある。とくに民族誌は、書かれる必要がある。既存の著作の大部分は、運動の指導者やイデオローグあるいは活動家やNGOのメンバーによって書かれたものである。また、研究者によって書かれたエッセイは存在するが、それらに見られる知識、理論的洗練の度合い、グローバルないしトランスナショナルな運動に対する思い入れはさまざまである。彼らのうちに、以前は環境運動の分析に関心を抱いていたが、トランスナショナルなアクティヴィズムやグローバルな市民社会について議論することへと転じた研究者を認めることは珍しくない。そうした著作においては、より精緻な調査や思考がみられる（例えば［Keck and Sikkink 1998］や［Keanes 2003］）。民族誌に興味を持つ研究者にとって、二つの有望な調査対象がある。街頭デモは、活動中の反グローバル化の活動家たちを観察する絶好の場であるし、世界社会フォーラム（World Social Forums）は、代替グローバル化の活動家たちの動きを観察する理想的な場となるだろう。

1-1. 街頭デモ

ネオリベラリズムと障壁なしのグローバル貿易は、フレキシブルな資本主義の覇権のもと世界の縮小を促進し、新たな制度が成立する機が熟した。その典型的な例が、グローバルな貿易を促進・管理・監督し、参加各国間の争いを調停するグローバルな制度、世界貿易機構（WTO: World Trade Organization）である。WTOは1994年に設立された。1995年に運営が開始されその後急速に——第二次大戦後に作られた諸制度（世界銀行、国際通貨基金、国連）と並んで——グローバルな運営に携わる特権的な場のひとつとなった。WTOは自らを、第二次大戦に続いて設立された、関税と貿易に関する一般協定（GATT）に取って代わるものとして位置づけた[*2]。GATTの後継ではあるが、WTOが電子的及びコンピュータ的な資本主義に占める覇権の度合いはGATTの比ではない。というのも、WTOは、商品販売に関わる貿易だけでなく、国際電話などのサービスや知的所有権保護なども管轄しているからである。こうしたWTOの持つ権力は、反グローバル化を主張する活動が育っていくにつれて注目されるようになった。1992年以来、反グローバル化の街頭デモは増え続け、警察によって詳細に監視されるようになり、しばしば鎮圧されるようになった[*3]。

1998年5月の18日から20日にかけて、WTOの50周年記念式典に抗議する数千人の人々がジュネーブの街路を行進し、1,017人が逮捕された。G7開催中の1999年の6月18～20日にはドイツのケルンで、35,000人が貧困国の対外債務を帳消しにすることをもとめて行進した。同年の11月30日には、シアトルでWTOの最高意思決定機関であるWTO閣僚会議に抗議する街頭デモが行われた。多くの人々にとって、こうした街頭デモは反グローバル化運動の基盤となるイベントであった。確かにこれらの街頭デモは人目につきやすい出来事ではあったが、これらに先行する重要な動きとして、世界の南半球地域で、1970年代に始まったIMFの構造調整プログラムに対する抗議活動などがある。これらの抗議活動のピークとなったのは、1989年のカラカス暴動［Yuen 2001: 6］や、「ネオリベラリズムに対する軍事的抗議活動の増大」［Callahan2001: 37］にインスピレーションを与える源泉となった1994年のサパティスタ蜂起である[*4]。

メアリ・キング［King 2000: 3-4］は、反グローバル化運動を以下のようにとらえている。

［反グローバル化運動は］それ固有の血統を、1996年にインターネットを通じて広

まった「新自由主義に反対し人間性の回復を求める、チアパスでのサパティスタ会議」への招待に求めるが、これは半分神話であり、半分は口頭伝承である。この会議には多数が参加し、そこから現れてきたのが、「グローバル・アクション」と呼ばれる星雲状の全体であり、それは単一の組織でもNGOでなく、むしろ断片的に広範な地域へと広がっている、政治的な意図を自覚した運動である。[…] この運動は、サパティスタ哲学から急進的な包含と自己組織化の倫理を採用したのである。

「シアトルの闘い」の織烈さ、WTO閣僚会議の意図を妨害したという政治的な勝利、また、メディアを通じて流れた映像は、反グローバル化運動が勢いを持っていることを示し、1999年のシアトルはグローバル化と戦うために人々が街頭に集結した時代のシンボルとなった。シアトルでは、5万人が街路に集まり500人以上が逮捕された。

2000年はとくに慌しい一年だった。1月29日にはスイスのダボスで世界貿易フォーラムに抗議するデモが行われた。2月にはバンコクで国連貿易開発会議（UNCTAD）の第10回サミットへの抗議、4月15～17日にはワシントンで開かれたIMFの会合への抗議、6月14日にはボローニャで経済協力開発機構（OECD）の会合に対する抗議がおこなわれた。さらに、6月21～23日には沖縄でG7の開催時期に合わせて、第三世界の債務解消と米軍基地の撤退を求めたデモが行われた。9月には1万から3万の人々がメルボルンで世界経済フォーラムへの抗議を行った。同月の26日、5回目の「グローバル・アクション・デイ」の最中には、多くの国から集まった活動家たちがIMFと世界銀行合同で開かれた会合に抗議するプラハでのデモ活動に集結した。チェコ共和国の首都では、環境主義者、宗教集団、労働組合、社会主義者、共産主義者、無政府主義者やパンクスが、議場をとりかこみ警察とこぜりあいを起こした。同時に世界中で、様々なデモが起こった。例えば、ブラジルでは、パンクスの小集団がブラジル中央銀行の前でデモを行った。サンパウロでは学生や環境主義者や労働組合員が株式市場の前でデモを行った。フォルタルザやベロオリゾルテのようなブラジルの他の都市では、シティバンクやマクドナルドの店舗など資本主義を象徴するものの前に人々が集まって抗議がなされた。これらのデモを鎮圧しようとする警察の動きは次第にエスカレートしていき、2001年7月にはイタリアのジェノバでG8に抗議するデモに参加していた青年カルロ・ジュリアーニが警官によって殺された。

2001年9月11日は、疑いなく新たな危険の兆候を示すものであった。反テロリズムは列強のエリートたちにとって最大の関心事となり、この主題は、戦争の脅威によって強調

されていった。米国では、ブッシュ政権が提案した厳重なセキュリティ法案が採択された。

しかし、とくに米国の外では、反グローバル化運動の勢いは衰えていない[Aguiton 2003]。欧州では、2002年11月にフィレンツェで大きなデモが行われた。欧州社会フォーラムの集会の最終日にはおよそ100万人が街頭に集まった。また、世界社会フォーラムは第二回、第三回と続き、2002年と2003年の1月にはポルト・アレグレに5万人以上の人々が様々な国から集結した。また、2003年の1月には、インドのハイデラバードで開かれたアジア社会フォーラムに2万人以上の人々が参加した。同じ時期、つまり9・11のあと、イラク侵略の可能性を受けて平和を求める運動が広まっていき、これまでで最大規模のデモが行われた。ブラジルのフォーリャ・デ・サンパウロ紙(2003年3月16日版)によればこの「史上最大の反戦デモ」を組織するうえで、国家を超えて声をあげる道具としてのサイバースペースの有効性が再び証明された。2003年2月15日、約60カ国で500万人以上の人々が街頭にでて、アメリカのイラク戦争に対する抗議を行った([表1]参照)。

[表1] 「史上最大の反戦デモ」参加者数。

都　市	デモ参加者数(人)	都　市	デモ参加者数(人)
バルセロナ	1300,000	オスロー	60,000
ローマ	1000,000	ブリュッセル	50,000
ロンドン	750,000	ブエノスアイレス	10,000
マドリッド	660,000	サンパウロ	8,000
ベルリン	600,000	ケープ・タウン	5,000
パリ	250,000	東京	5,000
ニューヨーク	250,000	オークランド	5,000
ダマスカス	200,000	リオ・デジャネイロ	3,000
メルボルン	160,000	テル・アビブ	3,000
アムステルダム	70,000	総計	5,542,000

＊フォーリャ・デ・サンパウロ紙、2003年3月16日。

反グローバル化運動は、国際的な拡張によって異種混交性を増し、繰り返し新たな政治的挑戦を掲げている。一般には認められていないその多様性は、その効果によって高く評価されるものの、政治的同盟において多くの問題をひきおこすより複雑な政治的環境を意

味している。その含意を示すには、運動に集まってくる様々なアクターを列挙するだけで十分だろう。パンクス、無政府主義者、学生、労働組合員、環境主義者、農夫、フェミニスト、人権活動家、研究者、知識人、政治家。ほとんどのものが、進歩的傾向を持ち、様々な国の様々な場所からやってきている。にもかかわらず、デモが行われる場所によっては、それら異質なアクター同士の様々な組み合わせがみられる。たとえば欧州、とくに、強力な社会主義的伝統のある国においては、社会主義政治家でさえこれらのイベントに参加することがある。

1999年にシアトルの戦いを計画した組織、「グローバル・アクション」「直接行動ネットワーク」「独立メディアセンター」「アース・ファースト！」「グローバル・エクスチェンジ」などは反グローバル化運動に携わり続けている。「直接行動ネットワーク」は、シアトル・デモの準備に際してとくに活動的であり、2000年4月のIMFと世界銀行に対するワシントン・デモなどで、デモ実行前に教会で行われた参加グループの代表者からなる「スポークスマン会議」を運営したことにみられるように、「柔らかな構造体（soft structure）」[Aguiton 2003: 9] となっていった。反グローバル化は、若者が多数層を占める運動である。彼らは動員における最新メディアの効果をよく知っている。インターネットは、運動の声明をグローバルに発信する上で不可欠であり、電話は、街頭デモの戦術を組織する上でしばしば使われる。この運動の組織構造のおもな特徴としては、フレキシブルで横方向の繋がりに依拠する意思決定過程に加えて、以下の二点がある。（I）「『非暴力的直接行動』として一般に知られてきた大衆的市民的不服従」に対するほぼ全面的な支持と、（II）直接民主制へのコミットメント [Yuen 2001: 8] である。その組織形態は、脱中心化されたスポークスマン会議だけでなく、「アフィニティグループ（共同活動）」や合意過程にも及ぶ。

エディ・ユエンは以下のように論じている [Yuen 2001]。

> 理念的な非暴力と直接民主制への深いコミットは、前世紀に多くの改革派を魅了した、政権奪取を狙う権威的マルクス-レーニン主義の党派的でネガティブなモデルに対する二重の反応としてみることができる。こうした準−象徴的な政治的アイデア——非暴力、非資本主義、完全な民主社会を実現するための方法論はその目標と矛盾しない——は直接行動の運動の核であり続けている。新たな運動の活動家たちは、ラディカルな民主主義と非暴力の理念との組み合せを解消することに関心を持っている。前者は心から受け入れつつも後者に対してはより戦術的な柔軟さを重視して

議論している。とくに、大企業の財産を集団で破壊することについてはそれが顕著である。

直接民主制は、これらの活動の核となる価値である。キングは「グローバル・アクション」を分析するなかで、こうした運動の柔軟さと流動性を描きだしている [King 2000: 4]。

> グローバル・アクションはゆるやかにつながった組織であり、各支部、NGO、個人、無政府主義者、宗教団体、政府のエージェントなどからなっている。この組織はたえず変化し曖昧で流動的である。個々のメンバーは、常時参加するものもいれば、特定の活動にのみ関わるものもいる。グローバル・アクションは、具体的な活動が必要なときにのみ使われる外部のものにはわからない特定の連絡拠点をもっている。メンバーは必ずしもすべての断片的な活動を知っているわけではないが、活動の範囲に応じて各拠点と関わっていく。[…] 彼らは活動量に応じて配置され、[…]様々な背景を持ってはいるが、グローバルな標的を共有している。また、国境を越えた地球市民という感覚を共通して持っている。

研究者のなかには、1960年代の社会的闘争と比較して反グローバル化運動におけるイデオロギーや組織の多様性を強調するものもいる [Aguiton 2003; Yuen 2002]。その主要な標的は、国家や行政機関ではなく、企業資本主義的なシンボルに対する戦いである。さらに政党の影響は、もしあったとしても、非常に小さいものである。キングはこの問題について次のようにまとめている、多様性こそこの運動のアイデンティティである [King 2000: 5]。彼女が信じるところによれば、「対立はもはやカテゴリーの分断に依拠するものではなくなり、階級間の敵対や、領土や、国家主義的な欲望をコントロールすることをめぐるものでもなくなっている。むしろ、闘争の中心は情報や知識や解釈やコミュニケーションの操作をめぐるものとなっているのである」[King 2000: 6]。

こうした多様性の背後にある共通の原動力としては、90年代のアカデミズムで取り上げられたポストモダニズム的な考え方とメタファー、つまり「断片的なアイデンティティをもつ主体」、「散種」、「脱領土化」、「ネットワーク」などであろう。私は、現実に存在する社会主義の崩壊によって20世紀末に始まった、イデオロギー的でユートピア的な危機に言及してきた。それは、様々な方向で、資本主義に対する代替的な言説を活気づけてき

た。代替的な政治運動の古いタイプの視野は、マルクス−レーニン主義などの非常に規格化された政治理論や階級や革命といったカテゴリーに据付られている。それらはまた、矛盾する力によって明確に定義されたシステムにおいて構造的な位置をしめる政治的主体、革命的プロレタリアートに依拠している。だからといって、その運動が均質的なものだということにはならない。

「新たな政治的主体」についての議論は、政治的変化に向けた集合的な傾向を生み出す必要によって枠付けられている。それは、私が言及したイデオロギーとユートピアの危機に確かに関係しているが、それだけでなく、「ヴァーチャルな公共圏」[Ribeiro 2003] と表現されうる「リアルな公共圏」が、グローバル化によって促進された多様性の循環において増大し、コミュニケーションの新たな手段を通じて成長した結果、質的に変化してきたことにも関係している。周知のように、反グローバル化運動は、80年代後半に環境運動によって開始され、90年代を通じて発展してきた時代の流行に多分に依拠している。排他的なグローバル化のプロセスに抗する闘争という同じ動機を共有しているにも関わらず、この運動はグローバルに断片化した様相を示している。にもかかわらず、二つのヴァーチャルでグローバルに展開するエージェンシーであるメディアとインターネットを通じて、運動のグローバルなつながりは強化されている。

現代政治におけるメディアの重要性への意識は、グリーンピースや「アース・ファースト！」やサパティスタ運動などの政治的アクターに引き継がれた。その結果、反グローバル化運動において、政治的行動はメディアとの相関において評価されるようになるとともに、代替的なメディアの実践が追求されるようになった。地球規模の市民権を求める批判的な戦いのなかで、運動はトランスナショナルでヴァーチャルな想像上の共同体を構成するものとなっており、この共同体は、インタラクティブなコミュニケーション・ツールとしてのインターネットの流通によって可能になった、グローバルな市民社会の象徴的基盤となっている [Ribeiro 1998]。運動のもつ影響力のもうひとつの側面は、代替的なメディア・スケープを通じて世界システムに侵入し、グローバルなメディア企業やそのネットワークから得られる情報にも匹敵するニュースを配信していくことに関わっている。だからこそ、グローバルなエリートだけでなく、グローバルなメディアが集まっているところでデモやフォーラムが行われるのであり、また、グローバルなメディアイベントが行われるのである。

こうした潮流において、環境運動の与えた影響は、「グローバルに思考し、ローカルに

行動する」といった考え方から、人種主義の抑圧や、環境を破壊するグローバル化に抗するための闘いは、トランスナショナルなエリートや経営者がグローバルな統合の儀式を演じている断片化したグローバルな圏域においてなされなければならないという意識にまで及んでおり、その役割の大きさはいくら強調しても足りない。情報の果たす役割への意識は、「リオ92国連会議」においてすでに現れていた。この時にはすでに、インターネットが「進歩的コミュニケーション協会」(APC: Association for Progressive Communications) の活動の手段となり、トランスナショナルでヴァーチャルな想像上の共同体を組織するために広く使われていたのである [Ribeiro 1998]。こうした流れのなかで、反グローバル化運動においては世界規模の「独立メディアセンター」を設立することが試みられてきた。最初の独立メディアは、1999年にシアトルでのWTOへの抗議活動を草の根レベルで拡張するという目的のもと、独立した代替的なメディア組織や活動家達によって設立された[*5]。

街頭デモもまた、コミュニケーションの装置としてみることができる。それらの目的は、新たな政治的主体が存在することを提示することや、リアルないしヴァーチャルな公共圏にグローバル化への代替的なメッセージをもって侵入していくことにある。こうした筋書きにおいては、量と質が戦術的な役割を持つ。運動の規模はその力をはかる量的な目安となる。代替的な言説の有効性は、それがどれほどグローバルに目につくものとなり拡散しているかによってはかられる。それらは運動のメッセージの質を証明するものである。量にも質にも密接に関わるが多様性は、運動の展望、複雑さ、表現力についてのアイディアを与える。運動は以下の様々なものの超越を目指している——階級主義、ジェンダー、エスニック、国家主義、イデオロギー、行動主義などである。

形態や組織は、実践においてそれらが、複数的で活動的な、多様な集合的アイデンティティを提示するものである限りにおいて極めて重要である。グローバル・メディアの注意は、活動家たちのコスチュームや、デモのお祭り風の雰囲気や、劇的なパレードや、顕著でしばしば現実に危険である暴力的な街頭での戦いに向けられている。メディアを惹きつけるのは、とくにパンクスや弾圧する側の権力の誇示と行使が担う役割である。警察は、最も明確な国家の代表であり、デモにおけるローカルないしナショナルな次元の権力の働きを表すものである。当然ながら都市あるいは政府当局もまた、世界が彼らを見ていることを知っているのだ。覇権対抗的でグローバルなイベントとしての街頭デモは、他の、世界中の注目をあつめる非覇権的なグローバルなイベントと同じく次の3点によって説明することができる。(I) 大きな規模で行われる、豊かで強力な集まりであること。(II) 大き

な規模で行われる、代替的な、トランスナショナルなエージェントの集まりであること。(Ⅲ) 国家及び地域当局が、彼らの領土から生み出されるメディアスケープを管理するために、公共圏をコントロールしようとする機会であること。

これらのデモは、世界中の様々な都市で起こり、グローバルないしナショナルな水準でメディアによって報道された。これらのデモを通じて、もう一つの世界は可能であるという考え方がより強いものとなってきた。この考え方こそ、世界社会フォーラムのモットーである。

1-2. 世界社会フォーラム

世界社会フォーラム (The World Social Forums, WSF) は、反グローバル化運動と同じ歴史的系譜の一部をなしている。反グローバル化を訴える街頭デモに対し、WSFは代替グローバル化の戦いの一例であると私は考えている。もちろん、反グローバル化の勢力もまたWSFに参加していることは疑い得ない。しかしながら、このフォーラムの最も影響力のある組織者たちの中には、明らかにグローバル化を歴史的事実として受け入れながら、その性質を変えていくことを目指すものたちがいる。例えばATTAC (Association for the Taxation of Financial Transactions for the Aid of Citizens：市民を支援するために金融取引への課税を求める運動体) は、1998年6月にフランスの新聞「ル・モンド・ディプロマティーク」によって創設された。第一回の世界社会フォーラムで「ル・モンド・ディプロマティーク」の編集長ベルナール・カセンは次のように言明している。「われわれはグローバル化に反対しているわけではなく、それがいかに効果を及ぼすかに批判的なのである」(エスタード・デ・サンパウロ紙、2001年1月16日付)。

［ボックス1］ ATTACの自己定義

ATTACは階層的でもなく地理学的中心も持たない一つのネットワークである。その複数主義は構成要素の多様性によってより豊かなものとなり、共通の活動をあらゆる制限や貢献の自由を強制することなしに行うことをより容易にする。その目的は、プラットフォームとなる構造のなかにあるものとして自らを把握している協力者たちの貢献を、国際レベルで結びつけ調和させることである。また、同じように、その目的において重なるところのある他のネットワークとの協調を常に目指している。世

界中に8万人を超えるメンバーがいるATTACは、33カ国における独立したナショナルないしローカルな集団から構成されている国際的なネットワークである。それは、通貨投機取引に対する国際的な課税（提唱した経済学者ジェームズ・トービンの名をとって「トービン税」と呼ばれる）というアイディアや、税免除の非合法化をめざすキャンペーン、扶助基金の国家扶助への切り替え、第三世界の債務の解消、WTOの再編成あるいは廃止などを促進しており、より広い文脈では、経済化する世界のなかで失われてきた民主的な空間を取り戻すこと目指している。ATTACでは、知的な創造力と行動主義を組み合わせている。金融市場を荒らす力を飼い慣らし、普通の人々の必要に見合うものを与えてくれる民主的で不透明でない経済構造を支持するための、実践的な経済改革を推進している。つまり、ネオリベラリズムの独断的なイデオロギーに対する代替を探求しているのである。ATTACは、すべての政党から独立しており、労働組合やアソシエーション、国会議員、学者、そしてすべての市民を自己教育と平和活動に動員する。ATTACは、1999年シアトルでのWTOに抗議するデモ、2000年の7月ジェノアでのG8に抗議するデモに参加した。ATTACは、ローカルで地域的な経済に対する民主的な自己決定を促進する様々なグローバルな運動の一部をなすものである。

（http://attac.org.uk//attac/html/index.vm, 2005年1月16日閲覧）

1999年のシアトルの戦いの衝撃がまだ残っていた2000年のはじめ、世界経済フォーラムと同時に世界社会フォーラムを開こうとする考えが生まれていた。「ブラジルの社会運動と組織は、「ル・モンド・ディプロマティーク」のサポートを受けつつ挑戦を始めようとしていた。[…] ポルト・アレグレ市は、労働者党（PT）が中心となった地方左翼政権が推進した参加型予算立案という民主的運営の経験があった。この先例のない経験を通じて注目されるようになった都市であり、ここが、WSFの開催場所としてもっとも適切ではないかという考えは主催者たちの同意を得るようになった。リオ・グランデ・ド・スル州（ここもウォーカー党（GLR）が政権をおさえている）からの熱狂的なサポート——それはフォーラム終了まで続いた——を受けながら、この提案は2000年6月にスイス・ジュネーブでの国連の会合と平行して開かれた「パラレル・ソーシャル・サミット」において満場一致の支持を受けた」[Seoane and Taddei 2001: 106]。

当初から、世界社会フォーラムは、世界経済フォーラム——スイスのダボスで開催される、ヘゲモニーを掌握している新自由主義的なグローバル・エリートの会合——に対抗する場であると考えられている。最初の世界社会フォーラムは、2001年の1月25日から30日にかけて、ポルト・アレグレの教皇カトリック大学で開催された。運営者側によれば、参加者は1万5千人を超え、そのうち4,702人は117の国からやってきた。104人の講演者とパネル展示説明者（うち27人がブラジル人で69人は外国から）がおり、37カ国から呼ばれた165人の特別ゲスト（うち77人はブラジル人、88人は外国から）が参加した。2,000人の若者と先住民はハーモニーパークでキャンプしながら参加した。1,870人のジャーナリストがやってきて（そのうち1,484人はブラジル人であり残りの386人は他の国から）、WSFについてのニュースを報じた。社会運動や出版社、NGOによる展示会があった。65の展示関係者と325の公認された参加者がいた、講演の同時通訳を担当したのは51人の通訳であった［Seoane and Taddei 2001: 127-128］。

毎朝、「登録された代表者」つまり世界中の組織の代表者限定の会議が同時に4つ行われた［WSF 2001: 7］。この会議は、ケーブルTVとインターネットを通じて中継され、代表者でない人々もポルト・アレグレ市内の講堂でみることができた。それらの会議は次の4つのテーマにそって組織された。「富の生産と社会的再生産」、「福祉へのアクセスと持続可能性」、「市民社会と公共圏の肯定」、「新たな社会における政治的権力と倫理」。

あらかじめ予定されていた講演者は、著名な活動家や労働組合主義者、学者や政治家であり、次のような人々であった。サミール・アミン、ウォールデン・ベロー（フィリピン大学教授）、ベルナール・カセン（「ル・モンド・ディプロマティーク」編集長）、オデッド・グラジェウ（ブラジル、「エトス・インスティチュート」代表）、北沢洋子（ジュビリー2000日本実行委員会代表）、マリアーナ・シルバ（ブラジル上院議員）、フライ・ベト（ブラジル）、パク・ハソン（KCTU労働組合を代表して韓国より）、ティモシー・ネイ（フリー・ソフトウェア財団を代表して）、ボアヴェントゥラ・デ・ソウザ・サントス（コインブラ大学教授）、タリク・アリ（パキスタン）、アルマン・マテラール（ベルギー）、アミナタ・トラオレ（マリ、元文化大臣）、アフメド・ベン・ベラ（アルジェリア）、キルスティン・ミラー（「グローバル・エクスチェンジ」ディレクター）、アニバル・キハノ（ペルー、サンマルコ大学教授）、リカルド・アラルコン（キューバ議会議長）。

午後には、フォーラムに参加していた諸団体が運営する「ワークショップ」が開かれる。一般聴衆は、先着順の原則でほぼ全てのワークショップに参加することができた。膨大

な数のテーマについて議論がなされたが、その多くは以下のような問題をめぐってのものであった。労働の実践や組合主義、環境、農地改革、開発、健康、教育、平和主義、人権、人種及びエスニック関係、文化政治学、社会的および政治的民主制、市民権、メディアとコミュニケーション、社会運動、社会正義、グローバルな地政学、グローバルな市民社会、トランスナショナルなアクティヴィズム、ネオリベラルなグローバリズムに対する抵抗などである。ワークショップの運営に携わったのは主にブラジルのNGOや労働組合、学者などであり、またラテンアメリカやヨーロッパ（とくにイタリアとフランス）やアメリカからやってきた彼らの仲間であった。運営者のなかには、ブラジルのカトリック教会からやってきた人もいれば、リオ・グランデ・ド・ソル州やポルト・アレグレからやってきた人もいた。ポルト・アレグレの他の場所では、もっぱらブラジルのアーティストによるダンスや演劇や音楽の公演がなされた。

様々な儀礼と同様に、WSFの開始時と終了時には特別なセレモニーが行われ、儀式的活動の時間、ヴィクター・ターナーの言葉を使えば「コミュニタス」の時間が開かれ、やがて終わりが告げられた。例えば、イラク戦争の直前に行われたWSF2003においては、戦争に抗する「多様性の行進」(March of Diversity Against the War) とともに6日間にわたるイベントが始まったが、その含意は「軍国化と戦争を拒否するもうひとつの世界を構築すること」であった [WSF 2003: 4]。「戦争に抗する多様性の行進」は、インターコンチネンタル・ユースキャンプを出発し、ポルト・アレグレの広場へと向かった。広場では、平和を求める声と太鼓の音が混じりあい鳴り響いていた。この年のフォーラムのためのプログラムでは、全ての参加者にパーカッションやそれぞれの地域や国や運動の旗を持ち寄るように呼びかけていた。行進の後、インターコンチネンタル・ユースキャンプの代表者が、集められるかぎりのペナントを集めてWSFの最後に旗のなかの旗を作りそれは多文化主義の象徴の一つとなった [WSF 2003: 4]。第三回のWSFは、グアイバ河畔のサンセット劇場でのパーティとともに終わった。

［ボックス2］　世界社会フォーラム（WSF）の自己定義

世界社会フォーラム（WSF）は、ネオリベラリズムに反対し、資本主義ないしあらゆる形の帝国主義による世界の支配に反対すると同時に、人間を中心とするこの惑星全体の社会を作り上げていくことに従事しようとする、市民社会のグループや運動の

開かれた会合である。この会合において市民社会のグループと運動は、それぞれの考え方を追求し、民主的にアイデアを議論し、提案を公式化し、それぞれの経験を自由に共有しつつ効果的活動のためのネットワークに参加していく。WSFの目的は、グローバル化を作り上げる代替的な手段について議論することであり、普遍的な人権および全ての国の男女あるいは環境のもつ権利に敬意を払いながら、社会正義と人々の主権を実現する民主的な国際的システムと制度に基づいいている。

(http://www.forumsocialmundial.org.br/main.php?id_menu=9&cd_language=2, 2005年1月16日閲覧)

世界社会フォーラムの参加者は、5年で10倍に増大した。2001年には15,000人だった参加者は2005年のポルト・アレグレでは155,000人までになった(コレイオ・ブラジリエンセ紙、2005年2月1日)。これまで世界社会フォーラムはポルト・アレグレ(3回)とインドのムンバイで開かれた。フォーラムの組織形態は数年のうちに少しだけ変わっていった。その重要性が増していくことによって、フォーラムの政治的構造はますます公式化していった。基本憲章が起草され、国際評議会が「国際レベルでのWSFの発言力を育てる」ために作られた。この会議は、「政治的あるいは作戦実行における本体」であり、「ネオリベラルなグローバル化に代わる代替を探す過程で知識や経験を蓄積したネットワーク、運動や組織」によって構成されている(www.forumsocialmundial.org.br, [付録1] 参照)。

街頭デモと比べると、世界社会フォーラムは高度に構造化、制度化、階層化された、代替グローバル化の巨大イベントである。それは、基本的に二つの層からなる構造における、ネイティヴに代わる(alter-native)な政治的エリートの国境を越えたグローバルな統合の儀礼である。第一に、開かれた自己運営型の活動、より水平的なコミュニケーション上の出会いの集合がある。それらは通常、NGO、労働組合、社会運動、教会などによって主催された数百のワークショップ、セミナー、コース、会合や、他のイニシアティブなどである。それらは、国境を越えて想像された特定の関心を共有するヴァーチャルな共同体の各部が、実際の公共圏において出会い相互作用しあう、比較的小さな儀式に相当する。そのなかには、トランスナショナルな活動家もいて、インターネットが可能にしたヴァーチャルな公共圏において他国の人々と連絡を取りあっているので、会合で会うときにはしばしば初対面であったりする。

第二に、対話と論争のための公演、会議、証言、円卓が存在し、そこでは、反/代替グ

ローバル化運動に関わる政治的および知的なエリートが、グローバルなリーダーとしての自らの役割をこなしていくなかで、地位と権力を勝ち得ていく。それは、高度に構造化されたつながりであり、その参加者はWSFという組織の有力なメンバーによって定義される。2005年には、国際評議会がこうした定義を行うようになっていた。

全ての会合は、運動の政治的行動を導く提案を生み出すために行われる。より多くの人々がアクセスできるように、これらの提案を収めた「行動の巨大な壁」(Great Wall of Action) がまとめられた。2003年のプログラムでは次のように言及されている。

> 小規模か大規模かを問わず様々な運動や団体によって提示された、あらゆる行動や問題が考慮されるだろう。すべての提案は「壁」に提示される。様々な提案が描かれたこの巨大な壁 (Great Wall of Action) によって、フォーラムがネオリベラルな現状の認識や主張を乗り越えていくことが明確になるだろう。フォーラムに集う代表者たちは、基本的に新たな世界を求める戦いにすでに従事してきた人々であり、彼らはこのイベントを通じてそれぞれの経験を交換しあい、学びあい、深い省察を抱いて、国内的ないし国際的に自らの展望を提示していくことだろう。フォーラムが終われば、彼らはより多くの知識、同盟、プロジェクト、そして戦いを続ける情熱とともに、それぞれの活動に帰っていくのである [WSF 2003: 18]。

しかしながら、この会議や他のイベントには反／代替グローバル化の指導者やイデオローグがいて、まさに階層構造をなしている。こうした配置は、政治的ないし年齢的な分断をもたらし、この分断はとくに若い参加者にとっては権力によって参加者を分断する線であり、国際社会フォーラムのエリート主義的特徴を示すものだと感じられている。＜選ばれたもの＞への招待は、変わらぬ方針となっている。2005年にはジョゼ・サラマーゴとマニュエル・カステルが、多くの他の知識人の中からフォーラムへと選ばれた。そこにはブラジル大統領ルイース・イナシオ・ダ・シルヴァや、ベネズエラ大統領ウゴ・チャベスも参加していた。

実際この世界フォーラムは、それ自体が中核的な権力の場となっている [Barros: 2005]。そこには、脱中心的で水平的であることを喧伝されているにもかかわらず、(フォーラムという) 儀式を作り出す力へのアクセスにおいてだけでなく儀式の構造化においても、他よりも強い力をもつエージェントないしエージェンシーが存在する。例えば、2003年の

組織委員会の構成に、それはよくあらわれている。委員会メンバーは2、3の巨大なブラジルのNGO、有力な労働組合同盟、最も有力なブラジルの社会運動であるランドレス・ムーブメント（MST）、およびカトリック教会である[*6]。2004年、インドで組織されたフォーラムは、インドの市民社会における政治的ないし社会的構造（[付録2] 参照）を強く反映していた。運営側は、四つのカテゴリーに分けられていた。インド統合評議会（WSFインドの意思決定機関）、インド作業委員会（WSFインドを機能させるための基盤を作る上でのガイドラインとなる方針を形にすることを責務とする）、インド組織委員会（WSFの実行部隊）、そして、ムンバイ組織委員会である。例えば、インド組織委員会には、不可触賤民として知られるカースト、ダリットとアドヴァシスと総称される部族社会の代表達が、かなりの数含まれていた。

反グローバル化を唱える勢力と代替グローバル化を唱える勢力との間の緊張関係は、第一回のフォーラムから明確に現れていた。例えば、ランドレス・ムーブメントからは、イベントを運営した「ライト・レフト」（軽い左翼）——NGOや労働者党、「ル・モンド・デプロマティーク」など——への批判がなされた（フォーリャ・デ・サンパウロ紙 2001年1月26日 A8）。運営側のオリエンテーションに反して、40人のパンクスと無政府主義者のグループはマクドナルドを襲う恐れがあった（同紙より）。ランドレス・ムーヴメント（MST）の活動家たちは、遺伝子操作をした農作物に反対し小規模な農業を保護するために、モンサントというトランスナショナルな企業の実験農場を襲撃した。フランスの反グローバル化の運動の指導者であるジョゼ・ボベは、後にモンサントに対する別のデモが行われたときからランドレス・ムーブメントに加入した。

組織委員会のメンバー構成に関しては、大衆的な運動と関係して組織はごく少数である。例えば2001年には、八つのうちたったの二つ、CUTとMSTだけがそうしたつながりをもっていた。実際、組織委員会のほとんどは知識人が牛耳るNGOや中流階級からなる似たような団体によって構成されている［Barros e Silva 2001: A8］。市や州、政府のサポートに依存している以上、組織者側はコントロール不可能なあらゆるタイプの対立を避けようと願うものである。警官とのストリート・ファイトが起こらないということが、国家機関との連携の重要性を示していると同時に、代替グローバル化運動の改良主義的性格をよく示している。ル・モンド・ディプロマティーク紙の編集長イグナシオ・ラモネーは、自らの新聞において次のように書いている。「（世界社会フォーラムは、）シアトルやワシントンやプラハなどでなされたような、ネオリベラリズムの過剰によってあらゆる場所で

引き起こされてきた不正義や不平等や災難に対する抗議をするために存在しているのではない。むしろ、ポジティブで建設的な仕方で、今とは違う世界、より非人間的でなくより協調的な世界が可能となるような、新たなタイプのグローバル化を描くことを可能にする理論的かつ実践的な枠組みを提案するために存在しているのである」[Barros e Silva 2001: A14]。

2004年インドでのフォーラムにおいて3,500人の参加者に対して行われた調査によれば、参加者の63%は大学の学位を持っていた（ジャーナル・ド・ブラジル紙。2005年1月17日）。2005年のフォーラムに向けた準備のなかで、組織委員会はフォーラムの「エリート主義的」特徴を自ら認めている。運営を担うNGOの一つ「IBASE」の議長は、会議や講演などの主要な活動について以前は国際委員会によって決められていたが、2005年の会合では、インターネットを通じた幅広い協議を通じて決められると述べている。続けて彼は次のように述べている。

> 「われわれは、組織と社会運動のなかで選ばれたものたちである。もし人々がフォーラムへいくお金がないなら、フォーラムは人々のもとへと出向かなければならない」（ジャーナル・ド・ブラジル紙。2005年1月17日）。

結果として、フォーラムは「エリート達との繋がりがあまりに強い場」である教皇カトリック大学の外へと出なければならなかった。スラム地区の住民の参加を促すために、運営側は彼らに一日2万食を提供することを計画した。運営側はまた、50万USドルほどかかるVIPの旅費を支払うことをやめた。このお金の一部は、南北アメリカ大陸、パキスタン、インドから先住民の代表者たちを連れてくるために使われ、またブラジル各州都からポルト・アレグレへと向かうバスの手配に使われた（ジャーナル・ド・ブラジル紙。2005年1月17日）。

WSFは強力な磁場をなしている。そのことは、毎年のイベントに先立つ政治的プロセスのなかや、フォーラムが政治的アクターを魅了する力のうちに見て取ることができる。進歩主義的な勢力からやってきた政治的アクターは、フォーラムにおいて脚光を浴びることを望む。彼らの参加がメディアによって広く喧伝されることがとくに重要である。ブラジルで行われた全てのWSFに参加している現ブラジル大統領ルイース・イナシオ・ダ・シルヴァから、学問や芸術の世界のスターに至るまで、多くの人がこのグローバルなメ

ディアイベントで自らの存在を顕示したいと考えている。様々な儀式は、参加者にとってだけでなく色々なメディアを通じてそれを知りニュースを追う人々にとっても、有効なコミュニケーションの装置なのである。

グローバルな統合の儀式としてのWSFは、様々なエージェントを様々なレベルの社会的エージェンシーへと定着させる。例えば、ポルト・アレグレ自治当局や、ローカルな大学、知識人、政治家、市民社会のメンバーなどがいる。他にも地域レベルのエージェントとしては、ポルト・アレグレを州都にもち、フォーラムに積極的に参加しているリオ・グランデ・ド・ソル州政府や、ブラジル南部の他の地域、さらには歴史的文化的に同じ国際的な地域の一部をなすウルグアイやアルゼンチンのいくつかの州から参加したアクターたちの存在がある。こうした、ナショナルなエージェントないしエージェンシーの存在——幾つかの全国規模のNGO、労働組合連合、教会、政党、連邦政府当局などの関わり——は注目に値する。グローバルな巨大イベントでは、国際的ないしトランスナショナルなエージェントが参加するだろうことが予想されるし、実際WSFの場合もそうでもある。

国籍あるいは民族の多様性はWSFの中核的な特徴である。というのも、最初のフォーラム以来、参加者は117カ国以上からやってきているからである。バベルの塔にも喩えられるそのイベントには、多くの通訳——その多くはボランティアである——が必要となる。NGO、トランスナショナルな活動家たち、国際財団などは、WSFが存在できることの大きな理由となっている。こうした、それぞれ異なる統合レベルにおけるアクターの複数性は、様々な政治的、社会的、文化的な領域とのつながりをもたらすものであり、フォーラムの大事な政治的資本となっている。事実、このフォーラムは、非覇権的なグローバル化にむけた運動のなかでは、現実の公共圏におけるネットワークをつくる主要な機会となってきた。トランスナショナルでヴァーチャルな共同体が、仮想空間の外で集まるための手段としてのフォーラムは、グローバルな市民社会を作るうえで重要な役割を果たしているのである。

セオアネとタデイ［Seoane and Taddei 2001: 106］は、市ないし州のポリティクスは最初のWSFの運営においては役立っていたことを指摘している。実際、それはリオ・グランデ・ド・ソル州エネルギー公社と州銀行によって助成されていた。事実、リオ・グランデ・ド・ソルは長年のあいだ労働者党が動かしてきた州である。さらにポルト・アレグレという都市もまた労働者党によって統治されてきたし、州政府全体としてだけでなく、教皇カトリック大学やリオ・グランデ・ド・ソル連邦大学もふくめたサポートがなされてい

た。ネイティヴに代わる（alter-native）トランスナショナル・エリートに対する注目が増大するなか、フォーラムの成長と政治的な存在感は有力なスポンサーや賛助者の注意をひくようになった。例えば、ブラジル国内では有数の企業である国営石油会社ペトロブラスは、労働者党の連邦統治が開始した一年後からポルト・アレグレとリオ・グランデ・ソル州に進出してきた。ペトロブラスは2005年に、「スポンサーおよび賛助者」に迎え入れられた。そのリストには、ブラジル最大の半国営銀行であるブラジル銀行、もうひとつの有力な国営銀行であるカイシャ・エコノミカ・フェデラル、また有力な国営企業であるエレトロブラスやインフラエロやフルナスなどが並んでいる。こうしたブラジル政府系の組織以外にも、WSF2005では巨大な国際的企業をスポンサーとして迎えており、そのほとんどは次のようなカトリックないしプロテスタント教会によって後援されている[*7]。

・eed-Evangelischer Entwicklungsdienst（ドイツのプロテスタント教会の組織）
・Christian Aid（イギリスおよびアイルランド教会の機関）
・CCFD（Comité Catholique contre la Faim et pour le Développement, フランス）
・n (o) vib（オックスファム、オランダ）
・CAFOD（Catholic Agencies for Overseas Development, イギリス）
・Rockfeller Brothers Fund（アメリカ）
・Misereor（ドイツのカトリック司教による共同と開発のための組織）

第一回のWSFにかかった経費は、200万 R$（ブラジルの通貨REALの略記）であると公表されているが、そのうちの百万はリオ・グランド・ソル州政府によって払われ、30万はポルト・アレグレ市が支払い、残りはNGOが分担した（フォーリャ・デ・サンパウロ紙、2001年1月26日、p. A7）。

公的基金を使うことは2001年にもすでに問題になっていた[*8]。実際、公的基金の増大をうけてWSFの批判者たちは、「自由を拒否すべきだという教条に凝り固まった人々」の集まりをブラジルの納税者たちは援助しているのだ［Rosenfield 2005: A3］と非難している。このリオ・グランデ・ド・ソル連邦大学の政治哲学の教授によれば、2005年のフォーラムでは、1,450万R$（約540万USドル）の経費のうち1,000万R$（約370万USドル）が公的資金から支出されている[*9]。

世界社会フォーラムは、ダボスでの世界経済フォーラムに対抗するものとして計画され

た。この会合は、1971年から国連のコンサルタントでもあるスイスのある財団によって運営されている。1,000以上の多国籍企業からの融資を受けている世界経済フォーラムは、グローバルな覇権を握っている政治的エリートと企業エリートを結びつけるものとして形成されている。それは「世界中の政治とビジネスのキーマンの集まり」とされてきた。この会合と、アフリカやアジアや南アメリカで開かれるより小規模なフォーラムは、どこであろうと強く人々をひきつけてきたし、数百のビジネスリーダーがダボスにやって来て懇談するために1企業ごと2万ドルものお金を支払っている。多くの批判者にとってダボスは、大企業の幹部たちが契約を取り付け、政府高官や学問的権威と知り合うために集まる密室であり、20世紀後半のニュー・エコノミック信仰の象徴である [Whitney 1997]。1997年の会議に参加した企業は、あわせて推定年間4兆5千億ドルの売り上げを誇っており、その力はマイクロソフトを率いるビル・ゲイツやパレスチナの指導者アラファト議長さえ惹きつけている [Whitney 1997]。2001年には、およそ3,000人の参加者がダボスに集まり、そのなかには次のような人々が含まれていた。

・Jacob Frenkel（メリルリンチCEO）
・Alan Blinder（元米国連邦準備銀行副頭取、プリンストン大学経済学部教授）
・James Wolfensohn（世界銀行頭取）
・John Sweeney（AFL-CIO代表）
・Charles Holliday（デュポン世界代表）
・Carleton Fiorina（ヒューレットパッカード代表）
・Henry Paulson Jr.（ゴールドマンサックスCEO）
・George Soros（世界的投資家）
・Vandana Shiva（環境運動の世界的リーダー）

1999年のシアトルの戦いの反響が残っていて、2001年は世界社会フォーラムが始まった年であったこともあり、反／代替グローバル化運動の重要性を認める参加者たちによって貧困問題が考慮するべきテーマとされた [Gosman 2001]。

覇権対抗的なグローバルな活動の目新しさは、大西洋の両側ひいては世界の南半球地域と北半球地域で開かれたこの二つのフォーラムの代表者をつなぐ国際的な電話会議を組織する上で主導的な役割を果たした。この電話会議は、2001年の1月28日に行われた（コ

レイオ・ブラジリエンセ紙、2001年1月29日、p.3)。ポルト・アレグレでは、世界社会フォーラムを代表する11人が教皇カトリック大学の講堂に集まった。その中には、アミナタ・トラオレ(元マリ文化大臣),ベルナール・カセン(ATTAC/「ル・モンド・デプロマティク」)、ウォールデン・ベロー(社会学教授、フィリピン)、エベ・デ・ボナフィニ(「マヨ広場の母たち」、ブエノスアイレス)、ラファエル・アレグリア(ホンジュラスの農民運動の指導者)などが含まれていた。ダボスでは、ジョージ・ソロス(世界的投資家)、ジョン・ラギー(国連主席カウンセラー)、マーク・マロック(国連開発計画代表)、ビヨルグ・エドルッド(多国籍企業ABB代表取締役)らがプロテスタント教会に集まった。一時間半におよぶ討論の様子は、リオ・グランデ・ド・ソル州の公共教育チャンネルで放映され、カトリック大学講堂では1,800人の観衆が実際にその様子をみていた。それは激しい意見交換となった。ボナフィニが、あなたは世界中で一日に何人の子供が餓えのために死んでいくのかを知っているのかと尋ね、ソロスが会話の終結を提案したときには、一度中断してしまったほどであった。

この電話会議における両勢力の対峙は、双方の社会的・政治的アイデンティティを強化する役割を果たしただけではなかった。それは、双方がグローバルなメディアの注意を引き付ける重要性を持っているということを明確に示すものであった。ダボスは、裕福で有力な人々が集結するという独自のスペクタクルによって長い間メディアの多大な注目を享受してきた。しかしながら、ポルト・アレグレの会合にはそれは当てはまらない。

次のように言っても誇張にはならないだろう。すなわち、WSFの、そして反/代替グローバル化運動のおもな目的は、グローバル化についての様々なメディアスケープを撒き散らすことにある。グローバルな特権階級の主要な集まりにあわせて、フォーラムと街頭デモといった一連のイベントを行う戦略的努力の一部は、グローバルなメディアのなかで異なるメッセージを流通させることの価値を理解している運動が、明示的な存在感を発揮することを必要としていることと関係している。統合の儀式としての重要性につけ加えて、WSFはグローバルな情報経路においても、代替的なイメージとディスコースを統合していき、より多くのより一般的な聴衆へと届けるという決定的な役割を担っている。したがって、WSFは、いまだに少数の覇権対抗的なグローバル・エリートたちの活動を支えるネットワークであると同時に、政治的でイデオロギー的でユートピア的なマトリックスを結合させ拡散させる契機となっているのである。非覇権的なグローバル政治的エリートの統合の儀式は、現実の公共圏におけるトランスナショナルな活動家とエージェントた

ちのネットワークの動態において中心をなしているのである。

1-3. 非覇権的な政治的運動についてのまとめ

反／代替グローバル化運動の多様性は、頻繁に強調される特徴であり多くの人々にとって目新しさを感じさせるものである。実際、数年前には、農民やインドの指導層の姿を、パンクスと同じ抗議活動の場に見出すことなど全く予想できないことであった。しかしながら、忘れるべきでないのは、こうした多様性は環境運動にも、もっと以前の社会主義運動にも存在したということである。例えば、最初の社会主義インターナショナルは1864年に開かれており、少なくとも三つの国、イングランド、フランス、ドイツの代表から構成されていた［Riazanov (1926) 2004］。グローバル化がすすみ、とくに時間−空間の圧縮が進んだことで、今日では国際的な覇権対抗的な動きもまた、より多様なものになることは十分予測されることである。

現在の、反／代替グローバル化運動内部の多様性についての驚きの背後には、二つの要因が存在する。第一に、集合的な政治的主体の性質を単純化して捉える誤解がある。ひとつの集合体が同じ運動を代表し、同じ運動によって代表され、似たゴールを目指しているという事実があるからといって、対立する勢力によって分割されることがないわけではないし、内部が均質に構成されているわけでもないのである。第二に、現実に存在する社会主義の終焉とその理念的ないしユートピア的な影響力が薄れたことによって生じた、広範囲の危機と結びついた契機がある。以前は横に置かれていたものが議論の主題となり、揺れ動く議題となる。実際、運動の多様性が示しているのは、現実の公共圏とヴァーチャルな公共圏双方における、進歩的な同時代のネットワークの影響力なのである。

街頭デモもWSFも同じ「構造対反構造」という戦略を採っている。それはグローバルなメディアに侵入し、代替的なイメージやメッセージを離れながらにして目撃することを可能にする方法である点で、大変に有力な戦略であり、トランスナショナルな想像上の仮想的共同体が構造化していくことの背後にある力の一つである［Ribeiro 1998］。最後に留意すべきことは、反／代替グローバル化運動の混交的な多様性は、トランスナショナルな現代の左翼がこの運動のメンバーや指導者ではないということを意味しないということである。反対に、社会主義に牽引されてきた古い左翼とこの新たなグローバルな動きには、ある種の連続性が見出されうるのである。

2. 経済的な非覇権的なグローバル化：フォス・ド・イグアスとシウダ・デル・エステにおける越境とブラジリアのパラグアイ・マーケット

非覇権的な経済的グローバル化のなかで最も人目につきやすいアクターは、例えばグローバルに流通しているガジェットを扱う街頭の売人だろう。しかし彼らは巨大なグローバル経済の氷山の一角にすぎない。それを非覇権的なグローバル化と呼ぶのはそのエージェントがグローバル資本主義を破壊することを意図しているからでもないし、支配的な秩序に対して急進的な代替を提示しているからでもない。それらの活動があらゆるところ、つまりローカルな、地域的な、国内的ないし国際的な、あるいはトランスナショナルな全ての次元で、経済的な特権階級に抗っているからこそ、彼らは覇権的ではないのである。したがって、彼らは特権階級にとっては脅威として描かれるようになる。と同時に、彼ら自身は、自分達を支配しようとする政治的・経済的エリートの力を感じるようになるのである。彼らに対する国家や企業の態度は大変に意味深いものである。

ほとんどの場合、こうした活動は念入りな弾圧的活動の焦点となり、警察の案件として扱われる。非覇権的な経済的グローバル化は、臓器密輸などの取り締まられるべき非合法的活動を含む広大な領域をなしている。これらは疑いなく麻薬密売なども含んでいる。同様に、街頭の売人などの労働者の「犯罪」は国家の定める基準の外で働くことであり、非覇権的なグローバル化の意味深い一部である。犯罪を美化するのは私の意図するところではない。しかしながら、基本的に国家を中心とする議論からは距離を取りたい。それらは強力に何が合法であり何が非合法であるかを定義する国家の規範と統制に依拠しているし、分化した社会的部分や階級間の権力関係の歴史を反映している（この問題に関連して興味深い著作として［Heyman 1999］がある）。国家的ではないもう一つの視角を構築するために、私は人類学の蓄積におけるもっとも有力な財産である、エージェントの視点に立って考えるということを深く考察していきたい。

非覇権的な経済的グローバル化は、ピラミッド型に凝結した様々なタイプの断片やネットワークによって構造化されている。その頂点にはマネーロンダリング組織、マフィア的な活動、あらゆる種類の贈収賄がある。こうした裏グローバル経済に関わるエージェントたちがいかに力をもち選ばれた人間であっても、自分たちだけで活動することはできない。そこにはピラミッド構造の底辺部の貧民からなる莫大な数の関係者が存在する。こう

した社会的アクターにとって、非覇権的なグローバル化は生計を立てたり、社会的に上昇するための手段である。ネットワークと仲介手数料によって接合されたこのグローバルな構造は、私が「コンソーシエーション」(consortiation) と呼ぶ、数十億ドル規模のインフラ整備プロジェクトをめぐるトランスナショナル、ナショナル、地域的、ローカルな、様々なエージェントたちの接合に比せられる [Ribeiro 1994, 2002]。

ピラミッド構造の底辺における活動は、私が草の根の経済的グローバル化と呼ぶものであり、まさに下からのグローバル化である。それによって、他の方法では決して多様な社会的ないし経済的層にいきわたらないであろうグローバルな富の流れへのアクセスが可能になる。それはまた、全ての市民に職を提供することなどできないナショナルおよびグローバルな経済のなかで、社会的上昇への道や、生存する可能性を開くものである。そういうわけで私は、この非覇権的な経済的グローバル化については、その上流層よりも、こうした底辺に近い部分に関心を抱くのである。

以下では、非覇権的な経済的グローバル化の動態を、ブラジルのフォス・ド・イグアス市とパラグアイのシウダ・デル・エステ市において形成された「社会的な越境空間」における実践から描き出していく。その後で、ブラジル国内のグローバルなガジェット市場のなかでもっとも巨大で論争を呼んでいる、連邦都市ブラジリアにおけるいわゆるパラグアイ・マーケットについて記述していく。

2-1. シウダ・デル・エステ／フォス・ド・イグアス：グローバルな断片化された空間としての社会的トランス・フロンティア

全長3,940kmのパラナ川は、南アメリカでアマゾンの次に長い川である。この川は、もっとも知られた南アメリカの国境と重なっている。いわゆる三カ国国境は、アルゼンチンとブラジルとパラグアイを分割している。この地域にはそれぞれの国に属する三つの都市があり、国境をまたぐ二つの橋によって結合された国際的な都市システムを構成している。フォス・ド・イグアスは、タンクレド・ネヴェス橋 (1985年開設) によってアルゼンチンのプエルト・イスアスと、アミザーデ(フレンドシップ)橋(ポルトガル語で友情を意味する、1965年開設) によってパラグアイのシウダ・デル・エステとつながっている。

有名なイグアスの滝は世界で最も大きな滝の一つであり、ブラジルとアルゼンチンの国境をなすイグアス川流域に位置するが、この三カ国国境と同じ地域にある。この滝目当て

に何千人もの観光客がアルゼンチンのプエルト・イスアスとブラジルのフォス・ド・イグアスにやってくる。このグローバルおよびナショナルな観光産業以外にも、このエリアを特徴的なものとしているグローバル化の力がある。その一つが三国国境地域が世界中の国境と接しているということである。つまり、この地域では植民地時代から密輸が行われているのである［Grimson 2003］。そのほかにも、1970～80年代のブラジル・パラグアイ両国共同の「開発プロジェクト」の産物である、世界で二番目に大きい水力発電用ダム「イタイプ」がある。イタイプの建設は覇権的なグローバル化において大きな出来事であった。というのも、それによって、膨大な労働力の需要とテクノロジーとトランスナショナルな資本とエリートがやってきたのであり、とくにプエルト・イスアス市とフォス・ド・イグアス市にとっては急速な人口増加を意味したからである。さらには、環境運動がこのエリアの熱帯雨林をグローバルな緑地図上に位置づけ、9・11後のアメリカの帝国的な「セキュリティ」の言説において三国国境地域はテロリストの温床とみなされるようになった［Ferradas 2004］。

［表2］　三国国境地帯。

国	土地面積 (km²)	人口 (万人)	州（他）	都市	人口（人）	橋
アルゼンチン	3,761,274	3,600 (2001)	ミシオネス	プエルト・イスアス	321,038	タンクレド・ネヴェス
ブラジル	8,514,876	17,000 (2000)	パラナ	フォス・ド・イグアス	258,543	タンクレド・ネヴェス／アミザーデ
パラグアイ	406,752	510 (2002)	アルト・パラナ	シウダ・デル・エステ	222,274	アミザーデ

＊［Rabossi 2004 : 309］より

「社会的なトランス・フロンティア空間」という概念［Marcano 1996］は、三国国境地帯のような場所で育つ特定の関係性を考察する上で有用である。それによって、複雑でフレキシブルな分類装置として機能してきた国境をめぐる地帯で諸アクターが育んできた社会的、文化的、経済的、政治的、血縁的な関係性を理解することができる。国家やその機

関、エージェント、エージェンシーなどは、法的支配の下にある地域をコントロールしようとする領域的な実体である。国境地帯で社会的エージェントが経験するフレキシブルな性質は、国家的エージェントの影響力が弱いことや、トランス・フロンティア空間の内部で活動する他の社会的エージェントと国家エージェントが共謀していることに関係している。この概念はまた、国家によって強制される支配を必然的に超えた空間において動く様々な種類のエージェントを把握する上でも有用である。社会的トランス・フロンティアがどこで物理的に閉じているかを定義することは不可能である。なぜなら、それは公的な制度によってつくられたものではないからだ。社会的トランス・フロンティア空間は、国民国家の伝統的な論理を超えていくものであるから、もっとも大きなトランス・フロンティア空間はしばしば、グローバルな人間とモノと情報の流通経路と結びついたグローバルな断片的空間となる傾向をもった、トランスナショナルな領域である。まさにその一例がこの三国国境地帯なのである。

三国国境地帯では、とくにアルゼンチン国内のイグアス国立公園と滝を訪れる国内外の観光客と関連してプエルト・イグアスも重要ではある［Mendonça 2002］ものの、この地帯のおもな社会的越境空間はブラジルのフォス・ド・イグアス市とパラグアイのシウダ・デル・エステ市との関係を通じて構造化されている。これら二つの都市は、その成長と複雑さがここ2、30年の間に加速した同一の関係領域を形成している。双方ともに、重要な金融の中心でありまたグローバルな取引の中心である。これらの都市はまた民族的にも分節化された単位となっている。パラグアイ人、ブラジル人以外にも、この社会的トランス・フロンティア空間にはアラブ人（とくにシリアとレバノンからやってきた人々。キリスト教徒もイスラム教徒もいる）や中国人や他のより少数派のエスニック集団が存在する。

以下の議論は基本的に、フェルナンド・ラボシ［2004］とセサール・ペレス・オルティス［2004］によって行われたシウダ・デル・エステについての調査に依拠している。というのも、シウダ・デル・エステは、何千人ものブラジル人が訪れて輸入品を購入しそれぞれの町へと持ち帰るところであり、この地帯において中心的な役割を果たしているからである。人々はしばしば3,000km以上も旅をする。彼らは完全にノマド的な商人であり、それぞれのホームタウンとシウダ・デル・エステの間をつねに旅している。彼らは、ポルトガル語で「サコレイロス」(sacoleiros：運び屋）と呼ばれる。彼らが持ち帰る多くの荷物は、しばしばパラグアイ・マーケットとよばれる路上市で売られる様々なガジェットや模造品でいっぱいである。ブラジル人の運び屋たちは、私が下からの非覇権的な経済的グローバ

ル化と呼ぶものの一部をなす、今も世界中でおこなわれている経済的実践の一例である(関連して、ブルガリアのトレーダー・ツーリストについては[Konstantinov 1996]を、とくに東アジアでのグローバルな模造品市場の重要性に関しては[Chang 2004]を参照のこと)。この意味で、こうした貿易商人はネイティヴに代わる(alter-native)、トランスナショナルなエージェントなのである。

世界中どこでも国家や大企業はこうした活動を、非合法的なものでありナショナルおよびグローバルな経済活動に対する脅威であるとみなす。興味深いことに、こうした社会的エージェントや彼らの活動は、ほとんど学問的な著作では考慮されない。疑いのないことに、それらは、しばしば「影の経済」というネガティブな名によってラベル付けされてきた。こうした活動やそれを担う社会的エージェントに対して使われてきた「密輸」や「著作権侵害」といった用語は、こうした活動を、貿易商や企業にとって「不公正な競争」を意味するものであり、税収の不十分な国家にとって大きな問題であるという理由でコントロールしようとしてきた、古くからの衝動を表している。よりニュートラルな表現として「非公式経済」(インフォーマル・エコノミー)と呼ばれるときもあるが、そのときには、何が公式で何が非公式かの定義は権力関係によって規定されているという、重大な問題が看過されている。以下では、シウダ・デル・エステと、ブラジルの連邦特別区ブラジリアにある、国内最大で最も論争を呼んでいるパラグアイ・マーケットにおいてみられるグローバルな非公式経済について記述していきたい。

2-2. シウダ・デル・エステ:グローバルな断片的空間

シウダ・デル・エステは、パラグアイでは首都アスンシオンに次いで最も重要な都市である。パラナ川沿いに位置し、ブラジルのフォス・ド・イグアス市の前面にひろがるこの都市の運命は、1957年の開設以来、ブラジルのパラナ州を通って大西洋まで至る、ブラジルの港へとつながるルートの入り口としての役割に結びついてきた。このブラジル領内の全長730kmのルートは、内陸国であるパラグアイを時間と金銭の面で助けるものであった。それはまた、パラグアイを通って大西洋へと至る河川経由のルート、つまりアルゼンチンによって厳重に支配されたパラナ川とラ・プラタ川とは異なる地政学的な代替を代表するものでもあった。ブラジル政府の資金をもとにフレンドシップ橋の建設が1950年代なかばに始まり、1965年に開設された。

シウダ・デル・エステに観光客を引き込むために、パラグアイ政府は様々な手段を講じた。この街の経済における質的な変容は、1980年代にブラジルからの「ショッピング・ツーリスト」が増大したことによって起こった。彼らは定期的にシウダ・デル・エステを訪れ、この都市を南アメリカ最大のディスカウント・ショッピングセンターと考えていた。実際、シウダ・デル・エステは世界有数の再輸出品取引センターとして成長していった。

電気製品やコンピューター、グローバルに流通するガジェット、模造品などや、輸入された化粧品や衣服やアルコール飲料等などの商品の安さはトレーダー・ツーリストを惹きつけた。中流階級の人々は、しばしば本物のブランド品を購入することができず、街路やシウダ・デル・エステの商店に溢れかえっている偽モノの模造品であきらめる。パラグアイ、とくにシウダ・デル・エステは著作権侵害と密輸の中心であることから国際的に非難されているが、この状況は多分にパラグライ政府の両義的な位置どりによって維持されている。一方で、このグローバルな非公式経済で行われていることを効果的にコントロールすることは難しい。というのも、パラグアイのエリート達が歴史的にこの営為に関わってきたし、国境の両側で贈収賄がはびこっている。他方で、その多くがパラグアイの領土を越えている、無数の強力なネットワークからなる巨大で複雑な配置をコントロールする適切な制度的基盤を、パラグアイ政府は欠いている。同じ状況はブラジル側でも生じている。マネーロンダングの中心としてのフォス・ド・イグアスの重要性は何度もブラジルのメディアによって指摘されているし、2004年の国会においては重大な調査事項となった。

シウダ・デル・エステを草の根のグローバル経済の主要な中心にまで至らしめた開発を理解するためには、輸入品の持込許可についてのブラジルの法制を考慮する必要がある。海外に旅行し、陸路の国境を通過して帰国する全てのブラジル人は、税関を通らなければならないが、その際15,000USドル相当の免税品のみ持ち運ぶことができ、それは1ヶ月間有効な控除である。

このために、数千のブラジル人が定期的に二つの都市を行き来するのである。これらの人々は税関の管理を流れようとするいわゆる「密輸の蟻」を形成する。当局は、ブラジルに入ってくる全ての人と乗り物をチェックすることができず、その役人の多くは贈収賄に手を染めている。

シウダ・デル・エステはしばしばマイアミと香港につぐ世界で三番目に巨大な商業都市とされる [Rabossi 2004: 7]。シウダ・デル・エステの経済的な力は南アメリカの広大な領域——アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ、またボリビアなどのアンデス山脈の

国々——に影響を及ぼしている。ブラジルでは、トレーダー・ツーリストは、レシフェやフォルタレーザなどの3,500kmも離れた北端の都市からさえやってくる（ポルト・アレグレからのトレーダー・ツーリストについては［Machado 2005］を参照のこと）。様々な異なる資料がシウダ・デル・エステにおける一年間の取引総額を見積もっているが、大体のところ25億から150億USドルである［Rabossi 2004］。シウダ・デル・エステの実際の経済力がどれほどの規模のものであろうと、それはこの都市の建造物や公共サービスに反映されてはいない。喧騒にみちた商業活動や高級なショッピング・センターや訪れる外国人たちがいなければ、シウダ・デル・エステは近隣地域の貧しい町と変わるところのない街になっているだろう。ほとんどの取引がなされるダウンタウンは、戦略的にフレンドシップ橋近くに位置しており、2001年にはおよそ1,750の商店が集中していた［Rabossi 2004］[*10]。そこには、高級ショッピング・センター、多くの商店や小さな店があり、街路にはグローバル経済の草の根のグローバル化を担う何千人もの物売りや他の労働者がいる。街路はあらゆる種類の取引をする人で埋め尽くされている。両替、食べ物売り、飲料品、グローバルなガジェット売り、他にもあたらな顧客を惹き付けて商売を成立させよう目論む人々もいる。トランス・フロンティアのマーケットで働く社会的エージェントの多くは——大概の貿易活動においてそうであるように——買うときと売るときの価格の差異によって生計をたてる仲買人である。

贈収賄が増殖する政治的社会的状況において経済的な力が集中していることが、この都市についてのネガティブなステレオタイプが生まれる肥沃な土壌となっている［Pérez Ortiz 2004］。シウダ・デル・エステはしばしばドラッグ・カルテル、中国のマフィア、日本のヤクザ、イタリアのギャング、ロシアのギャング、ナイジェリア人やヒズボラのテロリストなどの南アメリカにおける巣窟とされる。9・11以降、この街のイメージはよりダークなものとなった。

三つの国境が何千人のアラブ移民やその子孫の拠点となったことで、この地帯は北アメリカの新たな地政学においても焦点となる場所となった、つまり、イスラム教徒のテロリストたちの避難所として疑われたのである［Ferradas 2004］。社会的トランス・フロンティアは、しばしば国家のコントロールを超えた空間にみられるものだが、その結果として、非合法的活動を可能にするゾーンとして当局やメディアからネガティブな価値付けをされるものである。したがって、こうした空間は、無数の異なる国からきた人間や事物や情報の混交体であり、国民国家の脆弱さを露にする境界的な空間であることから、異なった政

治的および経済的利害によって容易に操られる。

シウダ・デル・エステとフォス・ド・イグアスは、民族的に分節化された労働市場を形成している。多くの外国から来た商人とほとんどのブラジル人はフォス・ド・イグアスに住み、毎日国境を越えて働くためにパラグアイのシウダ・デル・エステにやってくる。多くのパラグアイ人は、フォス・ド・イグアスに輸入品の小売店を持っているが、シウダ・デル・エステに住んでいる。1998年にパラグアイ中央銀行によって行われたシウダ・デル・エステの146の仲介業者の調査では、28%はパラグアイ人、27%はアジア人、24%はアラブ人、11%はブラジル人であり、他の10%は出自不明の人々であった [Rabossi 2004: 80]。レバノン人と中国人の移民は、1960年代末から1970年代初頭にかけた時期からシウダ・デル・エステで生活するようになった [Rabossi 2004: 205]。どちらの街にもモスクがあり、フォス・ド・イグアスには仏教徒のためのお寺もある。シウダ・デル・エステには日本語とフランス語の学校がある。とてもよく目につくアラブ人は、キリスト教徒とイスラム教徒に分かれており、そのほとんどがシリア、レバノンとパレスチナから来ている。レバノン人は1950年代後半から、フォス・ド・イグアスの開発において目立った役割を果たしている [Rabossi 2004: 47]。

世界中の異なった地域からやってきたトレーダー・ツーリストたちの言語をこの社会的トランス・フロンティア空間において聞くことができる。さらに、民族的分節化の結果として、シウダ・デル・エステでは複数の言語がひろく話されている。パラグアイの公用語であるスペイン語とグアラニー語のほかにも、ポルトガル語、アラビア語、広東語、台湾語、英語、ヒンドゥー語、韓国語が主に話されている [Rabossi 2004: 2]。シウダ・デル・エステでアラブのTV局アルジャジーラが放映されていることは、言語としてのアラビア語の存在感を強いものにしている。ブラジルからの大量の「ショッピング・ツーリスト」の流れの影響によって、ポルトガル語は戦略的な取引用の言語となった。この要素は、シウダ・デル・エステで他の仕事をしていた多くのブラジル人に経済的なチャンスを生み出した。複数の調査や査察によれば、シウダ・デル・エステで働いている諸集団のなかではブラジル人が最も大きい部分をなしている [Rabossi 2004: 81]。

毎日、何千もの人々がフレンドシップ橋を渡る。2001年には、一日平均で18,500台の乗り物と20,000人の歩行者がこの橋を渡っている [Rabossi 2004: 42]。これらの数に含まれるのは、橋を一回だけ渡った人々（こうした人々は少数に留まる）、シウダ・デル・エステかフォス・ド・イグアスのどちらかに住んでもう一方で働いているために一日に最低

一回は橋を往復する人々、そして荷物を運んだり誰かをガイドしたり乗り物を運転したりしながら何回も橋を渡る人々がいる [Rabossi 2004: 43]。これらの人々がブラジル人の運び屋であり、「ショッピング・ツーリスト」であり、「パセロス」(paseros：「通過する人」を意味するスペイン語で、国境の一方の側から他方の側へと商品を運ぶことを仕事にする人々を指す) であり「ラランジャ」(laranjas：ポルトガル語でオレンジを意味する。偽の態度を示すスラング。特定の商品を買おうとする人のふりをして、実際は誰か他の人——通常はツーリスト・トレーダー——の為に働いている人のことを指す) である。そこにはまた、人間や商品を運ぶ何千人もの人々がいる。普通のタクシーもあれば、バイク・タクシーもあれば、バンやトラックやバスもある。ブラジルの税関や連邦警察は、こうした群集の流れをコントロールする十分な制度的基盤を持っていない。

運び屋たちを最大限働かせる戦略のために、最も忙しいのは、水曜日と土曜日となっている [Rabossi 2004: 89-90]。水曜日と土曜日はまたいつもより多くの売人たちを引き付ける。というのも、ショッピング・ツーリストたちが膨大な数の人々が国境を横断するのに乗じようとするからであり、そのために税関の役人たちが特定の人や乗り物を引き止めるのが難しくなるからである。数の膨大さは、覇権的でない戦術を形成する。経済は (モノや人や貨幣の) 移動に依拠するものであり、しばしば長い列ができると、停止してしまう。様々な理由があるが主にブラジル側の税関による管理の引き締めによって、ときどきデモが起こり、何キロも続くバスやトラックや車の列によって橋が占拠される。こうした行き詰まりは、異なった仕方で、シウダ・デル・エステと相互につながっている多くの他の断片化したグローバルな空間、例えばサンパウロ市の3月25日通りにおいてしばしば感知されるのである。

こうした移動と取引の世界において「通過する人」は目立つ存在である。ラボシ [Rabossi 2004: 46] の見解では、彼らは商品の取引や輸送のほとんどを担っており、重い荷物を背中や自転車やバイクや車にのせて運ぶ約5,000人ほどからなる [Rabossi 2004: 46]。2001年には、500を超える「通過する人」がパラグアイの「東部統一貨物輸送人組合」のメンバーであった [Rabossi 2004]。バイク・タクシーのドライバーはまた複数の組合によって組織されている [Rabossi 2004: 73]。このトランス・フロンティアな労働市場においては、国籍が問題になる。例えば「オレンジ」と呼ばれるのはブラジル人であり、大概は女性であって、彼女たちは一ヶ月に許される上限である150USドルの免税品をもってブラジルへと戻る。彼女らは自らの権利と輸送のサービスを運び屋に売るのである。「オレンジ」た

ちは、ブラジルの税関で引き止められることを恐れる。そんなことが起これば、彼女たちが入国したことが登録され、150USドル分の権利が再び一ヶ月に一回のみ有効なものとなってしまう。もし彼女たちが働き続け、その期間の間に税関の役人につかまった場合、商品は没収されてしまうのである [Rabossi 2004: 77-78]。

両方向の流れがある。ブラジルからパラグアイに持ち込まれる商品はとくにタバコが多く、ブラジルに密輸品として再び持ち込まれる。少なくともある時期には、ブラジルからパラグアイ方向への流れがパラグアイからブラジル方向への流れを凌駕していた [Rabossi 2004: 47]。ラボシ [Rabossi 2004: 47] によれば、パラグアイからブラジルへの流れはブラジル人がコントロールしている。両都市間の財政上の流れは非常に複雑であり、しばしばブラジル中央銀行や連邦警察の査察の標的となる。シウダ・デル・エステには20を超える銀行があり、そのいくつかはブラジルやヨーロッパやアメリカに本社を持っている。パラグアイ中央銀行の調査では、1991年から1997年にかけて9億ものUSドルがブラジルに持ち運ばれている ([Rabossi 2004: 66] 参照)。多くの装甲車によってパラグアイからブラジルへ貨幣が持ち運ばれ、それはフレンドシップ橋の乗り物の流れの一部になっている。

市場(いちば)についての人類学が教えているように、市場は多くの異なるエスニック集団が相互に関係する場であり、生態学的領域であり、生産の拠点でもある。シウダ・デル・エステは多くの異なった生産拠点が相互につながっている場所である。さらに、この都市が草の根のグローバル化の大きなハブであるとするなら、非覇権的なグローバル経済における様々な断片化したグローバルな空間とこの都市はつながっている。一方で、アラブや中国のディアスポラは、国際的なつながりを作る上での道具となっている。他方で、ブラジル人の運び屋たちは、シウダ・デル・エステを、ブラジル国内の一般的なグローバル化における断片化されたグローバル空間と結合する、具体的な社会的エージェントとなっている。

彼らは通常、大半の時間は、街頭の小売人かいわゆる輸入品マーケットの露店のオーナーとして、ホームタウンで独自の小商いをしている。彼らはノマドであり——週に2回も旅立つものもいる——コスモポリタンであることはほとんど無い。というのも、大半の時間は二つのグローバルな断片化された空間——商品を買う場所(この場合はシウダ・デル・エステ)と売る場所——につながっているだけだからである。このように彼らの活動は、恒常的な旅であり、時には3,000Kmもの距離を往復することになる。彼らは普通のバスにのったり、仲間と一緒に「観光」バスを仕立てたりする。旅は長く退屈で、多分に緊迫したものである [Pérez Ortiz 2004; Machado 2005]。パラグアイに行くとき、販売する

商品を購入するために彼らは多額の現金や自らの売り上げを持っていく。ホームタウンに帰ってくるとき、彼らはバスの手荷物置き場に数千ドル相当の新たな商品を載せて運んでくる。彼らは多くのことを恐れている。パラグアイに行く時も帰る時も、強盗に襲われる可能性はある。商品がフォス・ド・イグアスのブラジルの税関で没収されてしまうかもしれない。ホームタウンにたどりつくまえに連邦公道警察（ハイウェイ・ポリス）がバスを止めに来るかもしれない。こうしたケースでは、積荷が没収されるか、法外なわいろを支払わなければならなくなるかである。最後に、事故はよくあることであり、そのため彼らの旅は、ホームタウンで待つ人々にとっては憂慮の源となる。多くの運び屋の考えでは、フォス・ド・イグアスへの旅はまさにロシアン・ルーレットであり、そこではあらゆることが起こりうる［Figueiredo 2001］。さらに、パラグアイで購入した商品を無事持ち帰ったとしても、それらをマーケットで販売している時に、ブラジルの連邦財政当局の抜きうち検査によって没収されてしまうことさえある。

ツーリスト・トレーダーたちは、自らが密輸をしているとは考えていない。運び屋という言葉さえ適切だとは思われていない。彼らは自分たちを労働者あるいは商人とみなしており、彼らの活動にしばしば付与される否定的な含意を排除しようとする。彼らの考えでは、自分たちはドラッグ売買やマネーロンダリングや密輸のような非合法的活動と同一視されるべきでない、経済的ニッチをみつけた誠実な働き者であるということになる（アフリカ諸国、フランス、ドイツやイタリアにおける草の根のグローバルな取引に関する似たような状況については、［MacGaffy and Bazenguissa-Ganga 2000］を参照のこと）。実際、シウダ・デル・エステとフォス・ド・イグアスのトランス・フロンティアには、飛行機や巨大トラックを含む密輸網があり、それはトレーダー・ツーリストには関与できない種類の装置である。他の非公式な市場の働き手たちと同様に、トレーダー・ツーリストは両義的な社会的エージェントである。彼らは誠実に働くことを望んで小商いをするが、国家の管理を逃れたニッチにおいて金銭を稼いでいる。この両義性から「運び屋」と政府当局との間には多くの矛盾が生じてくる。というのも彼らは野外で働き、街路で商品を売るからである。公共圏において働いていることからくる可視性は、彼らを政治的アクターへ変える。彼らはしばしば自分たちで組合を組織し、それは彼らと国家や政治家の関係を媒介する集合的なアクターとなる。票集めに必死な政治家が、こうした草の根のグローバル化の社会的エージェントの代弁者となることは珍しいことではない。実際、こうした商人たちは、政治家にとってある種の価値をもつ政治的主体となることによって、より安定した

労働環境を得るようになる。消費者もまた彼らに対して両義的な感覚を抱いている。彼らは、運び屋たちの合法性については疑問があることを知っているが、安価な免税品や模造品を享受してもいる。こうした理由で、覇権的な経済的アクターが著作権侵害とか密輸と呼ぶ、こうした動きの広がりを抑制するのは難しいのである。

人類学者たちは、こうした今日におけるグローバルなノマド的取引を民族誌的に理解しようと努力してきた。例えば、ほとんどポルトガル語を話せない中国人の若い男女がブラジリアの街頭であらゆる種類のグローバルなガジェットを売っているのは、よくある光景である。ニューヨークやワシントンでは街頭の小売人は西アフリカの人々である。アフリカ人は、またフランスや他の欧州各国においてトランスナショナルな商売人となっている[MacGaffey and Bezenguisa-Ganga 2000]。アフリカ沿岸のカーボベルデからブラジルのフォルタレーザにやってきた女性たちは、品物を買い入れ故郷に帰ってそれを販売している。こうした断片化されたグローバル空間を＜つなぐもの＞(connector) たちは、しばしばアラブ人や中国人や韓国人といったエスニック集団であり、彼らは世界中に張り巡らされたディアスポラ的なネットワークをうまく利用しているのである。実際、アジア人、とくに中国人と韓国人は、草の根のグローバル化におけるもう一つのグローバルな断片的空間である、ブラジルのパラグアイ・マーケットにおいて次第に目立つ存在となり始めている。

2-3. ブラジリアのパラグアイ・マーケット：もう一つの断片的グローバル空間

ブラジリアはシウダ・デル・エステから1,600kmも離れている。にもかかわらず、このパラグアイ・マーケットは、ブラジリアの住民の生活にとって重要な経済的な力となっている。彼らの多くは2,200以上ある売店で働いており、そらちの売店が今日では正式にパラグアイ・マーケットとの公式名称である「輸入品マーケット」を構成している。パラグアイ・マーケットは、ブラジリアや他の都市からの多くの買い物客を惹きつける。観光客も、グローバルなステータスシンボルの格安品を求めて集まってくる。何百もの売店では、DVD、コンピュータ、携帯電話、ソフト、ゲーム、サングラス、香水、化粧品、衣服、スニーカー、アルコール飲料、インターネットからダウンロードした最新の映画などが売られている。

パラグアイ・マーケットは、他の草の根のグローバル化の、断片化されたグローバル空間と同様に、都市貧困層が経済的活動の機会をもつ源として、都市の経済サイクルや移民

やストリート・マーケットなどと結びついた歴史をもっている。その歴史はまた、社会運動や政治家や市当局が関わってくる都市内部の矛盾と結びついている［Souza 2000］。「密輸」はブラジルでは連邦政府の定める犯罪であり、だからこそそれはローカルな役所ではなく連邦当局の注意をあつめる。国家の安全と連邦の定める犯罪を取り締まる責任を担う、国会と最高裁判所と行政府の所在地である連邦の首都ではなおさらである。多くの国内的ないし国際的な利益集団も、ブラジリアにオフィスを構えている。ブラジル国家の中心であるだけでなく、1960年代に都市と建築に関する近代主義的イデオロギーの精華として建設されたブラジリアは、都市的中心として独自の神秘的雰囲気をただよわせている。この計画都市には50万の住民が住み、ユネスコによって世界遺産とされており、そのためにブラジリアの建築物や都市空間の使用に関しては厳格なルールと規制が定められている。パラグアイ・マーケットで働く人々が関わらざるをえない最初のそして最重要の問いは、いかにしてブラジルの首都の中心部で密輸品を扱うマーケットが大きくなることが可能だったのか、ということである。

パラグアイ・マーケットの歴史は、草の根の断片化されたグローバル経済から生まれたエージェントが、公式の経済的エージェントになろうとしてきた戦いの歴史でもある。1990年の創業時、南W3通り沿いの駐車場で30の露店から始まったこのマーケットは、今日では2,200以上の店へと急速に成長していった。非公認の野外ストリート・マーケットからグローバル・ガジェットの公認の有名なマーケットへの変化は、7年間続いた政治的闘争によって達成された。1997年に、連邦地方政府は野外マーケットを撤去し、より開かれていて目につきやすいある新たなエリアへと移した。そこに現在のパラグアイ・マーケットはある。いくつかの政治的戦いと街頭での小競り合いの後で、街頭の商売人たちの不安定な生活は終わりを迎えた。地域当局は、「運び屋」たちが「小規模輸入業者」へと変わる計画を考案した。それは、こうした働き手を非公認のものから公認のマーケットへと移す方法であった。今では、こうした商売人たちは税をはらい、他の種類の商人たちと同等に尊重された存在になっている。パラグアイ・マーケットはいわば洗礼を受けて輸入品センターとなったのである。数年が経過する間に、内部の差異化が起こり、何人かの業者は小売店を管理するようになり、彼らは小奇麗な店舗を作って手広く商売するようになっていった。

こうした草の根のグローバル化の社会的エージェントは、ブラジリアへと金を稼ぐチャンスを求めてやってくる移民である。2001年に行われた調査［Figueiredo 2001］によると、

彼らのうち57.5%はブラジル国内で最も貧しく伝統的な国内移民の源泉である東北地域からやってきている。こうした商売人たちの多数は、ブラジリアの郊外、つまり上層の中流階級が住む近代的な計画都市の外側に住んでいる。彼らのうち10%は、東北地区の4つの都市からやってきており、このことは移民の流れを組織化する上で効果的な社会的ネットワークがあることを示している。通常彼らは徒党を組み、マーケットにおける自分たちの利益を守るための団体を作っている。なかでも二つの組合が連邦地域当局に対してどちらが商人たちを代表するかを争ってきた。これらの組合は、この地域の政治を支配している二つの主要な政党と結びついている。組合の歴史は、新たな決められた場所に移るまえ、駐車場で働いていたときに露店主たちのあいだで生まれた政治的同盟に端を発している。

連邦の首都にあるという立地と数千人の買い物客たちをひきつけるパワーによって、パラグアイ・マーケットはブラジルのメディアを通じて広く知られている。ローカルな商人やショッピング・センターは、このマーケットを非難する。街路の小売人たちは、税金を払わず高い賃貸料や店員の賃金を払わなくてよいために不平等な競争になっているというのだ。この国の主要な産業の中心であるサンパウロの重要な産業ロビー団体、例えば「ブラジル玩具製造業組合」の代表者たちもまた非難を口にする。パラグアイ・マーケットは、ブラジリアから3,500km離れたマナウスにあるブラジルの主要な輸出業ゾーンの代表者たちからも非難されている。マナウスはアマゾン一帯の中心にあり、その多くが電化製品やコンピューター関連の製品を作る多国籍企業からなる数百の製造業者が集まっている。ブラジリアのパラグアイ・マーケットは、連邦政府が密輸や著作権侵害を取り締まることができないことを示す格好の例となった。

これらの要素の組み合わせによって、パラグアイ・マーケットは、国会や省庁や地方の行政・立法当局において議論される主要な政治的問題となったのである。このようにブラジリアのパラグアイ・マーケットが示しているのは、非覇権的な経済的グローバル化の断片化されたグローバル空間が、様々な統合の水準に位置する経済的エージェントだけでなく、地域的、国内的あるいは国際的な動態につなぎとめられた強力な利害関心を代表する政治的エージェントやエージェンシーとも結びついているということである。これらの政治的エージェントがパラグアイ・マーケットを、法制度や市民にとっての脅威と位置づけているという事実は、これら草の根のグローバル化の活動が、非覇権的な領域の一部をなしていることを如実に示している。これらの活動が既存の秩序に対する脅威であることをやめるためには、それらは規制され正常化される必要がある。

ブラジリアのパラグアイ・マーケットは大衆的な世界システムにおける他の多くの結節点を説明する例として多分に興味深いものである。ブエノスアイレスの中央マーケットでは、約1,000の店舗が並びパラグアイで購入した商品が一日2万人もの買い物客に対して売られている。コロンビアには国中に「サン・アンドレスト」(San Andresito) と呼ばれるマーケットがある。この名は、カリブ海に浮かぶコロンビア領の自由貿易ゾーン、サン・アンドレ島から取られている。メキシコ・シティの繁華街は、グローバルなガジェットを売る露店で埋め尽くされている。1980年代におけるニューヨーク五番街の西アフリカ人たちもまた同様の例である (参照 [Stoller 2002])。マンハッタンでは、偽物のロレックスやサングラスやあらゆる種類のCDを道端で買うことができる。買い物客はまた世界的に有名な北京の秀水街市場で偽ロレックスを購入することもできる。そこでは、DVD、靴、シャツ、セーター、コート、皮のジャケット、本物の絹などが売られていて、その多くに、ティンバーランド、トミーヒルフィガー、ナイキ、アディダス、ボス、グッチ、プラダなどのブランドネームがついていた。このマーケットは破壊され、巨大なショッピングセンターとなった。

あるウェブサイトに書かれた「旅行の秘密情報」と名付けられた以下の文は、いかに覇権的な経済的グローバル化が北京で力を持っているかを示している。「北京ではかって偽デザイナーブランドの巣窟となった場所は、偽物のない、完全に英語が通じる巨大ショッピングモールへと変わろうとしている」。

2-4. 非覇権的な経済的実践とそのエージェントについてのまとめ

非覇権的な経済的な運動は、構造と反構造との間の関係がいかに機能するかを示す格好の例である。非覇権的なシステムは、覇権的なシステムの存在を前提にしている。こうしたシステムはまた仲介的な実践——私はそれを結合のメカニズムと呼ぶ——を伴う。後者は、二つのシステムが互いに作用しあうプロセスでもある。ここで挙げた例では、種々のポリティクスが、草の根のグローバル化のエージェントと国内あるいはグローバルな制度側の利害関心を代表するエージェントたちの間に、流れを生み出すチャンネルとなっている。そこには、経済的利害関心と明らかに結びついた結合のメカニズムがある。それを示しているのが、シウダ・デル・エステとフォス・ド・イグアスの社会的トランス・フロンティア空間で行われているマネーロンダリングであり、同時に、シウダ・デル・エステと

ブラジリアのパラグアイ・マーケットにおいて、買い物客たちがなにを買うにも使うことのできるクレジット・カードのような、トランスナショナルな金融制度なのである。覇権的なシステムと非覇権的なシステムの差異は、境界的な状況ではぼやける。そうした状況においては、結合のメカニズムによって、両方のシステムのエージェントや仲介者たちに共通の政治的ないし経済的利害が生じるのである。二つの世界の相互作用を促進する社会的実践であるという点においては、贈収賄もまた同様である。

3. 総括

政治的および経済的な非覇権的グローバル化のプロセスは、なにが正統で、なにが正統でないかについての基準を定めることによって、そのプロセスを正常化する特権をもつ制度的な権力の場との関係において存在している権力の場である。他のグローバル化を目指す運動も、権力を追求する人々によって形作られる。ネイティヴに代わる(alter-native)政治的運動は国家権力の獲得を目指すか、あるいはそれに対して戦いを挑む。だからこそ、その指導者たちはしばしば政治家となるのである。NGOと政府機関もまた近い関係を保っている。NGOのメンバーはしばしばそれらの組織を離れて国家や多国籍機関で働くようになる。

ネイティヴに代わる(alter-native)経済的運動は、富を獲得する機会と、そこから生じる社会的、文化的、政治的利益を獲得できる機会を求める。非覇権的運動と体制のあいだの争いは権力闘争であるために、しばしば様々な国家的エージェントによって媒介される。反グローバル化を唱える街頭デモや露店主たちのケースのような活動が街中で生じると、警察が明確に関与してくる。

膨大な数の人々が一つの場所に集まることは、ネイティヴに代わる(alter-native)トランスナショナル・エージェントの戦術の一部をなしている。数が多いほどより広まりやすい。シウダ・デル・エステのストリートや、フレンドシップ橋や、ブラジリアのパラグアイ・マーケットなどにおける野外の活動に携わる人々は、大衆的なグローバル化の特定の部分に参加している人々なのであり、それはまたこうした状況を管理しようとする国家構造を圧倒するひとつのかたちを表している。それはまた、政治的な覇権対抗的運動である街頭デモの土台となる戦術でもある。

覇権対抗的、非覇権的、あるいは覇権的なプロセスは、構造と反構造との間の関係と似た関係を保っている。だからといって、それらが互いに正確な逆転や完全な対立をなしているというわけではない。すでに述べてきたように、結合のメカニズムの存在は、最初は対立しているように見える多くの利害関心が一つに収束していくことが可能であることを示している。実際のところ、こうしたプロセスは互いを活性化させるのであり、このことは、主要なグローバルエリートの会合に合わせて、反／代替グローバル化運動のデモや会合が行われることについて分析したときにすでにみられたものである。WTOや世界銀行やG8の会合の間に起こる反グローバル化の街頭デモ、とりわけダボスの世界経済フォーラムと世界社会フォーラムとの鏡像的関係がまさにそうした事例である。非公式な経済対公式の経済という図式に基づいた影の経済という概念は、構造と反構造の関係と同種の関係の存在を認めているようにみえる。しかし、草の根の経済的グローバル化のエージェントたちは、もうひとつの世界を構築することを目指しているわけではない。実際のところ、彼らは、まさに彼らを違法な密輸業者や著作権侵害者とみなす人々のように裕福になり権力を持つことを目指すのである。草の名のグローバル化の種々の断片から、国家機関やより大きな政治的構造をコントロールすることを通じて、反構造を形成する労働者や仲介業者たちがいるというイメージを作り上げるものこそ裕福で有力な人々である。こうした社会的表象なしでは、これらの活動を管理することはできず、非公認のマーケットは今よりももっと増えていくだろう。

トランス・ローカルな結びつきや文化を構築することは、様々な他なるグローバル化に共通の特徴でもある。トランス・ローカルな結びつきやネットワーク化は、本稿で考察した他のグローバル化のあらゆる形において存在している。このことが示しているのは、ネイティヴに代わる(alter-native)トランスナショナル・エージェントたちは、国民国家の規範的および規制的な力を、無視したり迂回したりするということだ。トランス・ローカルな政治的結びつきは、しばしばトランスナショナルなアクティヴィズムやグローバルな市民社会といった名のもとに研究される。トランスナショナルな政治的文化はより深く立ち入った民族誌的研究がなお必要とされている。既存の研究の多くは、トランスナショナルなエリートに関するものであり、例えば、ウルフ・ハナーズ［Hannerz 2004］の海外特派員に関する研究や私自身が行った世界銀行のエスニックな多様性についての研究がある［Ribeiro 2003］。

グリック・シラーら［Basch, Glick Schiller and Blanc 1994］が行ったような、国境を越え

る移民たちに関する研究は、トランスナショナルなエージェントたちの政治的ないし経済的実践を明らかにしてくれる。移民やトランスナショナリズムに関する他の著作も、いかにして移民が既存の境界や権力構造を転覆し、トランス・ローカルなネットワークや文化を作り出していくかを示している（例えば［Kearney 1996］や［Sahlins 1997］）。しかしながら、本当の下からのグローバル化に、もっと焦点をあわせる必要がある。というのも、こうした動きには、移民労働と同時代のグローバルなノマド達が、グローバルな富の流れの分配を得ようとして、ネイティヴに代わる(alter-native)トランスナショナルなエージェントとなっていくプロセスが含まれているからである。

トランスナショナルな政治的活動家たちは、その実践において、当然トランスナショナルな結びつきとネットワークに依拠している。同様に、トランスナショナルな草の根の商人たちは、その実践において、境界をぼやかし社会的トランス・フロンティア空間を作り出し、様々な断片化されたグローバル空間を結びつける。ブラジリアのパラグアイ・マーケットといくつかのアジアの国々との間に作り上げられたネットワークの全体像をつかむことができれば、これらの商人たちの活動が、断片化したグローバル空間と仲介業者を結合することを通じて組み上げられた、トランスナショナルなネットワークの働きに完全に依存していることが分かるだろう。要約すれば、政治的および経済的な、ネイティヴに代わる(alter-native)トランスナショナル・エージェントたちは、多種多様な社会的エージェントの高度に複雑な結合と、異なった統合のレベルで定義されている、グローバルな規模に拡散した様々なエージェンシーの持つ力の接合（consortiation）に規定されているのである。

［Gustavo Lins Ribeiro・ブラジリア大学人類学部準教授］

謝辞

COEプログラム「インターフェイスの人文学」によって組織されたトランスナショナリティ研究セミナーへと招待していただき、私のアイディアを議論する機会を与えてくれた小泉潤二教授に感謝の意を表したい。本稿は、2000年にブラジリア大学人類学部によって行われた「他なるグローバル化（other globalizations）」に関する調査研究の成果である。B.E. Figueiredo, A.S. de Souza, E. Bernhardt, M.F. Nascimento, D. Farias, C.P. Ortizは、この研究に参加し色々な仕方で様々な時期に力を注いでくれた。また、以下の方々からも助力と

サポートを受けた。ここに感謝したい。P. Tovar (ICAN-Bogota), L.O. Machado教授 (Federal University of Rio de Janeiro), A. Frigerio教授 (Catholic University of Argentina), F. Rabossi (National Museum, Rio de Janeiro), A. Barragan (ICAN- Bogota), E. Restrepo (University of North Carolina), RP. Machado (Federal University of Rio Grande do Sul), A.C. Gomez (National Autonomous University of Mexico), R. A. Radhay (University of Brasilia)。また、L. Lomnitz教授 (National Autonomous University of Mexico) からは、本稿を書くにあたってのインスピレーションを受けた。

[訳注]

1――― 著者はalternativeとalter-nativeを区別して用いている。前者を「代替的」、後者を「ネイティブに代わる」と訳した。

[注]

1――― これらは分析に有用なかぎりでの定義であり、反／代替グローバル化の圏域における同盟や交換の動態を、多くの点で単純化したものである。

2――― http://www.wto.org/english/thewto_e/whatis_e/inbrief_e/inbr0_e.htm。2005年1月5日閲覧。

3――― 例えば次を参照のこと。"Pancadaria nas Ruas" p.7; "Feijao com Arroz contra McDonald's" p.8 (ともにコレイオ・ブラジリエンセ紙2000年9月7日) ; [Seoane and Taddei 2000]。

4――― 反グローバル化の先駆けとなる出来事は他にもある。Davis and Rowley [2001: 26-7] を参照のこと。Yuenは、歴史の主人公として世界の南半球を強調することがもつ地政学的含意を認識している。「シアトル の戦いに先立つ動きを理解することによって、先進国における運動は、自らの運動が中心にあるという幻想にとらわれることはなくなるだろうし、グローバルなマジョリティをなす人々が、単に『自由貿易』と構造調整の受動的な犠牲者であるというわけではないことをより明確に知ることができるだろう」[Yuen 2000 : 06]。

5――― 「独立メディアセンターは、根本的で正確で情熱的な真実の伝達を生み出すための、集中運営型メディア・アウトレットのネットワークである。企業メディアが自由な人間性の実現への努力についてはすすんで報道しようとせず歪曲するのに対して、われわれはより良い世界のために動きつづけようとする人々への友愛とインスピレーションによって動いているのである」(www.indymedia.org)。

6――― 2003年の組織委員会は以下の団体によって構成されている。ABONG (Associação Brasileira de Organizações Não Governamentais)、ATTAC (Ação pela Tributação das Transações Financeiras em Apoio aos Cidadãos)、CBPJ (Comissão Brasileira Justiça e Paz- CNBB)、CIVES (Ação Brasileira de Empresários pela Cidadania)、CUT (Central Única dos Trabalhadores)、IBASE (Instituto Brasileiro de Análises Sociais e Econômicas)、MST (Movimento dos Trabalhadores Rurais sem Terra)、Rede Social de Justiça e Direitos Humanos。

7――― WSFのスポンサーと賛助者のリストは [付録3] を参照のこと。

8――リオ・グランデ・ド・ソルにある諸大学の学生センターは、WSFの最前列に座ってイベントが公的援助を受けることに抗議した。抗議者たちは労働党党首Olívio Dutraがフォーラムに到着したときブーイングを浴びせかけた。配られたビラを通じて、学生たちは、奨学金や研究や公共の州立大学のために公的資金を使用するよう求めた。それはOlívioが自らのキャンペーンで約束したことの一つであった（フォーリャ・デ・サンパウロ紙、2001年1月26日、p.A7）。

9――2005年1月21日付けで、1USドル＝2.69R$。

10――この都市の経済状態がもっとも良かった時期である1994年から1995年にかけては、同じエリアに6,000以上の商店があった［Rabossi 2004: 62］。

［参照文献］

◇Aguiton, Christophe 2003 *Le monde nous appartient*. Paris: Éditions Plon.

◇Barros, Flávia Lessa de 2005 *Banco Mundial e Ongs Ambientalistas Internacionais. Ambiente, desenvolvimento, governança globale participação da sociedade civil*. Doctoral Dissertation in Sociology, University of Brasilia.

◇Barros e Silva, Fernando de 2001 Anti-Davos festeja Cuba; MST ganha o dia. *Folha de São Paulo*, January 26, 2001.

◇Barros e Silva, Fernando de 2001 ONGs avançam sobre a esquerda. *Folha de São Paulo*, January 28, 2001.

◇Basch, Linda, Nina Glick Schiller and Cristina Szanton Blanc 1994 *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deterritorialized Nation-States*. Langhorne: Gordon & Breach.

◇Callahan, Manuel 2001 Zapatismo and the politics of solidarity. E.Yuen, G. Katsiaficas, and D.BurtonRose (eds.), *The Battle of Seattle: The New Challenge to Capitalist Globalization*, pp.37-40, New York: Soft Skull Press.

◇Chang, Hsiao-hung 2004 Fake logos, fake theory, fake globalization. *Inter-Asia Cultural Studies* (5)2: 22-236.

◇Davis, James and Paul Rowley 2001 Internationalism against Globalization: a map of resistance. E. Yuen, George Katsiaficas, and Daniel Burton Rose (eds.), *The Battle of Seattle: The New Challenge to Capitalist Globalization*, pp. 25-28, New York: SoftSkull Press.

◇Edwards, Michael and John Gaventa (eds.) 2001 *Global Citizen Action*. Boulder: Lynne Rienner Publishers.

◇Escobar, Arturo 1995 *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*. Princeton: Princeton University Press.

◇Ferradas, Carmen A. 2004 Environment, Security and Terrorism in the Triple Frontier of the Southern Cone. *Identities* 11(3): 417-442.

◇Figueiredo, Breno Einstein 2001 De Feirantes da Feira do Paraguai a Micro-Empresários. Mimeo, Department of Anthropology, University of Brasília.

◇Gosman, Eleonora 2001 La pobreza no es negocio para los países ricos. *El Clarín, Buenos Aires*, January 30, 2001.

◇Grimson, Alejandro 2003 *La Nación en sus Limites*. Barcelona: Gedisa.

◇Hannerz, Ulf 2004 *Foreign News: Exploring the World of Foreign Correspondents*. Chicago: The University of Chicago Press.

◇Heyman, Josiah McC. (ed.) 1999 *States and Illegal Practices.* Oxford: Berg.

◇Jimenez Marcano, Elvia 1996 *La Construcción de Espacios Sociales Transfronterizos entre Santa Elena de Uairen (Venezuela) y Villa Pacaraima (Brasil)*, Doctoral Dissertation, Joint Ph.D. Program FLACSO/University of Brasilia in ComparativeLatin American and Caribbean Studies, Brasília.

◇Keane, John 2003 *Global Civil Society?* Cambridge: Cambridge University Press.

◇Kearney, Michael 1996 *Reconceptualizing the Peasantry: Anthropology in Global Perspective.* Boulder, Colorado: Westview Press.

◇Keck, Margaret E. and Kathryn Sikkink 1998 *Activist Beyond Borders.* Ithaca: Cornell University Press.

◇King, Mary 2000 Network. Paper presented at the session "Meaning, Subjects, and Networks. Environmental Social Movements and the Anthropology of Activism," in the 99th Annual Meeting of the American Anthropological Association, San Francisco, November 15-19, 2000.

◇Konstantinov, Yulian 1996 Patterns of Reinterpretation: Trader Tourism in the Balkans (Bulgaria) as a Picaresque Metaphorical Enactment of Post-Totalitarianism. *American Ethnologist* 23(4): 762-782.

◇Little, Paul E. 1995 Ritual, Power and Ethnography at the Rio Earth Summit. *Critique of Anthropology* 15(3): 265-288.

◇MacGaffey, Janet and Rémy Bazenguissa-Ganga 2000 *Congo-Paris. Transnational Traders on the Margins of the Law.* Bloomington: Indiana University Press.

◇Machado, Rosana Pinheiro 2005 'A Garantia soy yo': etnografía das práticas comerciais entre camelôs e sacoleiros na cidade de Porto Alegre e na fronteira Brasil/Paraguai. M.A. thesis, Graduate Program in Social Anthropology, Federal University of Rio Grande do Sul.

◇Mendonça, Luciana 2000 Parques Nacionais do Iguaçu e Iguazú: fronteira ambiental e integração entre Brasil e Argentina. A. Frigerio and G. Ribeiro (eds.), *Argentinos e Brasileiros. Encontros, Imagens e Estereótipos*, pp.209-23, Petrópolis: Vozes.

◇Pérez Ortiz, César 2004 A Tríplice Fronteira Brasil/Argentina/Paraguai. Uma aproximação às representações jornalísticas sobre um espaço sócio-cultural, M.A. Thesis in Anthropology, University of Brasilia.

◇Rabossi, Fernando 2004 Nas ruas de Ciudad del Este: vidas e vendas num mercado de fronteira. Doctoral Dissertation in Anthropology, National Museum: Rio de Janeiro.

◇Riazanov, David [1926] 2004 *Los Orígenes de la Primera Internacional.* Buenos Aires: Ediciones Rumbos.

◇Ribeiro, Gustavo Lins 2003 *Postimperialismo.* Barcelona: Gedisa.

◇Ribeiro, Gustavo Lins 2002 Power, Networks and Ideology in the Field of Development. S. Fukuda-Parr, C. Lopes and K. Malik (eds.), *Capacity for Development. New Solutions to Old Problems,* pp.169-184, London: Earthscan.

◇Ribeiro, Gustavo Lins 2000 *Cultura e Política no Mundo Contemporâneo.* Brasília: Editora da Universidade de Brasília.

◇Ribeiro, Gustavo Lins 1998 Cybercultural Politics: Political Activism at a Distance in a Transnational World. S. Alvarez, E. Dagnino and A. Escobar (eds.), *Cultures of Politics/Politics of Culture: Revisioning Latin American Social Movements*, pp. 325-352, Boulder: Westview Press.

◇Ribeiro, Gustavo Lins 1994 *Transnational Capitalism. Hydropolitics in Argentina.* Gainesville: University Press of Florida.

◇ Ribeiro, Gustavo Lins 1992 Ambientalismo e Desenvolvimento Sustentado. Nova Ideologia/Utopia do Desenvolvimento. *Revista de Antropologia* 34: 59-101.

◇ Rist, Gilbert 1997 *The History of Development. From Western Origins to Global Faith.* London: Zed Books.

◇ Rosenau, James N. 1992 Citizenship in a Changing Global Order. J. Rosenau and E. Czempiel (eds.), *Governance without Government: Order and Change in World Politics,* pp. 272-294, Cambridge: Cambridge University Press.

◇ Rosenfield, Denis Lerrer 2005 Convescote. *Folha de São Paulo,* January 22, 2005, p. A3.

◇ Sahlins, Marshall 1997 O 'Pessimismo Sentimental' e a Experiência Etnográfica: Porque a cultura não é um 'objeto' em via de extinção. *Mana* 3(2): 103-150.

◇ Seoane, José and Emilio Taddei 2001 De Seattle a Porto Alegre. Pasado, Presente y Futuro del Movimiento Antimundialización neoliberal. J. Seoane and E. Taddei (eds.), *Resistencias Mundiales. De Seattle a Porto Alegre,* pp.105-129, Buenos Aires: CLACSO.

◇ Souza, Angelo José Sátyro de 2000 Feira do Paraguai: Território e Poder. História e Memória. Mimeo. Department of Anthropology, University of Brasília.

◇ Stoller, Paul 2002 *Money Has No Smell: The Africanization of New York City.* Chicago: University of Chicago Press.

◇ Turner, Victor 1969 *The Ritual Process: Structure and Anti-structure.* Chicago: Aldine Publishing Co.

◇ Vieira, Lizt 2001 *Os Argonautas da cidadania. A sociedade civil na globalização.* Rio de Janeiro and São Paulo: Editora Record.

◇ Whitney, Craig R. 1997 Hobnobbing at Very High Levels. Political and Corporate Elite Pay Handsomely at Davos. *The New York Times,* January 28, 1997, D1/D21

◇ World Social Forum 2001 Fórum Social Mundial. Um outro mundo é possível/World Social Forum. A different world is possible. *Programa Oficial/Official Program.*

◇ World Social Forum 2003 *Programa Oficial/Official Program.*

◇ Yuen, Eddie 2001 Introduction. E. Yuen, G. Katsiaficas, and D. Rose (eds.), *The Battle of Seattle: The New Challenge to Capitalist Globalization,* pp. 3-20, New York: Soft Skull Press.

[付録1] 世界社会フォーラム (World Social Forum) 2005、ポルト・アレグレ、ブラジル

ブラジル組織委員会 (Brazilian Organizing Committee)

ABONG (Associação Brasileira de Organizações Não Governamentais) – www.abong.org.br,

AMB (Confederação Nacional das Associações de Moradores),

Attac (Ação pela Tributação das Transações Financeiras em Apoio aos Cidadãos) – www.attac.org,

Cáritas Brasil, www.caritasbrasileira.org,

CAT (Central Autônoma de Trabalhadores) – www.cat-ipros.org.br/,

CBJP (Comissão Brasileira de Justiça e Paz da CNBB) – www.cbjp.org.br,

Cives (Associação Brasileira de Empresários pela Cidadania) – www.cives.com.br,

Clacso (Consejo Latinamericano de Ciencias Sociales) – www.clacso.org,

CMP (Central de Movimentos Populares) – www.cmp-brasil.org,

Comitê Organizador do Acampamento Intercontinental da Juventude – www.acampamentofsm.org,

Comitê Afro do FSM – kikabessen@hotmail.com,

Conam,

CUT (Central Única dos Trabalhadores) – www.cut.org.br,

FBOMs (Fórum Brasileiro de ONGs e Movimentos Sociais para o Meio Ambiente e o Desenvolvimento) – www.fboms.org.br/,

GTA (Grupo de Trabalho Amazônico) – www.gta.org.br,

Ibase (Instituto Brasileiro de Análises Sociais e Econômicas) – www.ibase.br,

IPF (Instituto Paulo Freire) – www.paulofreire.org,

Jubileu Sul Brasil – www.jubileesouth.org – www.jubileubrasil.org.br,

Marcha Mundial das Mulheres – www.sof.org.br/marchamulheres,

MST (Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra) – www.mst.org.br,

Rede Social de Justiça e Direitos Humanos – www.social.org.br,

UJS (União da Juventude Socialista) – www.ujs.org.br,

UNE (União Nacional dos Estudantes) – www.une.org.br,

国際会議の構成

世界社会フォーラム国際事務局

ブラジル運営委員会

Indian Organizing Committee – www.wsfindia.org

団体代表

50 Years is Enough! – www.50years.org,

ABONG (Associação Brasileira de ONGs) – www.abong.org.br,

ACTU (Australian Council of Trade Unions) – www.actu.asn.au,

AFL-CIO (American Federation of Labor-Congress of Industrial Organizations) – www.aflcio.org/home.htm,

Africa Trade Network – http://africatradenetwork.com,

AIDC (Alternative Information on Development Center – http://aidc.org.za,

ALAI (Agencia Latinoamericana de Informacion) – www.alainet.org,

ALAMPYME (Assoc. Latino Americana de Pequenos e Médios Empresários) – www.apyme.com.ar,

Aliança Por Um Mundo Responsável e Solidário – www.alliance21.org,

All Arab Peasants & Agricultural Co-operatives Union,

ALOP (Assoc. Latino Americana de Organismos de Promoção) – www.alop.or.cr,

Alternative Information Center – www.alter-nativenews.org,

Alternatives Information Center – http://aidc.org.za,

Alternatives – www.alternatives.ca,

Alternatives Rússia,

Amigos da Terra – www.foei.org,

APRODEV – www.aprodev.net,

Arab NGO Network for Development – www.annd.org,

ARENA (Asian Regional Exchange for NewAlter-natives) – www.asianexchange.org,

Articulación Feminista Marco Sur – www.mujeresdelsur.org.uy,

ASC (Aliança Social Continental) – www.ascahsa.org,

Asemblea de los Pueblos del Caribe (APC) – http://movimientos.org/caribe/,

Assemblée Européenne des Citoyens – www.cedetim.org/AEC,

Assembléia das Nações Unidas dos Povos,

Associação para o Progresso das Comunicações – www.apc.org,

ATTAC- Brasil – www.attac.org/brasil,

ATTAC France – http://attac.org,Babels,Bankwatch Network – www.bankwatch.org,

CADTM- Comité pour l'Annulation de la Dette du Tiers Monde – http://users.skynet.be/cadtm,

Canadian Council, Caritas Internacionalis – www.caritas.org,

CBJP (Comissão Brasileira de Justiça e Paz) – www.cbjp.org.br,

CEAAL (Cons. Educação de Adultos da Am. Latina) – www.ceaal.org,

CEDAR Internacional – www.cedarinternational.net,

CEDETIM (Centre d'Études et d'Initiatives de Solidarité Internationale) – www.cedetim.org,

Central de Trabajadores Argentinos – www.cta.org.ar,

CES (European Trade Union Confederation) – www.etuc.org,

CETRI – www.cetri.be, CIDSE – www.cidse.org,

CIOSL (Confederação Internacional de Organizações Sindicais Livres) – www.cioslorit.org,

CIVES – www.cives.org.br, CLACSO – www.clacso.org,

CLC (Canadian Labour Congress) – www.clc-ctc.ca

CMT (Confederação Mundial do Trabalho) – www.cmt-wcl.org,

COMPA (Convergência de los Movimientos de los Pueblos de las Américas),

CONAIE – http://conaie.org,

Congresso Nacional Indígena do México,

Conselho Mundial de Igrejas – www.wcc-coe.org,

Coordenación del Foro "El Otro Davos",

Coordenadora de Centrais Sindicais do Cone Sul,Corpwatch – www.corpwatch.org,

COSATU (Congress of South African Trade Unions) – www.cosatu.org.za,

CRID (Centre de Recherche et d'Information pour le Développement) – www.crid.asso.fr,

CUT (Central Única dos Trabalhadores) – www.cut.org.br,

Encuentros Hemisféricos contra el ALCA, ENDA – www.enda.sn,

Euralat, Euromarches – www.euromarches.org, FAMES,

FECOC (Frente Continental de Organizações Comunitárias),

Federación Mundial de Juventudes Democráticas – www.wfdy.org,

Fédération démocratique internationale des femmes (FDIF) – www.fdif.eu.org,

Fundación per la Pau/International Peace Bureau (IPB) – www.ipb.org,

FIAN (Food First International Action Network) – www.fian.org,

FIDH (Fed. Internacional Direitos Humanos) – www.fidh.org,

Focus on the Global South – http://focusweb.org,

Fórum Dakar,

Forum Mondial desAlter-natives – www.alternatives-action.org/fma,

Forum of the Poor,

Fórum Social Italiano,

GLBT South-South Dialogue,

Global Exchange – www.globalexchange.org,

Global Policy Network – www.globalpolicynetwork.org,

Greenpeace – www.greenpeace.org.br,

Grito dos Excluídos – www.movimientos.org,

Grupo de Trabalho Amazônico – www. gta.org.br,

Habitat Internation Coalition – www.habitat-international-coalition.org,

IATP (Institute for Agriculture and Trade Policy) – www.iatp.org,

IBASE – www.ibase.br,

ICAE (Conselho Internacional de Educação de Adultos) – www.web.net/icae,

IFAT (International Federationof Alternative Trade) – www.ifat.org,

IFG (International Forum on Globalization) – www.ifg.org,

International Gender and Trade Network – www.genderandtrade.net,

International Network of Street Papers (INSP) – www.irn.org,

Instituto Paulo Freire – www.paulofreire.org,

IPS (Inter Press Service) – www.ips.org,

Jubilee South – Asia – www.jubileesouth.org,

Jubileo South – África – www.jubileesouth.org,Jubileu 2000,

Jubileu Sul América Latina – www.jubileusul.hpg.com.br,

KCTU (Korean Confederation of Trade Unions) – www.kctu.org,

KOPA – http://antiwto.jinbo.net/eroom/index.html,

Land Research Action Network,

MST (Movimento dos Trabalhadores Sem Terra) – www.mst.org.br,

Narmada – www.narmada.org,

NIGD (Network Institute for Global Democratization) – www.nigd.org,

North-South Centre – www.coe.int/T/E/North-South_Centre,

OCLAE (Continental Organization of Latin America and Caribbean Students) – www.oclae.org,

Oneworld – www.unimondo.org,

Organization of African Trade Unions Unity,

ORIT (Org. Regional Interamericana de Trabalhadores) – www.orit-ciosl.org,

OXFAM Internacional – www.oxfam.org26,

Peace Boat – www.peaceboat.org,

Plataforma Interamericana de Derechos Humanos, Democracia y Desarrollo – www.pidhdd.org

Projeto K, Public Citizen – www.citizen.org,

Red Latinoamericana Mulheres Transformando a Economia – http://movimientos.org/remte,

Rede APM – Agricultures paysannes, sociétés et mondialisation – www.zooide.com/apm,

Rede CONSEU (Conferencia de Naciones sin Estado de Europa),

Rede Dawn de Mulheres – www.dawn.org.fj,

Rede de Solidariedade Ásia Pacífico,

Rede Latino-Americana e Caribenha de Mulheres Negras – www.criola.ong.org,

Rede Mulher e Habitat – http://www.redmujer.org.ar,

Rede Mundial de Mulheres pelos Direitos Reprodutivos – www.wgnrr.org,

Rede Palestina de ONGs – www.pngo.net,

Rede Social de Justiça e Direitos Humanos – www.social.org.br, Rede Transforme!

Redes Socioeconomia Solidaria – www.reasnet.com,

REPEM (Rede de Educação Popular entre Mulheres) – www.repem.org.uy,

SIGTUR (Southern Initiative on Globalisation and Trade Union Rights),

Social Watch – www.socialwatch.org,

Solidar – www.solidar.org,

TNI (Transnational Institute) – www.tni.org,

TWN (Third World Network) – www.twnside.org.sg,

UBUNTU (Foro Mundial de Redes de la Sociedad Civil) – www. www.ubuntu.upc.es,

Union Internacional de Estudiantes – www. www. ius-uie.org,

Via Campesina – http://ns.rds.org.hn/via/,

World Association of Community Radio Broadcasters (Amarc) – http://www.amarc.org,

World March of Women – www.ffq.qc.ca/marche2000/en/index.html,

Znet – www.zmag.org.

オブザーバー

Organizing Committee of the African Social Forum,

Organizing Committee of the Americas Social Forum – www.forosocialamericas.org,

Organizing Committee of the European Social Forum – www.fse-esf.org,

Organizing Committee of the Mediterranean Social Forum – fsmedi@terra.es,

Organizing Committee of the of the Pan-Amazonic Social Forum – www.fspanamazonico.com.br,

Organizing Committee of the Thematic Social Forum: Democracy, Human Rights, War and Drug Traffic – www.fsmt.org.co,

FNTG (Funders Network on Trade & Globalization) – www.fntg.org,

OBS: The list has the names of 19 organisations that have joined the International Council of the WSF, which have been appro vedat the plenary on April 6, 2004, in Passignano Sul Trasimeno and Isola Polvese (Peruggia), Italy.27.

[付録2] 世界社会フォーラム2004、ムンバイ、インド

インド統合会議 (IGO) のメンバー

インド統合会議はWSFインドに際しての意思決定機関であり、そのメンバーとなる可

能性はWSFの原理憲章に同意する全ての社会運動や組織に開かれている。

IGOのメンバーリスト（135団体）

ABHIYAN, Aalochana (Centre For Documentation And Research on Women),
Adi Tamizar Viduthalai Iyakkam, Adivasi Mukti Morcha, Adivasi Mukti Sangathan,
Adivasi Solidarity Council, AINFSU, Akshara, All India Agricultural Workers Union,
All India Bank Employees Association, All India Beedi Workers Organisation,
All India Catholic University Federation, All India Central Council of Trade Unions,
All India Democratic Women's Association, All India Federation of Electricity Workers,
All India Federation of Trade Unions,
All India Federation of University and College Teachers Organisation,
All India General Insurance Employees Association, All India Insurance Employees Association,
All India Kisan Sabha (AIKS), All India Kisan Sabha (AIKS) / BKMU,
All India Kisan Sangharsh Samiti, All Indian Bank Officers' Association,
All India Newspaper Employees Federation, All India Peace & Solidarity Organisation,
All India People Science Network, All India Progressive Women's Association,
All India Railwaymens Federation, All India State Government Employees Federation,
All India Student Association, All India Students Federation,
All India Trade Union Congress, All India Youth Federation,
Amnesty International (India), Anusuchit Jati Parishad, ASHIRVAD,
Association of Rural Education and Development Service, Awaze Niswan,
Bank Employees Federation of India,
BDM, Bharat Gyan Vigyan Samiti, Bhartiya Kisan Mazdoor Union,
Bio DSF, BJVJ, BSNL Employees Union,
Calcutta Leather Tannery Workmen's Union, Calcutta Leather Tannery Workmen's Union,
CALL, Campaign Against Child Labour,
Campaign For Right To Livelihood And Food Security (Tamil Nadu),
Centre for Education and Communication, Centre For Education and Documentation,
Centre for Humanitarian Assistance, Centre for Research on New International Economic Order,
Centre for Technology Development,

Centre for Workers' Management, Centre of Indian Trade Unions,

Chhatishgarh Jaiv Suraksha Manch, CHPD, Church Auxiliary for Social Action, CNISBSS,

Coalition for Nuclear Disarmament and Peace, Committee Against Violence on Women,

Community Contextual Communication Centre,

Confederation of Central Government Employees & Workers,

CORE (Guwahati Office), COVA,

Dalit Aikya Vedi, Dalit Social Forum,

Dalit Solidarity Peoples, Democratic Youth and Students Organisation,

Democratic Youth Federation of India, Division of Social Action,

Don Bosco South Asia Forum for Youth at Risk, Durbar Mahila Samanwaya Committee,

Ekta Trust,

Electricity Employees Federation Of India, Equitable Marketing Association,

Evangelical Fellowship of India Commission On Relief,

Federation of Medical Representatives Associations of India,

Focus on Global South, Forum Against Globalisation,

Forum against oppression of women, Forum For Creches And Childcare Services,

Free Software Foundation of India, FWFPF,

Gandhi Peace Foundation, General Insurance Employees Union, Gramodaya,

Happy Hawkers,

Hind Kisan Mazdoor Sabha, Hind Mazdoor aur Kisan Panchayat,

Hind Mazdoor Sabha, Human Potential Development Programme,

Human Rights Forum for Dalit Liberation,

Income Tax Employees Federation,

India Climate Justice forum, Indian Confederation of Labour,

Indian Network on Ethics and Climate Change, Indian Social Action Forum,

Indian Social Institute, Institute for Social Education and Development,

Integrated Rural Development of Weaker Sections in India,

Jagori, Jal Jamgal Jamin, Jamin Adhikar Andolan, Janawadi Lekhak Sangh,

Jan Mukti Sangharsh Bahini, JANPATH, Jan Sangharsh Morcha,

Jan Suraksha Manch, Jan Swasthya Abhiyan, Jati Toro Panchayat,

JESA, Jharkhand State Bank Employees Association,Joint Womens Programme,
J P Foundation for Asian Democracies, Justice, Peace and Development Commission,
Kisan Adivasi Sangthna, Kisan Samanvaya Samiti,
Laya, Lokayan, Loko Unnayan Sangh,
Maharashtra State Zilla Parishad Employees Confederation,
Mahila Dakshata Samiti, Majlis, Media Collective, Mines, Minerals and People, MKSS,
NACDOR, NAFRE, Naga Peoples Association for Human Rights,
National Alliance for Womens Organisations, National Alliance of Peoples Movements,
National Campaign Committee for Rural Workers,
National Campaign for Human Rights, National Centre for Advocacy Studies,
National Centre for Labour, National Confederation of Labour,
National Council of Dalit Human Rights, National Dalit Forum,
National Federation of Dalit Women, National Federation of Indian Women,
National Federation of Postal Employees, National Forum for Unorganised Labour,
National Forum of Forest Workers & Forest People, National Front of Adivasis,
National Minerals & Mines Group, National Network of Autonomous Womens' Organisations,
National Union of Journalists, National Youth Federation,
Nature Human Centric Peoples Movement, NCPRI, New Trade Union Initiative,
Nivara Hakk Suraksha Samiti, North East Network,
Orissa Adivasi Adhikar Abhijan, Orissa Development Action Forum,
People's Union for Civil Libraries, Popular Education & Action Centre,
Pragatisheel Lekhak Sangh, Public Sector Employees Federation,
PWA, Rajasthan Kisan Sanghatan, Rashtra Seva Dal,
Rashtra Yuva Organisation, Rashtriya Jal Biradri,
Rashtriya Jan Chetna Sangharsh Morcha,
Research Foundation for Science, Technology & Ecology,
RFTSE, RTFC, Rural Workers Trust,
SAHR, Sakhi, Samajik Naya Morcha,
Samaj Provadhan Pratisthan, Samata Sainik Dal, Samta, Sangat, SMILE,
South Central India Network for Development Alternative,

South Orissa DevelopmentAlter-natives Network, Stree Mukti Sanghatana,
Stree Vedi, Student Federation of India, Swayam,
TAFSC, Tamil Nadu Womens Collective, Terre des Hommes (Germany) IP,
The Information And Feature Trust, Trust for Rural Education and Development,
Uttarakhand Chaupal,
VANI, Van Sramjivi Manch,Vasudhaiva Kutumbakam,
Vikalp All India Cultural forum, Vikas Adhyayan Kendra,
Voluntary Action Network Anantapur,
WECAN,
YMCA, Young Womens' Christian Association, Yuva Bharat.

インド作業委員会（JWC: India Working Organisations）

インド作業委員会はWSFインドを組織・運営する上で土台となる方針のガイドラインを形作る責任を負う。IGOから選ばれた67の組織によって構成され、政治的および経済的問題全般を直接扱う。IWCは国内の14の商業組合と労働者団体、国内の8つの女性団体、6つの農業経営者のネットワーク、ダリットとアディバシの国内4つの団体、4つの学生と青年団体、そして27の社会運動や他の組織、NGOから構成されている。

Dalit（ダリット）:
NACDOR, National Council of Dalit Human Rights (NCDHR),
National Dalit Forum, National Federation of Dalit Women (NFDW).

Adivasis（アディバシ）:
ABHIYAN, Adivasi Solidarity Council, Adivasis Mukti Sangathan, National Front of Adivasis.

Women:
All India Democratic Women's Association (AIDWA),
All India Progressive Women's Association (AIPWA), Mahila Dakshata Samiti,
National Federation of Indian Women (NFIW),

National Network of Autonomous Women's Organisations,

National Alliance for Womens Organisations (NAWO), North East Network, Sangat.

Kisan & Rural Workers:

All India Agricultural Workers Union (AIAWU), All India Kisan Sabha (AIKS),

All India Kisan Sangharsh Samiti, Hind Kisan Mazdoor Sabha (HKMS),

Kisan Samanvaya Samiti,

National Campaign Committee for Rural Workers (NCCRW),

Working People:

All India Bank Employees Association (AIBEA),

All India Central Council of Trade Unions (AICCTU)

All India Federation of Trade Unions (AIFTU),

All India Insurance Employees Association (AIIEA),

All India Railwaymens Federation (AIRF),

All India State Government Employees Federation (AISGEF),

All India Trade Union Congress (AITUC),

Centre of Indian Trade Unions (CITU),

Confederation of Central Government Employees &Workers (CCGEW),

Hind Mazdoor Sabha (HMS),

National Campaign Committee for Unorganised Labour,

National Centre for labour, National Forum of Forest Workers & Forest People,

New Trade Union Initiative (NTUI).

Youth & Students:

All India Students Federation (AISF), All India Youth Federation (AIYF),

NCCI (Y), Rashtra Yuva Organisation, Student Federation of India (SFI), Democratic Youth Federation of India (DYFI).

Other Social Movements & Mass Organisations:

All India Peace & Solidarity Organisation (AIPSO),
All India People Science Network (AIPSN), Amnesty International,
Bharat Gyan Vigyan Samiti (BGVS), Campaign Against Child Labour (CACL),
Centre for Education and Communication (CEC),
Centre for Technology Development (CTD),
Coalition for Nuclear Disarmament and Peace (CNDP),
COVA, Focus on Global South (FOCUS),
Gandhi Peace Foundation (GPF), Human Potential Development Programme,
India Social Institute, INSAF, Jan Sangharsh Morcha (JSM),
Jan Swasthya Abhiyan (JSA), Mines, Minerals and People, MKSS, NAFRE,
Naga People's Association for Human Rights, National Alliance of people's Movements (NAPM),
National Centre for Advocacy Studies (NCAS), Rashtra Sewa Dal,
SAHR, Vasudhaiva Kutumbakam, WECAN, YUVA.

インド組織委員会（IOC: India Organising Committee）

インド組織委員会は、WSF2004の実行を担う組織である。イベント運営の責任を負っており、それぞれが八つの実行部隊のうちの一つに属している45人の個人から構成されている。

A. D. Golandaz, Amit Sen Gupta, Anil Mishra, Arun Kumar, Ashok Bharti,
Bulu Sareen, Chandita Mukherjee, Damayanti Bhattacharya, Dilawar Khan,
Dinesh Abrol, Gautam Mody, Geeta Mahajan, H. Mahadevan, Ilina Sen, J.Vincent,
Jaya Velankar, K.Bhaskaran, Kamal Mitra Chenoy, Madhusree Dutta, Meena Menon,
Minar Pimple, Mohan Kotekar, Mukta Srivastava, Mukul Sharma, Nandita Shah,
P.K. Das, P.K. Murthy, Prabir Purkayastha, R.A. Mittal, R.S.R. Selwine, Rabial Mallik,
Rajendra Giri, Rajendra Ravi, Rosamma, Sanjeev Kaura, Sheelu, Somya Dutta,
Soni Thengamom, Srilata Swaminathan, Stanley William, Subhash Lomte, Uday Bhat,
Vasant Gupte, Vijay Pratap, Vinaya Deshpande, Vinod Raina, Vivek Monteiro,
W.R. Varada Rajan.

ムンバイ組織委員会 Mumbai Organising Committee

ムンバイ組織委員会は、ムンバイに基盤を置く、それぞれの職能集団を代表する組織から構成されている。

[付録3] 会議と 'WSF Process' のスポンサー及び援助者

2001

Electric Energy State Company of Rio Grande do Sul,
Bank of the State of Rio Grande do Sul, The city of Porto Alegre,
The Pontifical Catholic University, Federal University of Rio Grande do Sul,
Government of the State of Rio Grande do Sul.
NGOs.

2003

Sponsors:

Petrobras, Ford Foundation, Fundação Banco do Brasil.

Supporters:

Action Aid, CAFOD, CCFD, Eed, Heinrich Boll Stiftung, Icco, Misereor,
n (o) vic Oxfam Netherlands, Oxfam International, Oxfam Belgium, Oxfam America.

2004

「WSF process」への援助者

Petrobras, Caixa Econômica Federal, the Ford Foundation and Brazil Postoffice.

WSFインド2004への援助者

Action Aid, United Kingdom. Alternatives, Canada,
Attac Norge Solidarites, Norway,

Comité Catholique Contre la Faim et pour le développement (CCFD), France,

Christian Aid, United Kingdom, Development and Peace, Canada.

Evangelischer Entwicklungsdienst (EED), Germany,

Funders Network on Trade and Globalisation (FNTG), United States,

Heinrich Boll Foundation, Germany,

Humanist Institute for Co-operation with Developing Countries (HIVOS), Netherlands,

Inter Church Organisation for Development Co-operation (CCO), Netherlands.

Oxfam International.

Swedish International Development Co-operation Agency (SIDA), Sweden,

Solidago Foundation, United States,

Swiss Agency for Development Cooperation (SDC), Switzerland,

Tides Foundation, United States,

World Council of Churches, Switzerland,

Members of India General Council for their solidarity contribution, India.

2005

Banco do Brasil S.A., Petrobras, Caixa Econômica Federal (Brazil),

Eletrobrás (Brazil), Infraero (Brazil), Furnas (Brazil),

eed: Evangelischer Entwicklungsdienst (Church Development Services, an organization of the Protestant churches in Germany),

Christian Aid (an agency of the churches in the UK and Ireland),

CCFD (Comité Catholique contre la Faim et pour le Développement, France),

n (o) vib (Oxfam, Holland),

CAFOD (Catholic Agencies for Overseas Development, a British organization),

Rockfeller Brothers Fund (U.S.),

Misereor (the German Catholic Bishops' Organization for Cooperation and Development).

グローバル化を問い直す◆
ドミニカ共和国におけるジェンダーと輸出加工労働

ヘレン・サファ
(田沼幸子訳)

1. グローバル化、輸出型製造業の発展、労働力の女性化

ドミニカ共和国は、ハイチとともにイスパニョーラ島にある小国である。拙著『男性大黒柱の神話』[Safa 1995] では、キューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国における女性工業労働者の比較を行なった。この本を書き終えたとき、残された疑問は、女性が自由貿易区 (free trade zone) で働く事と、女性を家長とする家族の形成との間に関連はあるかというものであった。私の本のデータからそう結論を出すのは難しかった。ドミニカでの補足調査によって、この疑問に対する解答が得られるのではと考えた。そのため、二度目の調査では、べつの調査地を選んだ。最初の調査地は、首都サントドミンゴ東方のラ・ロマーナであった。かつては重要な製糖業地域だったが、いまは観光業に変わっている。また、自由貿易区もあり、さまざまな就労機会がある。私は、製糖業だけに依存した産業構造から、多様化という変化を経た場所がどのような経験をするのかを解明したかった。二番目の調査地、ビジャ・グラシアは、首都サントドミンゴの北方30キロメートルにある町である。1980年までは、国営の大きな製糖工場があったが、突然閉鎖され、2年後に、その地域一帯が自由貿易区になった。あたらしくできた工場のひとつは韓国資本の工場で、女性の雇用者が2,500人と、男性より多い。男性から女性へと、労働者構成が、まるで一夜にして入れ替わった。しかも、他の選択肢はありえなかった。

私は、この現象を、もっと大きな文脈のなかで捉えたい。それは、輸出型加工製造工業の発展は、どのような結果を生み出すのか、ということである。日本では、ベルトコンベ

◆ ――― 本論文は2003年9月22日にトランスナショナリティ研究セミナー（於大阪大学大学院人間科学研究科）で発表されたものが元となっている。

ア式の仕事は、よく知られているだろう。輸出型の加工製造業は、グローバル化の主要な構成要素である。なぜか。グローバル化の自由貿易体制のなかでは、競争力がなければならない。競争上有利な要因が必要だが、国によっては、安価な労働力しか売るものがない。ドミニカは、そうした国のひとつである。女性の労働のほうが安いので、雇用される可能性が高い。つまり、輸出型加工製造業では、男性より女性の方が有利なのである。

しかし、こうした状況の変化の結果、女性が本当に利益を得たのかという疑問が残る。私が最初の調査をした1970年代と、グローバル化の時代である現在とは、なにが違うのか。

こうした問題に関して、経済学者ガイ・スタンディングは「労働のグローバルな女性化」(global feminization of labor) という、今や古典となった概念を提唱した [Standing 1989]。それによると、女性に割り当てられる労働は、フレキシブル、カジュアル、かつインフォーマルな形態が多く、これによって、フルタイムの常勤職が、女性だけでなく男性にとっても減少する。さらにこれは、実質的な給与の低下と高い失業率にもつながる。女性の雇用は増えたとしても、男性の雇用が悪化する。経済すべてが輸出業に向かうと、国内の経済が悪化し、国内市場も発展しなくなる。

グローバル化は、私たちが見るところ、とても選択的なものである。先進国から選択的に資本が流れる。東アジアでも主に中国や、中南米の、よく規律化され、生産性が高いにもかかわらず、安い労働力がある地域が選択される。2003年9月、メキシコのカンクンで開催された世界貿易機関 (WTO) 閣僚会議で問題になったように、この政策の矛盾は、欧米の先進国は、国内農業に対しては、自由貿易の原則に従うのではなく、助成金を出してまで保護してきたということである。たとえば、フロリダの南部ではキューバ革命の後に製糖業が始まった。環境を破壊し、しかも高くつくのにドミニカから砂糖を買わず、自給するようになった。

グローバル化の再構造化に伴う国内支出の見直し、貨幣価値の引き下げなどによって、第三世界の貧困化が進行した。これらの諸国がこれまで向上させてきた、平均寿命、GDP、識字率などは、いまや後退さえしている。

ここでは、グローバル化によって影響を受けた女性の仕事と男性の仕事を見ていく。両方を見る事はとても大事だ。これは、家族構成の検討につながる問題であり、私の前著から生まれた問題意識である。その本の中で、「男性大黒柱モデル」(male breadwinner model) を検討した。これは、男性が家族の主要な稼ぎ手であり、女性が基本的には主婦であり、補助的な仕事をする、というモデルである。日本の状況がどうなのか、興味があるが、ア

メリカではもう現実には当てはまらない。以前は、独身女性だけが雇用されていたが、いまは、結婚した女性も仕事を続ける。子供が生まれても辞めることはない。つまり、家族のなかに稼ぎ手が二人いることになる。男性が大黒柱というモデルは、すでに神話であるといってよい。しかし、多くの社会政策が、いまだにこのモデルに基づいてつくられているのは問題である。

また私は、女性が男性の代わりに大黒柱になると、多くの場合劇的な変化が生じることを論じた。これは、ドミニカのビジャ・グラシアで起きたことである。プエルトリコでは、事情はもっと単純だ。女性が主要な稼ぎ手になれば、男性が補助的な立場になる。収入がなくなれば、彼の権威がなくなり、結婚の危機が訪れ、妻が夫を離婚することも増えている。以前は、男性が家族を捨てる事が多かったが、逆のケースが増えている。ドミニカでは、女性が家長である家族の割合は、1981年の21.7％から1996年には26.8％になった。キューバの36％には及ばないが、着実に増加している。

ここで私が問題にしているのは、女性が家長になるという事が、どれだけ男性の権威の価値を下げ、家族の構成を変えていくかということである。ただし、指摘しておかなければならないのは、カリブと東アジアとの相違である。東アジアにおける家父長制は、歴史的な伝統があり、宗教にもかかわっており、かなり強く社会に埋め込まれている。しかし、カリブではそうではない。女性を家長とする家族が、奴隷制時代、植民地時代、脱植民地時代を通じて、歴史的に長期間にわたって存続してきた。アメリカ合衆国では、夫と妻という婚姻の単位が家族の中心であり、彼らが別れてしまうと、家族は崩壊するか消滅すると考えられている。夫婦関係には、家族内の関係のなかで、あたかもそれだけが唯一の結びつきであるかのような重要性が付与されている。しかし、カリブでは、伝統的に、家族において中心となるつながりは、女性とその子供たちとの関係である。日本の状況はどうなのか、父子関係が重要なのか、興味のあるところである。

これらの女性を家長とする家族を、逸脱した病的なものとみなす研究もある。しかし、実際には、家族の中心である女性が一人きりでないなら、結構うまくやっていけるのである。なぜなら、女性一人がやっていくのではなく、親族である他の女性のグループが助け合い、いっしょになって家族を形成しているからでる。この女性間の血縁関係がなくなってしまうと、かなり大変だろう。皮肉なことに、政策の多くは、こうしたつながりを壊す方向に働いている。

2. 輸出型製造業の発展と夫婦・家族関係の変容——1997年のドミニカ再調査から

2-1. 自由貿易区のおける女性労働者の増加

さて、ビジャ・グラシアに話を戻そう。私たちは、1997年に、自由貿易区で働く157人の女性を対象に調査を実施した。それに加えて、男性55人にもインタビューをしたことは、このときの調査のポイントである。最初の調査では、女性の情報ばかり集めたので、二度目は男性からも聞いた。とくに、かつて製糖業で働いていた、現在失業中の年配の男性から話を聞いた。彼らがこの変化をどう感じているかに注目したかったのである。

［表1］ ビジャ・グラシアにおける元製糖工場労働者世帯、1997年（調査世帯数55）。

世帯構成	
世帯平均人数	5.3
労働者数	2.0
自由貿易区で働く人の数	0.6
被扶養者数	1.9
扶養者数	3.3
世帯平均収入（RD$）	3,162.6
平均世帯収入（RD$、%）	
1,600以下	33.3
1,600 − 3,000	31.5
3,001 − 5,000	18.5
5,001以上	16.7
世帯類型（%）	
核家族	63.6
拡大家族	34.5
情報なし	1.8
副世帯主はいるか（%）	
いる	9.1
いない	87.3
情報なし	3.6
片親（%）	
はい	10.9
いいえ	89.1

出典：［Safa 1999: 19］の一部を改変。

調査結果のいくつかを紹介したい。男性が家長の家族のうち、ほぼ64%が核家族である［表1］。それに対して、核家族は約69%あるものの、そのうち、女性を家長にした家族は56%しかない［表2］。

しかし、このデータだけでは分からないことがある。私たちは、彼らに「だれが家長ですか」と聞いた。すると、90%が、現在、収入がなくても、男性が家長だと答えた。その理由は、一般的には、彼らが家を所有していたからだと考えられる。かつての製糖業の遺産は、このように不動産を含むいろいろなものを男性に与えたということだ。そのため、家族の中での男性の役割が存続している。しかし、男性たちは、あたらしい変化を非常に憤

［表2］ ビジャ・グラシアの自由貿易区の女性労働者世帯、1997年。

	男性世帯主	女性世帯主	計
世帯構成			
世帯平均人数	4.71	4.24	4.56
労働者数	2.49	1.76	2.25
自由貿易区で働く人の数	1.41	1.42	1.41
被扶養者数	1.36	1.34	1.36
扶養者数	3.34	2.90	3.20
世帯平均収入（RD$）	4,624.53	3,778.00	4,353.21
平均世帯収入（RD$、%）			
1,600 − 3,000	25.50	62.00	37.20
3,001 − 5,000	53.70	24.00	44.20
5,001以上	20.80	14.00	18.60
世帯類型（%）			
核家族	74.80	56.00	68.80
拡大家族	16.85	34.00	22.30
混合家族	5.60	--	3.80
複合家族	0.90	2.00	1.30
単身	--	6.00	1.90
情報なし	1.90	2.00	1.90
副世帯主はいるか（%）			
いる	0.9	12.0	4.5
いない	95.3	84.0	91.7
情報なし	3.7	4.0	3.8
片親（%）			
はい	3.7	100.0	34.4
いいえ	96.3	0.0	65.6
事例数	107	50	157
事例（%）	68	32	100

出典：［Safa 1999: 20］の一部を改変。

慨していた。彼らは、「若い女性たちは、かわいい服や化粧品を買って、週末にパーティーに行くために働いているだけだ」と不満を述べた。女性に話を聞くと、自分たちが家計を預かっているといい、浮かぶ像は全く違う。けれども、男性は上記のように描写する。彼らの不満の原因のひとつは、50歳以上になると、雇用の機会がほとんどないことだ。あ

る男性の例を挙げよう。彼は72歳、3人の異なる女性とのあいだに7人の子供がいる。ちなみに、このように複数の女性とのあいだに子供をもうける男性は多数いる。この男性の場合は、まだ幼い子供が二人いるので、なおさら大変である。彼は、女性たちにはきれいな服を着せ、毎日清潔でいるようにしなければならないが、家計にはなんの貢献もしていないと述べる。彼は、「あの子たちは、男たちと遊んで、美容院に行って…」と、非難する。しかし、これはあきらかにステレオタイプであり、現実とは異なっている。こうした言説には、男性たちの権威がなくなり、ジェンダー・ヒエラルキーが壊れてしまったことに対する憤りの念が表されているのである。

興味深い事例として、製糖業で働いたあと、教育を受けて地元の教師になった男性がいる。家賃が高く、現金が必要なため、妻も働かないといけない。働き始めた女性は、別の文化を身につけ、夫に対するしかるべき話し方とは違った話し方をするようになったという。彼は、子供に悪い影響を与えるから、それを正そうとしているのだがちっともよくならない、と述べた。不満はあるが、彼女に仕事をやめろとは言えないのだ。夫婦のあいだに緊張があるのは明らかだった。

若い男性は、あたらしい状況に、もっとうまく適応している。首都に移住したり、毎日通ったりしている。首都との距離はわずか30キロメートルなので、通勤は可能である。地元で職を得た若者もいる。また、この地域は、アメリカへの移民が非常に多い。海外からの送金は、観光に次ぐ重要な収入源になっている。たいへん興味深いことに、男性は家族を置いて出稼ぎに行くのだが、彼らは、自分がいない間に妻に自由貿易区で働かないでほしいという。他の男性と関わったり、堕落したりするのではないかと心配しているのだ。

夫に合流するため、もうすぐニューヨークに行くと言う女性にインタビューしたことがあった。夫は2週間毎に150ドル送金していた。この金で、すでに地元に家を買い、子供もいた。法的に結婚もしていた。これは珍しいケースである。普通は、法的には結婚しない。彼女の場合は、アメリカの入国ビザを簡単に取得するため、法的に結婚したと考えられる。彼女によると、子供はドミニカに置いていくとのことだった。また、彼女はこう述べた。「私は彼のそばに住みたいわ。いつでも」。これも珍しい発言である。他の女性から、こうした男性に対する依存したつながりのある感情を聞くことはほとんどない。このカップルが、ニューヨークでどうなったのか、追跡調査しなかったのが残念である。

男性が出稼ぎに行ったため、残された女性が事実上の家長になることが多いが、そのことが女性としての独立を意味するわけではない。

さて、現在ビジャ・グラシアの町で最も大きいのは、野球帽をつくっている韓国の工場である。かつて製糖業の工場だったころは、ここは非常に父親温情主義的（パターナリスティック）だった。労働者の住宅に電気の供給をしてくれただけでなく、亡くなったとき、お金がなければ棺桶まで買ってくれた、と言われていた。この町全体が、こうしたパターナリズムに慣れていた。ところが、韓国の工場はまったく温情主義的ではない。行政当局が、韓国の工場の外の信号を新しくしてほしい、と頼んだことがあったが、すでに工場の土地代を払っていることを理由に、断わられた。しかも、高い生産力を維持するために、工場の規律は厳しく、労働者は完全に従順に従わなければならない。労働者の給与は、最近、かなり改善されたが、調査当時は残業手当も含めて、週に50ドルだった。残業は強制的なもので、頼まれたら働かないと、解雇される恐れがあった。労働者たちは、1日10時間働くことに疲れてきっていた。そのため、いい人材でも辞める人が多いことが問題になっていた。

私たちは、この工場で働く女性15名を調査した。いずれも30歳以下で、すでに母親であった。彼女たちは、ドミニカの女性は無責任で性的にだらしないというイメージを完全に否定した。また、ほとんどの人が、子供の父親から経済的援助は受けていなかった。

ある24歳の女性は、この自由貿易区で9年間働いており、3歳の子供がいる。子供の父親は首都に住んでいるので、同じ家には住んでいない。彼女は、自分の親といっしょに住んでいる。彼は、教育費や医療費として自分の子供にある程度のお金を送ってくるが、定期的ではない。これは、よくあるパターンである。

都市近郊に人口が集中し、家賃が非常に高いため、一つの家にたくさんの人が住むようになってきている。とくに若い母親は、自分の両親と住むのが普通である。

彼女に、製糖工場が稼動していたころと今を比べてみてどう思うかと尋ねてみた。「かつては、男性は働いて好きな事をしていた。でも今は、女性が働き、自分の力でおしゃれするから、同じではありえない」という答えだった。別の女性は、「働くことで、より解放された気がする」と述べた。自分のお金なら好きなように使えるが、だれかに養われていたら、好きなようにはできない。明らかに、女性の経済的自立と自立心の間に関連が見られる。

2-2. 女性家長と拡大家族

こうした女性を支える上で重大な役割を担っているのが、拡大家族である。とくに、若いシングルマザーの場合はそうである。両親といっしょに住むのは、まだ女性が若いうちであり、子供が2、3人できて成長すると、いっしょに住まなくなる場合が多い。

ところで、私は40年以上、カリブ海地域で研究しているが、当初から、婚外子を持つことは珍しくはなかった。以前は、若い女性が妊娠すると、新しい世帯を持とうとするのが普通だったが、今はそうではない。これが変化した点である。子供の父親とは同じところに住まず、両親と住む。これは大きな変化である。たとえばプエルトリコでは、男性が世帯を構える力は、女性を養えるというしるしだったのだが、現在はそうではない。

以上の民族誌的調査に加えて、15人の若い女性たち、5人の年配の男性にインタビューし、結果をいろいろと分析した。ここで、1991年の人口と健康に関する国勢調査に基づいて、女性を家長とする家がどのようなものか見てみよう。

女性家長は男性の家長よりも給料が安く、失業率も高いが、女性を家長とする家族と男性を家長とする家族の収入はほとんど同じである。なぜなら、女性の家長の家族は、多くの場合拡大家族であり、稼ぎ手の人数も多いからである。拡大家族では、祖父母やイトコなどがいっしょに住んでいる。たとえば、姉妹がいて子供をみてくれるおかげで、女性は仕事にでかけることができる。こういう、両親と住む若い女性の家族は、拡大家族の下位家族 (sub-family) と呼ばれる。子供を持ち、自分の収入がある女性は、副家長 (sub head) である。

ほとんどの副家長の年齢は若い。85%は30歳以下で、全員、最低でも高卒であり、高学歴でホワイトカラーの仕事をして高収入を得ている。核家族で女性家長一人の場合より、女性副家長の下位家族の方が、高学歴で裕福なのが普通である。これは、ドミニカ共和国全体の傾向である。私の調査によると、女性を家長とする世帯のうち拡大家族は34%を占めるのに対して、男性家長の場合、拡大家族は17%にすぎない [表2]。政府統計によれば——私のビジャ・グラシアでのサンプルはこれとは矛盾するが——、一つの家族あたりの労働者数は、女性を家長とする家族の方が少ない。普通は、家族の成員が多ければ働き手も増えるが、この場合そうではないので、女性家長への依存が高まるといえる。こうしたことが起きるのは、貧困層だけではない。離婚して実家へ戻ってきた女性などのような、ミドルクラスの女性にも当てはまる。まだ研究されていないが、こうした女

性は増加しているように見える。

こうした拡大家族は、いかに機能しているのだろうか。例をいくつかあげてみよう。インタビューした女性の一人は、祖母と暮らし、3人の違う男性とのあいだに3人の子供を持っている。家族のなかで彼女だけが自由貿易区の正式な仕事を持ち、祖母と叔母が子供の面倒を見ている。祖母は田舎に土地があり、そこから若干の収入を得ている。ところが、興味深いことに、彼女の姉妹は、やはり3人の子供がいるが、夫が出ていったばかりで、子供たちだけと住んでいる。他の家族がいっしょではないので、彼女よりは生計を立てるのがずっと厳しい。祖母と住んでいるほうが、家賃を払わなくてよいし、子供の面倒も見てもらえるので、ずっと楽なのである。

拡大家族では、成人が皆、家計に貢献することが期待されているが、これはフレキシブルな取り決めである。たとえば、ある子供が3人いる女性は、末っ子が病気になった時、フルタイムで面倒を見なければならなくなったので、仕事を辞めて親と兄弟3人といっしょに住むことになった。「兄弟は文句を言わないのか」と私が聞くと、「私が働いていた時は、私が彼らの分も払っていた。今度は私が面倒を見てもらう番よ」と答えた。

ほとんどのドミニカの家族では母–娘のつながりはとくに交換のあり方がフレキシブルで、強化される。

ある女性は、これまで三つの事実婚を経てきた。自由貿易区で働きながら女手ひとつで子供を育ててきた。47歳になった今では誰も雇用してくれないので、娘の子供の面倒を見ている。なぜそうするのかと聞くと、彼女はこういった。「娘が働き、夜に勉強している間、娘の子供の面倒を見るのです。娘はもう夜間高校の2年生で、ちゃんと進んでいるし、こうして面倒を見る事で、私も彼女も得るものがある」。

女性はしばしば、夫が失業したとき、両親と住み始める。ある女性によれば、その理由は、「夫にプレッシャーを加えると、よけい憤慨するだけです。だって他に道がないから」だという。

2-3. 労働条件の変化と女性労働者の権利

ジェンダー関係だけでなく、労働条件についても論じたい。グローバル化はこの変化を反映している。ドミニカ人が所有する工場が増え、新しい労働法が1992年に制定され、輸出型工場にも適用されている。自由貿易区の労働者の性別は、以前は女性が89％だっ

たが60%に減った。ドミニカ人男性がミシンの前に座って仕事するなど、かつては想像もできなかった。いまも、女性下着をつくるのは拒否するかもしれないが、ジーンズなどのズボンをつくるのは、男性の仕事として再定義された。

ところが、女性労働者が80から90%を占めていた頃も、技術職や管理職は男性が多く、週ごとの賃金の差が2倍に至ることも珍しくなかった。学歴の差ではないかと聞かれ、調べたが、関係はなかった。実際は、女性の方が高学歴の事が多い。男性が管理職や技術職に就くのは、学歴とは関係ないのである。

農業ビジネスには、確か日本の会社が始めたと思うが、パイナップル産業がある。こうした仕事が始まった時は、あまりに賃金が安いので、男性を雇用することができなかった。間に仲介者を置き、グループで出来高を競うシステム（コントラピスタ）にすると、男性が増えてきた。こうして女性から男性への転換が始まり、女性は農場や荷詰め工場で働かなくなった。また、転換の理由として、労働市場の悪化で、他に仕事がないので男性が自分自身の再定義をせざるをえなかったということがある。

下請け（sub-contracting）は、日本の会社が導入した方法で、ドミニカ人に会社をつくらせて、自分たちの会社の製品だけを作ることに同意させるというやり方である。こうすれば、労働争議が持ち上がったとき、日本の親会社は攻撃を受けなくてすむ。これも、増加しつつあるグローバルな下請け業をめぐる現象の一環である。

ところで、男性の雇用が増えた他の理由は、1992年に産休を強制施行しようとしたことである。産休制度は、それ以前も文書上は存在したが、実際に適用されたことはなかった。さらに、妊娠した女性を解雇してはいけないという、あたらしい規則が定められた。三ヶ月の産休期間が適用された結果、女性労働者のほうが男性より高くつくことになった。韓国の会社は、雇用する前に女性に妊娠テストをし、雇用後も毎月、女性労働者の妊娠テストを行っている。これは、本来、労働法違反であるが、現実に行われている。

こうした限界はあるが、1992年の新労働法の主な成果は、団体交渉を可能にしたことだ。1969年に自由貿易区ができた時から、労働組合は禁止されていた。明記されてはいないが、もし組合に関係したら、名前が他の仕事場にももれ、別の仕事に就くのは非常に困難だった。1992年の法律では、労働者の権利が保護され、このようなことは原理的に起こりえなくなった。法律改正後、当初は、熱狂的に多くの組合が結成された。ところが、その後でも、組合活動のために解雇された人たちがいる。彼らは退職金も受け取らず、解雇から5年後も、まだ会社と交渉中だった。アメリカの労働組合の協力によって、

解雇された労働者たちは集団で交渉をおこなっている。交渉の結果、11件が和解に調印したものの、実行されたのはわずか3件であった。

最終的に数名の労働組合委員長から話を聞くことができた。ドミニカの組合は、やはり男性優位なので、役員は男性である。様々な組合が、全国レベルの組織を結成しようと競合しているが、現在のところ最も代表的なのは「自由貿易区労働者全国連合」である。その委員長に話を聞いた。彼は長年労働運動に関わってきた人である。これまでの困難な経験をいろいろと話してくれた。彼が最後に語ってくれたことは、きわめて示唆的なので、ここに引用したい。

> アメリカとドミニカの労働条件が同じになるのは無理だと分かっているが、ネオリベラルなモデルに基づくIMFや世界銀行の援助で貧困が悪化するのは不適切だ。労働力の具合が悪く、収入も悪く、労働条件が悪ければ、どんな国も発展できるはずがない。

2-4. 保護主義と自由化、国際的同盟関係の変容

グローバル化は、ついにアメリカの労働組合をも変えた。これは、とても興味深い現象である。私は1970年代からアメリカの労働組合の研究を行ってきたが、彼らは、もともと保護貿易論者だった。「アメリカ製のものを買いましょう」というスローガンが繰り返された。しかし、彼らはこういう運動に効力がないことに気がついた。

こうした傾向は、1970年代に始まり、1980年代に加速した。アメリカのアパレル産業はほとんど壊滅している。プエルトリコでは完全に壊滅した。いま、次のターケットは繊維産業である。繊維産業は、保護されてきた。アパレルは輸入されてもよいが、材料の布は、アメリカで製造し裁断されなければいけないという原則は守られてきたのである。その結果、繊維産業の仕事は、アメリカのために保護されてきた。2003年9月に開催された世界貿易機関の会議で、この問題が討議された。2004年か2005年にはこの取り決めの期限が切れるかもしれない。繊維産業に関する保護貿易主義がどうなるか、先行きは不透明である。

アメリカの大学生による「反スウェットショップ運動」(anti sweatshop movement) をご存知だろうか。私が調査していた工場の人も関わっているので驚いたことがある。ILOの労

働法を遵守していない国の製品は買わないように、学生が組織的に、大学に圧力をかけたのだ。彼らは、購入のさいの契約の基準というものをつくった。工場経営者は、安全で健康的な労働条件を守れ、強制労働を課すな、団体交渉を保証せよ、というものだ。問題は、これが自由意志に基づくもので、強制力がないということだ。ドミニカでは、労働者はこの基準について聞いたことはあっても、組合を結成しようとする人間は相変わらず解雇されるような状況である。

2001年、私と夫は、またドミニカに戻って、一日だけ調査した。すると、以前に調査した工場では、人事監督者（personal manager）が3人の「人間関係スタッフ」（human relations personnel）に置き換えられていた。組合の結成だけは許さないものの、労働者と経営者側の橋渡しになるような、他のあらゆる方法を追求するためである。

別の問題は、NAFTA（北米自由貿易協定、1992年調印、1994年発効）である。ドミニカのパリティ（訳者注＝等価性、あるいは農家の生産物価格と生活費との比率も意味する）は、NAFTAのせいでダメージを受けた。メキシコほうがの労働力が安いため、低価格のメキシコの非課税品が流入し、ドミニカの産業に打撃を与えた。

パリティに関する議論を見ると、だれがどちらの側についているかが明らかになり、興味深い。アメリカのウォルマートやジェーシーペニー（JCPenny）といった大手小売業者はこれに賛成した。商品を安く輸入できれば、彼らの利益にかなうからである。ところが、繊維業界や、ドミニカを支持して賛成すべきだった労働組合がそれに反対した。国内産業の仕事を守りたかったからだ。こうして、同盟関係の移り変わりが見られた。すでに、NAFTAのパリティの結果、アメリカ南部のノースカロライナやジョージアの繊維産業では、何千人もの労働者が解雇された。労働者の多くは、ヒスパニックの移民であり、多数はメキシコ出身の人びとであった。

3. 結論

グローバル化のもとで、ドミニカ人女性が労働参加を高めたことの結果は、いったいなんだったのだろうか。自由貿易区では、男性の方が依然として優位な地位にある。女性の問題を表面に持ち出し、たとえ有給産休をとれたとしても、そのせいで、かえって仕事を得るのに不利になる可能性もある。ここに見られるのは、家父長制の肯定に対する合意で

ある。

私は前掲書で、家庭内の家父長制だけを論じるのは不十分だと述べた。女性は、確かに仕事への参加の度合いを高めた。しかし、いまでも労働の場や組合や政党では、男性の方が好まれている。男性の態度は、女性が働くことへの憤りによく現れている。組合も女性のリーダーシップを敬遠している。パイナップル産業の加工業では、労働の男性化（masculinization）が見られる。

とくに収入の低い女性たちの場合、ジェンダーの従属だけでなく、階級的、人種的従属にもさらされている。グローバル化のもと、中流の女性の地位はある程度向上している。カリブ全体で、多くの女性が大卒になっており、男性よりずっと数も多く、専門職の人も増えている。中流の女性の状況はよくなっているのだ。しかしそれは、低所得層の自由貿易区労働者には当てはまらない。ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟第11回大会（FIEALC 2003, Osaka）で私が議論したいのは、カリブ海諸国とラテンアメリカにおいて、女性運動によって利益を得たのは、高学歴の白人中産階級の専門職の女性であって、低所得者層ではないということだ。

ここで私たちが見ているのは、家父長的な規範的考え方と、草の根の女性の自立性の現実とのあいだの、拡大するギャップである。これは、女性の経済的自立に対する、男性アイデンティティの不安を示している。彼らの安心感の喪失、つまりこうした「危機に面した男性」（men at risk）をテーマとした本も出版されている。グローバル化は、低賃金の就職の機会を女性に増やし、男性の就労機会を減らすことによって、この危機を推進してきた。女性の安い労働の機会が増え、男性が家庭での力を低下させると、結果として女性は、結婚や再婚に抵抗するようになった。結婚市場において、家族を支えようとする／できる男性の数が少なくなったからである。

女性が家長となっている家族が形成される傾向は、とくにドミニカのような国で顕著である。ここではもともと婚姻関係のつながりが弱く、女性は家庭の維持や経済的支援を血縁関係に頼ってきた。グラシアの事例はそれを顕著に示している。彼女たちは、複数の金銭的な拠り所に依存している。グローバル化によって、お金の拠り所もトランスナショナル化した。送金の主は夫だけでなく、母や祖母の場合もある。なかにはアメリカで意図的に10年働いて、社会保障を受ける資格を得てから戻る人もいる。

デ・ラ・ロチャ［de la Rocha 2001］によると、拡大を目指す世帯の戦略は、ある程度は可能でも、おのずと限界がある。これほど多くの人が解雇されているなか、貨幣の流通は

十分ではない。親族関係があっても、それを役立てるには、ある程度のお金がなければいけない。この論文の著者はこれを、貧困モデルの再資源（re-resources of poverty model）から資源の貧困（poverty of resources）へと呼んでいる。こうした状況の結果、ドミニカでもメキシコでも、可能な戦略は、アメリカへの移民の拡大であった。

これらの人たちは、どうして故郷を去らねばならないのだろうか。1990年頃は、まだ経済ブームで、成長率は年7%だといわれていた。その後、成長率は低下し、9・11のあとにはさらに下がった。海外からの送金は減少し、経済も非常によくない状態になった。自由貿易区に対する海外から投資の主要な誘因は、労働力の安さである。賃金が高くなると、投資先は、中南米やアジアなど、別のところへ向かう。ドミニカの国際競争力は、アパレル産業ではすでに低下している。「契約基準」は多少の助けになったかもしれないが、賃金増加にはつながらなかった。しかも、多くの工場は閉鎖されてしまった。

つまり、グローバル化は、男女間の関係のレベルから二国間関係のレベルまで、世界規模での不平等の拡大につながった。グローバル化の結果、おおきな利益をえているのは、資本であって労働者ではない。アジア通貨危機は、日本も含めて、グローバル化で非常に成功していたアジアの国々にとっておおきな打撃であった。グローバル化の結果、国内経済が支払った代償のおおきさを私たちに見せつけることになった。賃金の低下、社会保障のカット、国内市場の成長の低迷といった現象は、契約基準や海外への出稼ぎ、世帯の生存戦略だけでは対応することができないのである。

［Helen Safa・フロリダ大学教授］

［参照文献］

◇de la Rocha, M.G. 2001 From the Resources of Poverty to the Poverty Resources?: The Erosion of a Survival Model. *Latin Amerian Perspectives* 28(4): 72-100.

◇Safa, Helen 1995. *The Myth of the Male Breadwinner: Women and Industrialization in the Caribbean.* Boulder: Westview Press.

◇Safa, Helen 1999. Women Coping with Crisis: Social Consensus of Export-led Industrialization in the Dominican Republic, Agenda Paper 36, The North-South Center, University of Miami, Miami: University of Miami.

◇Standing, Guy 1989. Global Feminization through Flexible Labor. *World Development* 17(7).

トランスナショナリズム研究の課題◆
人類学の観点から

上杉富之

トランスナショナリティ研究セミナーは、当然のことだが「トランスナショナリティ」を研究対象としている。しかし、私が興味を持っているのは「トランスナショナリズム」である。ここで論じるのは、これら両概念の相違点はさることながら、私が欧米、特にアメリカのトランスナショナリティあるいはトランスナショナリズム研究の歴史を追いかけた結果判明した、こうした概念がいったい何を問題化しようとしているのかについてである。

振り返ってみると、トランスナショナリティ研究セミナーは毎週開催され、これまでに計60回以上にわたって行われてきている。私の講演はその63回目である。トランスナショナリティ研究セミナーのウェブサイトでこれまでの講演者と講演タイトルに目を通したところ、これまでの60回の内、6回くらいはトランスナショナリティとは何か、あるいはトランスナショナリティのターゲット、つまり何を問題視しようとしているのかといったことに関する講演があった。とはいえ、トランスナショナリティ、あるいはトランスナショナリズムとは何かを発表の直接の主題にしたものはおそらくなかった。

こうした状況は、人類学の現状を象徴しているところがあるのではないか。後に繰り返し述べることになるが、どうもわれわれ人類学研究者には「理論化への嫌悪感」や「理論化に対する回避」があるように思う。つまり、われわれが調査研究で求めているものは何か、ターゲットは何か、そういったことを考えるときに出現してくる自分たちのポジショナリティ、位置取りや理論、枠組みについて考えることを回避しているような印象が、これまでの60回の講演タイトルを見ていて強くなった。より具体的に言うと、これまでの

◆――本論文は、2005年10月21日にトランスナショナリティ研究セミナー（於大阪大学大学院人間科学研究科）で発表されたものが元となっている。なお、取り扱う「トランスナショナリズム研究の課題」の概略は、「人類学から見たトランスナショナリズム研究――研究の成立および展開と転換」[上杉2004] で述べたものである。

講演は個別の研究、あるいは地域研究ないし事例研究が非常に多かった。それを一歩進めて、それらの事例を比較して何が言えるのか、今、世界で何が問題になっているか、トランスナショナリズムあるいはトランスナショナリティ研究を通して世界がどのように動いていると見るのか、これらを考える姿勢がこの研究会には欠けているのではないか、ということである。

もちろん、私自身もそういう状況下にあると思う。そして、そもそもトランスナショナリズムを根底から考え直して理論化する資格が私にあるのかと問われれば心許ないところもある。しかし、こうした試みを開始する出発点として、人類学や国際関係論、国際政治学、その他もろもろの専門分野におけるトランスナショナリティ研究ないしトランスナショナリズム研究が共有している問題意識、すなわちいったい何を対象化し問題化しようとしているかということを以下で論じたい。

まず断っておきたいのは、以下で論じる内容は、特定の民族や特定の社会、国家に関する事例研究ではないということである。どちらかというと、特定の事例を超えた理論を考える枠組みを、私なりに検討した結果について話すことになる。私は最近、事例を交えないでトランスナショナリズムや生殖医療について話すことが多い。すると、「人類学をやめたのか」と言われることもある。もちろん、決してそうではない。そのことをあらかじめ記した上で、私が現在おこなっている三つの研究について述べてみたい。

一つめとして、私は長年にわたってボルネオの焼畑農耕民の社会と文化に関する民族誌的研究を行っている。二つめとして、東南アジアの社会・文化の動態的研究がある。この調査研究は人の大量移動、すなわち移民が起こった場合に当該社会や文化はどのように変化するのか、あるいは人そのものがどのように変化するのか、あるいはしないのかということに関連している。これが、本論の内容に最も密接に関わってくる研究テーマである。そして三つめが、先端的生殖医療が現代社会・文化に及ぼす影響に関する研究である。これは、代理母や提供卵子を用いた場合に、親はどうなるのか、誰が親になるのかといった問題を扱っている。

一見すると、これら三つの研究テーマはバラバラである。私自身もつい最近まではそのような自覚もあった。しかし、これら一見バラバラであるような三つの研究、特に二つめと三つめの研究に関しては、それらの根底に、私なりのある一つの共通の問題意識がある。それは、私が思う人文社会科学全体を覆っている大きな理論的潮流の変化に関わっているような問題である。二つめと三つめの研究テーマ、つまり移民問題や生殖医療をめぐ

る問題は、関連した問題群の言わば氷山の一角であって、その根底にはある大きな変化があるのだということを最後に述べる。

ところで、本論の内容との関わりもあるので、私のフィールドワークについても一言述べておきたい。私はボルネオ島ないしカリマンタン島と言われている東南アジア島嶼部の辺境地域・ボルネオ島のサバというところで調査をしてきた。ボルネオ島北部のサバというところは、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、マレーシアの国境地帯である。中国やインドからも移民が多くやってきているうえ、かつてイギリスの植民地になったこともあることから、いわゆる「ユーラシアン」、つまり白人とアジア人の混血の人々も住んでいる。こういった、「国境地帯に私がいた」ということが、今回お話させていただく移民、トランスナショナリズム、トランスナショナリティの問題を考えざるを得ない大きな理由であった。

以下では、まず最初に、トランスナショナリズム研究を通していったい何を問題化したいのかということ、次に、その問題を考えるに当たり、これまでの民族や移動に関する理論を検討し、それらの理論のどこに限界があると私が考えているのかを述べる。もちろん私よりも先に理論的限界に気付いていた研究者がいたわけだが、その限界とはいったい何だったのかということを交えて述べたい。最後に、その限界を越えるためにこそ「トランスナショナリズム」という概念を持ち出さなければならなかったのだと論じたい。

1. いったい何が問題なのか？

1-1. フィールドでの経験

まず、私にとって何が問題であったか、ということを論じたい。15年以上前の、私のボルネオでの経験を簡単に述べたい。私が調査をしていたのはマレーシアのサバ州という、人口100万人ちょっとのところであった。当時は、サバ州の100万の人口のうち30万人が移民であった。これは、民族紛争地帯であるフィリピン南部からの「難民」であったり、インドネシア側からの合法ないし非合法の移民であった。サバはかつて南洋材の伐採が盛んであり、好景気に沸いていた。そういった事情もあり、移民は伐採労働者としてやってきていた。また、お手伝いさんとして来たり、飲食店や歓楽街といったところへ

人々が集まってきていた。その結果、サバの合法的な移民だけでも30万人に達していた。非合法の移民を含めると、サバ住民100万人内の60万人近くが移民ないしは移民の子孫であるといわれていた。

こうした場所で民族や文化の動態、ダイナミクスを考えると、既存の概念はなかなか使えないということが分かってきた。例えば、民族という言葉がある。民族というと、共通の言葉や帰属意識・アイデンティティを持っているということを想定しがちである。しかし、サバでは、お母さんはフィリピン人、お父さんはインドネシア人で、本人はマレーシア生まれというようなことが多々あり、国でいうとインドネシア人かつフィリピン人かつマレーシア人という感覚を持っている。そして「あなたの民族は何ですか、あなたは何族ですか」という聞きかたをすると、それに対する答えは時と場所によって変わる。これは私たち調査者だけにとって問題なのではなく、実際にマレーシア（サバ州）政府が国勢調査をする場合にも問題となる。私はかつて民族問題、すなわち民族の生成や再編の様子を統計資料で調べようとしたことがあるが、国の統計資料においても、先ほどのいわゆる「多重民族帰属」とでもいえるものが問題になっていた。こうしたインドネシアやマレーシア、フィリピン系の人々の他に、中国系やパキスタン系の人々、さらにユーラシアンが混ざるわけだから、使用する言葉はもちろんのこと、宗教などにおいてもさまざまな要素が混ざってくる。つまり、イスラームやキリスト教、仏教、そして先住民の人々が持っている生き方の規範としての宗教などが混ざるのである。そういうものをただ単に「民族」という言葉で括って表現するのはなかなか難しい。

では、「エスニシティ」という概念ではどうだろうか。残念ながら、この言葉も使えなかった。なぜかというと、一つの国の中だけで完結してしまう問題ならばエスニシティという言葉も使いやすかったと思うのだが、先ほど申したとおり、人々は移動している。国の中あるいは地域の中だけで完結した、エスニックな関係を説明する概念としてならば「エスニシティ」は使えるであろう。しかし人々は国境を越えてやってきている。しかも、一つの国の内と外の両方に帰属意識を持っている、両方を自分の故郷と認める感覚、あるいは国境に意味を認めない感覚を持った人々もいる。そのような感覚を持った人々を、「民族」や「エスニシティ」という言葉で表現したとしても、彼らの生活実態や生活実践、文化・社会の動態というものはなかなか説明できない。以上が、私にとって、きわめて大きな問題であった。

2. 脱領域化する「民族」

二つめの問題、すなわち、上記の問題を考えるに当たって理論的にどこに限界があったのかという問題に移る。トランスナショナリティ研究班の研究代表者である小泉潤二氏は先ほど、私の講演に先立って、トランスナショナリティ研究セミナーの対象は何かということを改めて示し、その一つとして、「脱領域化する『民族』」を挙げていた。私は、「民族」という概念を括弧付きで使いたい。「民族」を括弧付きとするのは、「民族」という言葉がそのままでは使えないからである。使えない理由としては、われわれがイメージしている一元的な、「一つの民族にアイデンティティを持っている」というような意味での「固い」民族概念はもはや使えないと考えるからである。前述のように、国境を越え、地域を越えて両方にまたがっているというような「民族」が、現在の「脱領域化する『民族』」の実態なのである。これをいかにして対象化し、考察していくかということが私にとって大きな問題であった。このことは私だけの問題ではなく、実は、世界中で共時的に起こっていたのである。かつて私が「地域研究者」であった頃、つまり非常に古典的でオーソドックスな方法・概念で研究をしていた頃、このことが私を大いに悩ませた。その後、このような現象はサバや東南アジアなどのみにおける局地的な問題ではなく、アメリカはもちろんヨーロッパでも起こっており、同時にそれらの国々ではそういう現象を対象化し、比較検討してある一定の方向性を持った議論へと収斂させ始めているらしいということが分かってきた。それがトランスナショナリズムの話になるわけである。しかし、私がサバで調査を行っていた1990年当時は、このような状況を概念化することは無理であった。当時、アメリカやヨーロッパ諸国において現象自体は観察されていたが、それを対象化し概念化するための明確な言葉や概念がまだなかったのである。確かにそれに近いものはあったが、それはいまだ明確なものとはなっていなかった。以下では、こうした研究の歴史を辿っていく。トランスナショナリティ、トランスナショナリズムあるいはトランスナショナルという言葉の歴史をたどってみるのである。

欧米で、脱領域化する「民族」に対してトランスナショナリズムないしそれに類似した言葉を使用しようという了解が出来たのは1992年あたりのことであった。それは私がサバのフィールド調査から帰ってきたばかりの時期で、多元的帰属意識の事例をどう考えるべきか一人で悩んでいた頃であるが、世界では、そうした事例を比較して概念化する動

きが進んでいた。つまり、大規模な人の移動があり、そこに何らかの二重帰属や多元的な帰属が見られるという現象の対象化ないし概念化である。そのことの意味が、フィールドワークでの体験を通して徐々に分かってきた。

それから数年後、現在東京外国語大学に勤めている床呂郁哉氏が、私が調査していたボルネオ島の山奥とは逆の海側、つまりフィリピン側から同様の人の移動の事例を追いかけ、『越境——スールー海域世界から』という本にまとめ、彼なりの見事な分析を加えられた［床呂1999］。その際のキーワードは、トランスナショナリズム研究あるいはトランスナショナリティ研究セミナーにおける問題意識と非常に近い「越境」というものであった。ただ、後述するように、この越境という言葉には罠があると私は考えている。とにかく、床呂氏は国境を越える、境界を越えるという意味で「越境」という言葉を使用し、現地の人々の生活実践や世界観というものを説明した。そして、これはかなりタイムリーなトピックであったから、日本民族学会（現日本文化人類学会）から学会賞を受賞している。

もう少し「脱領域化する『民族』」について述べると、床呂氏も問題にしていたのだが、もっとも大きな問題の一つに「重国籍」がある。私はこれまで民族や文化などとしてお話ししてきた。だが、サバで生きている人々にとって具体的に問題なのは抽象的な民族や文化ではない。文化で飯が食えるわけでもないし、多元的帰属自体もそれほどの問題ではない。移民の人々が政治的な場において実際に闘ったり、権利を勝ち取るために必要なのは「国籍」なのである。

マレーシアでは、基本的に二重国籍は認められていない。しかし、認められていないからといって重国籍問題がないというわけではない。移民たちはしばしば彼ら自身で新たな国籍を作るのである。つまり偽造ICやパスポートである。マレーシア、特にサバについてご存知の方はお分かりであろうが、イスラーム教徒とクリスチャンが数の上でも競合する状況で、マレーシア（サバ州）の一部政治勢力はイスラーム教徒を増やしてマレーシア国家の安定を図るために、周辺諸国のムスリムの人々に戦略的に、あるいは政策的に偽造ICを与えていたと言われている。ムスリム移民をどんどんと入れたのである。そして、入ってきた人々、つまりフィリピンやインドネシアからやってきたムスリムの人々は、入ってきたサバでマレーシア人としてのICを獲得する。つまり、移民たちは実質的に二重国籍を持つということになる。

さらにアメリカでいうグリーンカードに近い「永住権」という地位がマレーシアにもあるのであるが、それが移民にも拡大されていく。不法移民が30万人ほどいる状況で、彼

らを追い出してしまうと地域経済は破綻してしまう。だから、彼らをどうにかして取り込もうとするわけである。サバ州政府はもちろん、マレーシア連邦政府もそうである。では、いったいどのようにして取り込むのか。それは、不法移民の人々に、定期的に恩赦や特赦を施すことで達成された。つまり、自己申告すれば、不法移民としての罪はなかったことにするというわけだ。あるいは、「良い子」にしておれば永住権を与えるのである。

ところで、永住権は以前から法的に設定されていたが、その人数枠はきわめて小さかった。かつ、永住権を持っている人々の持つ権利・義務も非常に小さかった。しかし、まず人数枠が拡大された。つまり、数百、数千の不法移民たちに永住権を与えるような恩赦、特赦が繰り返されたのである。さらに、そうした人々の子どもたちにも教育の面で「お目こぼし」を与えた。かつては、不法移民の子どもたちは小学校までしか行けなかった。しかし、それが徐々に延長され、高校（中等学校）までは行けるようになった。しかし大学には絶対に入れようとしない。なぜなら大学に入れると、その人が権力の中枢部に上りつめる可能性があるからである。こうして、教育の面でも不法移民の人々の権利は拡大されていった。より多くの不法移民を受け入れ、また、徐々に彼らの権利を拡大していく。それがどのような事態を招いたかというと、市民（citizen）と非市民（non-citizen）の間が非常にあいまいになったのである。そして、そのあいまいさこそが移民の取り込みにうまく作用した。

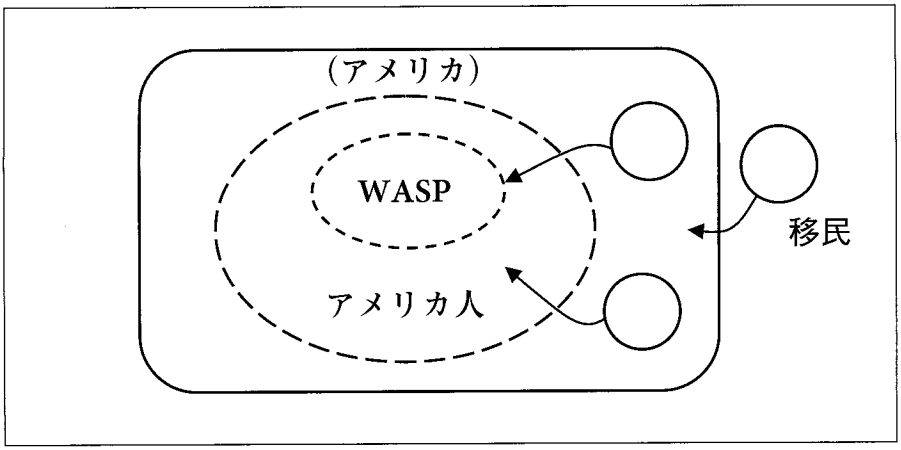
ところで、サバで起こっているのと同じようなことがアメリカやEU諸国、特にフランスのマグレブ移民やドイツのトルコ系移民に関しても起こっているらしいことに、私は後から気が付いた。サバという局地的な場所で調査研究をしていたころには私はそれに気付くことはなかったのであるが、その間にもこういった人々が世界中で増えていたのである。そしてそれをいかに概念化するかということについて、例えば、シティズン（citizen）に対して「デニズン」（denizen）という概念で捉えてはどうかという議論が世界規模で起こってきていることも後に分かった。

では、こうした新しい現象に関して既存の概念や理論は使えないのかというと、これは先ほど簡単に触れたように、使えない。ではその他の様々な理論、例えば文化、あるいは社会や民族に関する様々な理論があるが、それはどうか。やはり、だめだと私は考えている。それは、なぜか。ここで、民族に関する理論を例として既存理論がどのような限界に達しているのかについて記しておきたい。

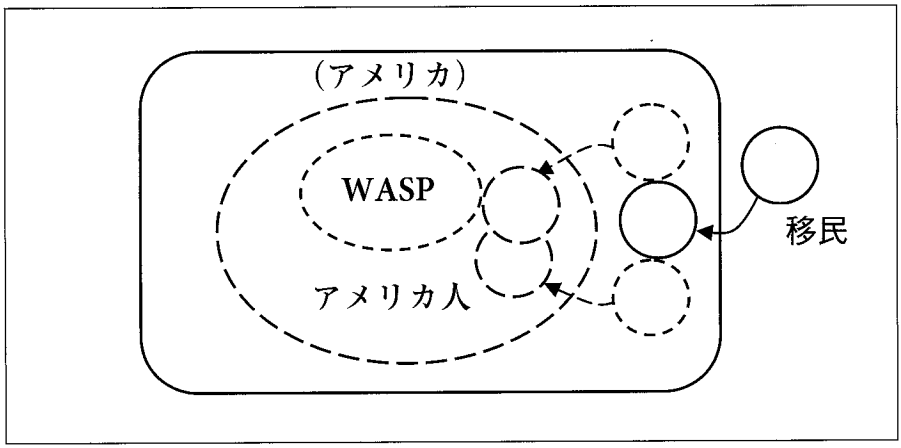
3. 既存理論の限界——民族理論を例として

まずは、「民族」と「エスニシティ」に関して考えてみたい。先ほど述べた通り、「固い」民族、つまり一つの民族に一元的に帰属するという固い意味での民族という概念は使えなかった。「民族」概念の後に、アメリカの社会学などで、それをもう少し「柔らかく」したような概念として「エスニシティ」が現れてきた。「民族」概念はリーダーを擁して国家（民族国家）を希求するいわゆる「ナショナリズム」運動を展開したり、あるいはある特定の地域や国に結びつくような「固い」概念である。これに対して、「エスニシティ」という概念はもう少し「柔らかい」概念である。エスニシティ概念は必ずしも特定のリーダーや国・地域には結び付かず、ネットワークや流動性、可塑性に注目する概念である。ただし、エスニシティ概念は二つの国家に同時に帰属するとか、国境を越えて帰属意識を持つといった現象を射程に入れていたわけではないと私は考える。そのあたりのことを、アメリカの民族理論の変遷から明らかにしておきたい。

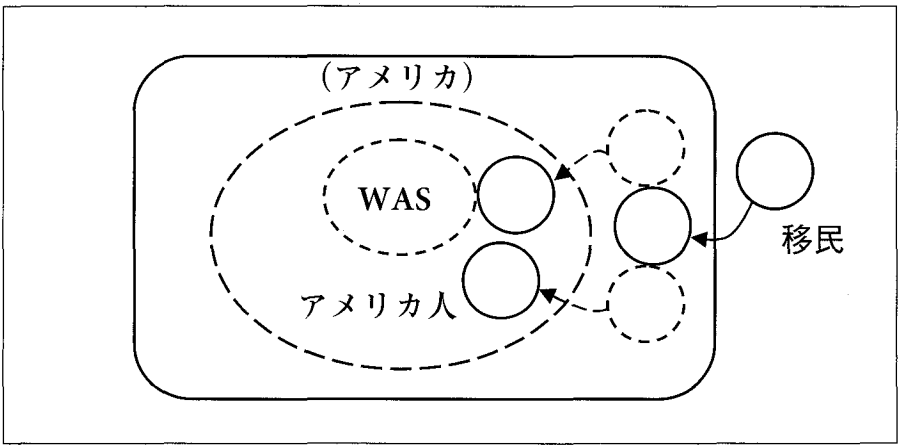
ごく単純に言うと、アメリカという国はかつて最終的には「アメリカ人」が満たすものと考えられていた。そして、そのアメリカ人の中核にはいわゆるWASP（White Anglo-Saxon Protestant）が想定されていた（[民族論モデルI] 参照）。そこに新たに移民が来ると、移民たちは当初は人種（民族）ごとの文化的特徴を維持するであろうが、徐々にそれらを失い「アメリカ人」になるであろうと考えられていた。いわゆる「人種のるつぼ論」である（[民族論モデルII] 参照）。しかし、実際にはそうならなかったということは周知の通りである。移民が「アメリカ人」になるにつれて人種（民族）の境界がなくなり、人種（民族）が滅亡していくと考えられていたのだが、現実には、その強度は別にして、それぞれの人種（民族）が境界を維持しながら残ったのである。具体的にいうと、日系アメリカ人であるとかドイツ系アメリカ人であるとかいう、「～系アメリカ人」として残ってしまったのである。混ざると思ったら、混ざらなかった。こうした状況は、「人種のるつぼ論」に対して「人種のサラダボール論」と言われる（[民族論モデルIII] 参照）。



［民族論モデルⅠ］
原初的アメリカ社会



［民族論モデルⅡ］
「人種のるつぼ論」

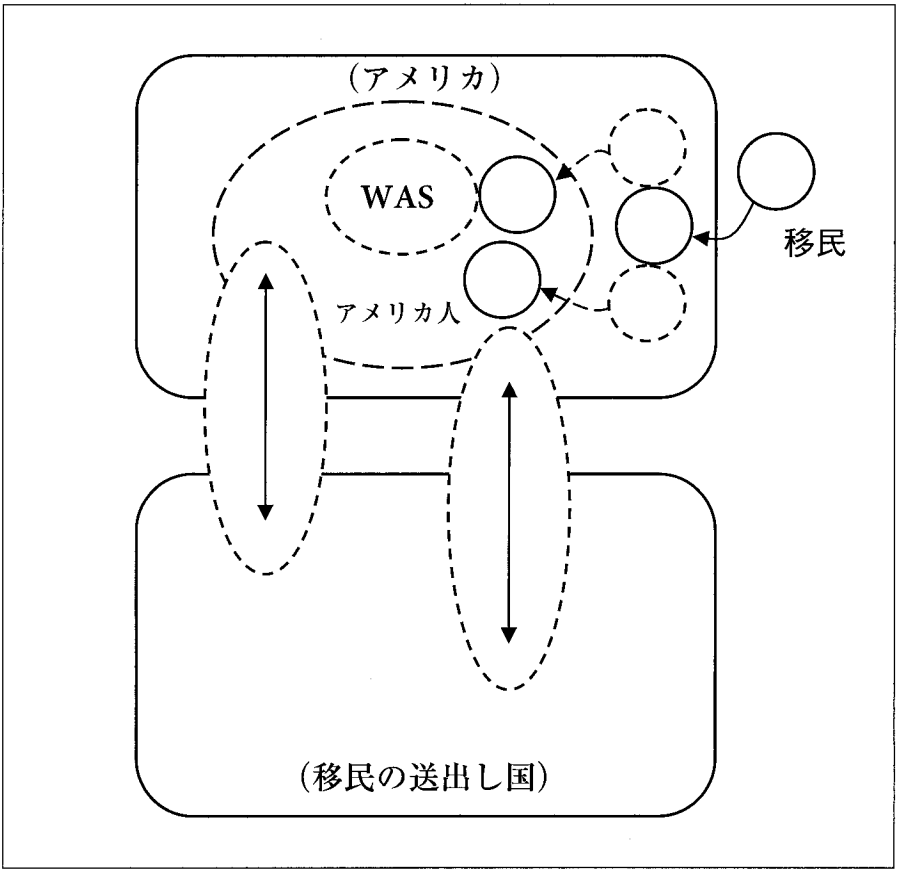


[民族論モデルIII]
「人種のサラダボール論」

「人種のサラダボール論」においては、特定の国や地域に帰属意識を持ち、明確な境界を持つものとしての「民族」概念は適切ではない。そこで提出されたのが「エスニシティ」概念である。「エスニシティ論」においては、「人種のるつぼ論」で理想とされた「同化主義」は否定され、ゆるやかながら、それぞれがそれぞれの民族性を維持・継続する「多文化主義」が理想とされた。つまり、「〜系アメリカ人」それぞれが持つ言語や文化を認めようという動きである。特にこのときに問題になったのは、中南米等から来たスペイン語をしゃべる「ヒスパニック」ないし「ラティーノ」移民であったと思う。そうした移民たちが使用する母語でもって教育をしたほうが、無理やり英語を学ばせるよりも教育効果の向上が望め、適応も速やかになるであろうということで、多文化主義は政策として取り入れられることになる。それは多言語教育と言われている。ここまでが、おおむね1990年代初めまでのことである。

ゆるやかな民族性を容認する多文化主義を実践すれば移民たちとの共存が実現できると考えられていたが、現実はそうではなかった。アメリカで実際に起こったのは共存の実現ではなく、アメリカ人になったはずの移民たちが出身国とアメリカを、国境を越えて往来するようになるのである。往来はメキシコなどの中南米や西インド諸島との間であったりオセアニア諸国のフィジーやパヌアツとの間で見られた。例えば、出稼ぎでアメリカに

やってきたフィリピンの人々はフィリピン系アメリカ人になったのだが、その後も、彼らは頻繁に祖国とアメリカを往来している。グリーンカードを取得せず、まだアメリカ人になっていない人々ももちろん出身国との間を行ったり来たりする。こうした状況というのは、エスニシティの議論においては想定されていなかった。こうした、先に述べたサバでも確認される新しい現象を説明しようとする時に、「トランスナショナリズム」という新たな概念が持ち出されたのである（[民族論モデルIV] 参照）。



[民族論モデルIV]
「トランスナショナリズム論」

4. トランスナショナリズム概念の成立と変遷

それでは、トランスナショナリズムという概念の成立や展開の経緯はどのようなものだったのかということを述べたい。

先ほど来、トランスナショナリズムの定義を棚上げし、まずそうした概念が求められた状況について論じた。国家の境界を超えて往き来する移民たちの現状があり、その現象を対象化するためにトランスナショナリズムないしトランスナショナリティという言葉が使われ始めたということを確認した。しかし、トランスナショナリズム概念は、それが使われる年代によって、あるいは国際関係論や国際政治学、社会学、人類学などの専門分野ごとに意味内容に微妙なずれがある。言葉を換えると、トランスナショナリズムという概念によって何を対象化し問題化しようとしたのかは時代ごと、専門分野に異なるのである。従って、このことを確認することなしにトランスナショナリズムの定義をすれば、誤解を招くことになる。それが、これまでトランスナショナリズム概念の定義をしなかった理由である。本講演では、トランスナショナリズム概念の成立や変遷を確認した後で、最終的にトランスナショナリズムは現在どのように定義されるのかを示すこととする。

ではまず、「トランスナショナリズム研究の成立」や「トランスナショナリズム概念の成立」ということについて論じたい。実は、トランスナショナリズムあるいはトランスナショナリティ研究の起源や経緯を追いかけて研究したものはほとんどいない。欧米の研究書等をひもといてみても、トランスナショナリズム概念の成立の経緯は詳らかでなく、いつの間にか使われ始めたということとされており、具体的な跡付けはなされていないのである。日本においてはそれが混乱を招いている。日本において、1990年代半ばに「トランスナショナル」という言葉が輸入されて用いられ始めたとき、それを単純に「越境」と訳した経緯がある。トランスナショナルという言葉がもともとは何をターゲットにした言葉であったのかということを問わずに、字面だけを「越境」や「国境を越える」というような意味合いに訳したのである。しかし、語源や語彙の変遷に関する私の調査によれば、トランスナショナルないしトランスナショナリズムという概念は、それが使われた時代や使用対象、学問分野に応じて四つの時期に分けて考える必要がある。以下では、この四つの時期に分けて、トランスナショナリズム研究の成立と変遷について述べたい（[表1] 参照）。

	覚醒期	確立期	展開期	転換期以降
年代	1920年代	1970年代	1970年代後半～1980年代	1980年代後半～、特に1990年代半ば以降
主要研究分野	国際政治学	経済学、国際関係論	国際関係論、政治学、経済学	人類学、社会学
研究レヴェル	マクロレヴェル	マクロレヴェル	マクロレヴェル	ミクロ～メゾ（ミドル）レヴェル
焦点となる活動主体	国際連盟などの国際機関	多国籍企業	多国籍企業、NGO	労働移民、移民コミュニティー
活動レヴェル	高位	高位	高位	低位～中位
主要研究項目		国家の主権と多国籍企業の経済活動	多国籍企業・NGOの政治・経済活動、集団としての労働移民	移民の回帰、移民の多元的帰属・多元的ネットワーク、クレオール文化、エスニシティ、グローバリズム、多文化主義
関連研究分野	政治学、経済学	政治学	社会学、移民研究、人権・環境論	国際関係論、政治学、経済学、教育学、メディア論

［表1］ トランスナショナリズム研究変遷

まず、第一の時期を、私はトランスナショナリズム意識の「覚醒期」と名付けた。この時期は、トランスナショナリズムという言葉が初めて用いられるようになった時期である。それは1920年代であった。オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー（OED）で語源を調べた結果、1921年にノーマン・エンジェル（Norman Angell）という人物が「トランスナショナル」（trans-national）あるいは「トランスナショナリズム」（trans-nationalism）という言葉を使ったのが最初の使用例であった。ノーマン・エンジェルはノーベル平和賞を受賞したイギリスの著名な国際政治・経済評論家である。1921年に彼がどのような意味合いでこの言葉を使ったかというと、第一次世界大戦後にイギリスが勝利に酔いしれていた頃、彼は、「われわれは勝ったのではない。戦争をしても結局誰も勝たな

かった。非常にたくさんの人々が死んだのだ」と警告し、世界が一連托生であることに注意を促すために使っている。1920年代当時の世界は、すでに相互依存関係にあった。つまり、世界はどこかが勝ってどこかが負けるという単純なものではなく、どこかが負けたら、社会的・経済的にもすべての国が危険な状態に陥るというのが第一次世界大戦当時の状況であった。ヨーロッパ諸国はそれぞれの国が単独で存在しているのではなく、分業体制のもと、相互に依存しつつ世界の中に組み込まれていたのである。これは現在の世界システム論に似ているところである。このことを表現するために、ノーマン・エンジェルはインターナショナルではなく、トランスナショナルないしトランスナショナリズムという言葉を用いたのである。この「覚醒期」におけるトランスナショナリズムという言葉の用いられ方をまとめておくと、国際政治学分野で、国家レベルのマクロな相互依存関係を意味するものとして用いられたと言えよう。しかし、当時の世界はさらなる大戦（第二次世界大戦）に突入するというきわどい状況にあり、トランスナショナリズム概念によって相互依存関係を強調して平和を求める前に、まず競争に勝たなければならないという状況であった。このため、ノーマン・エンジェルの提唱したトランスナショナリズムという言葉は一度忘れさられる。トランスナショナリズム概念に再び注目が集まるようになったのは、それから半世紀も経った1970年代であった。

私は、この第二の時期をトランスナショナリズム概念の「確立期」と名付けた。なぜ1970年代にトランスナショナリズム概念が再び取り挙げられ、その概念が確立したと見なせるほどに普及したのかというと、その当時、多国籍企業の活動が急激に活発になったからである。多国籍企業は、“multi-national enterprise” や “multi-national corporation” と呼ばれることが多いが、“trans-national corporation” とも言われる。この多国籍企業に注目して、1970年代にアラスティア・バカン（Alastair Buchcan）という当時の著名な政治学者がBBC放送において、多国籍企業の経済活動を表すために始めてハイフンなしのトランスナショナリズム（transnationalism）という言葉を使った。それが広まり、トランスナショナリズムという言葉が定着した。トランスナショナリズムという言葉が用いられた分野は国際関係論や経済学であった。それは、「多国籍企業が国を超える」というマクロレベルでの議論であった。そして、活動の主体は多国籍企業であった。

1980年代に入ると、トランスナショナリズム研究は「展開期」に入っていく。この時期、トランスナショナリズムという言葉は多国籍企業とは違った文脈においても拡大して用いられ始める。具体的に言うと、地球規模の環境や人権問題にかかわるNGOの文脈におい

て用いられるようになる。当時、多国籍企業が利益を追求して国境を越えて事業を展開した結果、地球規模の大規模な汚染や環境破壊が進んでいった。あるいはまた、世界の抑圧されている人々を、国境を越えて支援しようとするような人権意識が高まっていった。そのときの活動主体はやはりNGOであった。地球規模の環境問題や人権問題の解決は特定の国の政府では不可能であるから、各国はNGOを支援するかたちで環境問題や人権問題の解決を促進させようとした。そうしたNGOの活動に対して、トランスナショナルという用語が拡大して用いられようになった。従って、この時期（トランスナショナリズム研究の「展開期」）のトランスナショナリズム研究は、それまでの（多国籍企業の）経済中心的見方ではなく、（NGOなどをめぐる）国際政治や社会運動をも射程に入れた研究という特徴を持つ。しかしこの時期においても、トランスナショナリズム概念の適用があくまでも国際関係や国際機関・組織をめぐるものに限定されていたことには注意が必要である。

1980年代後半になると、人類学がトランスナショナリズム現象に積極的に取り組むようになり、トランスナショナリズム研究は「転換期」を迎えた。1980年代の後半から1990年代の中頃にかけて、つまり私がちょうどボルネオで調査をしていた頃に、人類学あるいは社会学分野の研究者の一部がトランスナショナリズムという言葉を新しい文脈、新しい研究対象に対して使い始める。大規模な人の移動、すなわち移民に対してである。当時の移民の理論では、移民というものは最終的には移民先社会に同化するという同化主義的考え方か、あるいは、移民はお金を得た後は故郷（出身国）に帰って行き、最終的には移民先社会に戻ってくることはないだろうとする考え方が主流であった。つまり、移民は同化するか帰郷するかのどちらかであろうと考えていた。ところが、1980年代後半から1990年代にかけて、同化したふりをしているが実際のところ同化しきっていない人々、あるいは、故郷に帰ったはずなのにまたやってくる人々、強制退去させたのにまたやってくる人々、つまり移民先と出身国の間を往復運動する移民が急激に増えていた。アメリカの例では、中南米や西インド諸島からのラティーノやヒスパニックと呼ばれる移民が増加し、しかもホスト社会（アメリカ）と出身国、ないしはその他の第三国との間を往復運動する人々が増えた。こうした、私がボルネオで見てきたような移民の動きに対して、トランスナショナリズムという言葉を再定義して用い始めたのが、この時期（トランスナショナリズム研究の「転換期」）である。

少しまとめておきたい。1990年以前、トランスナショナリズムという言葉は国や地域といったマクロレベルで使われていたわけであるが、1990年以降、もっとも頻繁にトラ

ンスナショナリズムという言葉を使い始めた人類学や社会学では、移民の文脈、すなわちミクロレベルあるいはメゾレベルにおいて使用し始めたのである。そして、その際の主要な研究トピックは、例えば日系ブラジル人のように、移民先国から故郷（日本）へ戻って来るといった回帰運動や、さらにそこからまたホスト社会（ブラジル）に帰って行くといった往復運動であった。また、こうした回帰運動や往復運動を通して、移民の多元的帰属や多元的ネットワークや多元的生活実践が顕著になってきたことがトピックとして取りあげられた。これらの問題は、場合によってはクレオール文化や多文化主義といった問題として扱われることもあった。これが、トランスナショナリズム研究の「転換期」における大まかな動きであった。

ところで、こうした移民のトランスナショナルな現象は、アメリカの中南米移民のみならずフィリピンやオセアニア諸国、アフリカ諸国からの移民など、さまざまな移民について観察されていた。当然、それを理論化しようとする研究者が現れる。実際、1990年にこうした研究者が集まり、アメリカでシンポジウムが開かれる。そして、それまで個別に行われてきた事例研究——例えばフロリダにやってくる西インド諸島の移民、フィリピンからやってきてカリフォルニアに住む移民、あるいはフィジーからやってくる移民——を比較検討することによって、移民たちが近年、ある似たような動態を示していることが確認された。このシンポジウムの成果は、後にグリック・シラー（Glick Schiller）らの編集で、*Towards A Transnational Perspectives on Migration*（1992）という移民研究の本として刊行された。この本の中で、グリック・シラーらは、移民に見られる新しい現象を対象化するために「トランスナショナル」という観点を導入すべきだと主張した。そして、グリック・シラーらは、トランスナショナリズムという概念を「転換期」以降の意味において改めて定義し直している。つまり、トランスナショナリズム概念の重要性は移民が国境を越えるという事実だけではなく、そこに見られる多元的な帰属や多元的な生活実践が重要だというのである。

グリック・シラーらの本が最初に、トランスナショナリズムという概念をある重要な方向に導いていったことを忘れてはならない。彼女らの本の刊行後、似たような著書や論文が次々に刊行されることになる。例えば、1995年に*Annual Review of Anthropology*の中で、人類学者のカーニーがグローバリゼーションとともにトランスナショナリズム概念の本格的なレビューを初めて行った［Kearney 1995］。このため、人類学者がトランスナショナリズム概念を言及する場合には、たいてい1995年のこの論文あたりから始まる。だが、先

ほど述べたとおり、これより前に、グリック・シラーらがそういった問題を検討していたのだ。彼女らの先駆的研究の後に、カーニーやポーテス［Portes et. al. 1999］、バートベック［Vertovec 1999; Vertovec and Choen 1999］といったアメリカやイギリスの研究者が中心となってトランスナショナリズムに焦点を当てた研究を行っていく。

ところで、私はこうした研究者によるトランスナショナリズムの定義を比較し、共通する要素を抽出した。その結果、一つ目の要素として、「複数の国境を越える」という点が共通して挙げられていることがわかった。そしてもう一つ、「長期間継続して頻繁に見られる往復運動」という点が挙げられる。そこには、二ヶ国、三ヶ国を股に掛けて生きているという、移民の多元的な生活実践が見られる。バイリンガルは当たり前であり、食物もアメリカのものもヒスパニックのものも食べれば、中華料理も食べるといった、多元的な生活実践である。また、それを通して、多元的帰属意識も生まれる。例えば先ほど述べたような、二重市民権や二重国籍を彼らが持っているということである。

これまで日本では、トランスナショナリズム概念を「越境」と訳してきた。先ほど挙げた床呂氏もそうであろう。トランスナショナリズムを越境と訳すとき、床呂氏はそうではないと思うが、人類学や社会学の研究者はしばしば誤解している。越境という言葉から連想して、トランスナショナリズムが「国境を越える」ということだけを意味するものと誤解していることが非常に多い。『文化人類学事典』や『文化人類学キーワード』などの関連事項の項目を見てみたが、いずれの場合も、トランスナショナリズムないし越境概念の解説で、多元的生活実践や多元的帰属意識が重要であるという点を無視していたり、そのような現象を対象化する概念であるという点が言及されていない。

私が強調したいことの一つは、トランスナショナリズムの訳語として「越境」という言葉をそのまま使用することはあまり適切ではないということである。なぜなら、越境という言葉を使うと、国境を越えるという意味合いだけで受け取られることが非常に多いからである。私もかつては越境という言葉を、トランスナショナリズムの訳語として使用していた。しかし、誤解を避けるために、今ではトランスナショナリズムという元の言葉をそのまま用いている。実のところ、グリック・シラーらやポーテスがトランスナショナリズムという言葉を再定義し、今もなお使用していることのポイントは、移民の多元的な帰属や生活実践にある。

では、人類学におけるトランスナショナリズム研究の可能性はいかなるものであろうか。最後に、私なりの考えを、バートベックの論考を引き合いに出しながらまとめてみたい。

バートベックは、オックスフォード大学において、トランスナショナリズムに関する大規模な調査・研究プロジェクトを組織・運営している研究者である。インターネット上で情報や成果が公開されているが、つい最近終了した5ヶ年計画のトランスナショナリズムに関する研究を組織・運営し、イギリス、さらには世界のトランスナショナリズム研究をリードしていた人物である（Transnational Communities Programme; URL:http://www.transcomm.ox.ac.uk参照）。バートベックとその他の研究者たちが主張する、トランスナショナリズム研究の可能性を私なりにまとめたものを以下で述べたい。

トランスナショナリズム研究として、第一に、社会形態論に関する研究が考えられる。国境を越えて広がるトランスナショナルな空間の中では、ある種の新たな集団が形成される。そこでは、これまでの国民国家論に基づく集団（国民）や特定の国や地域と結びついた民族（集団）ではなく、国境を越えて拡がるようなゆるやかな集団によって社会が形成されるのではないか。そこに視点をおいた、社会形態論としてのトランスナショナリズム研究があり得るだろう。より具体的には、日本の大企業の海外駐在員が海外から選挙権を行使することが最近認められたが、これは日本の主権（社会）が国を越えて外国にまで拡がっていることを意味する。つまり、日本の社会あるいは日本という国の作られ方が、物理的、空間的な国境に基づいて形成されるのではなく、アメーバのように拡がっているのである。こういう新たな社会のあり方を検討しようというのが、社会形態論としてのトランスナショナリズム研究である。こうした現象は、かつてディアスポラとして研究されてきた。しかし、移民研究の一環として、トランスナショナルな現状を考慮した社会形態論として研究する可能性がある。

二つ目として、これについては先ほどから何度も記しているため、繰り返す必要はないのかもしれないが、個々人の帰属意識、もしくはそれに基づく何らかの文化的アソシエーション形成の問題に関する研究である。トランスナショナルな状況では、帰属意識が二重ないし多重となっており、そこに焦点を当てた研究が可能だろう。

三つ目に、文化の再生産の場としてのトランスナショナリズム研究がある。こうした研究はクレオールやブリコラージュ、異種混交性というキーワードを使ってすでにある程度行われてきている。そういった文化の接触点あるいは、トランスナショナルな帰属意識を持った人々が生み出す文化、例えばポップ・カルチャーや音楽などに焦点を当てた研究の可能性がある。

そして、四つ目には、多国籍企業などの資本の流通経路や経済活動に焦点を当てる研究

が考えられる。これまでとは違ったかたちの人々の動きや社会制度の動きが見えてくるのではないかという意味で、この種の研究の可能性を指摘したい。例えば、トランスナショナルな多国籍企業の資本の動きに伴って、ある種の、新しい階級というものができているのではないかと考えられる。国境を越えたネオ・パワーエリートやトランスナショナルな資本家階級というような、新しい種類の人々の出現に関する研究が出始めている。

資本の流通経路としてのトランスナショナリズムに関連して、二重国籍や多重国籍の問題に焦点を当てた研究も出てくるであろう。というのは、二重国籍や多重国籍というものはただ抽象的な制度として存在するのではなく、ある目的ないし実利がそれには伴っているからである。送り出し国が二重国籍を認める場合には、移民した人々を母国につなぎ止める効果を持つ。つまり移民をし、ホスト国に帰化するような人々にも国籍を放棄させないでおくということは、移民からの送金が期待でき、また、出身国の経済状態が良くなった場合には移民からの投資も期待されるのである。そういった意味で、送り出し国としては二重国籍を容認することには重要な意味がある。

加えて、移民受け入れ国にとっても、二重国籍を与えることには意味がある。これまで帰化するか、そうしなければ外国人としてしか扱われてこなかった移民たちを、出身国の国籍を持ったままで帰化できるというインセンティブを示して労働力として迎え入れる。労働力が不足する先進諸国にとっては、労働力の補充のためにより多くの移民を引き寄せるインセンティブとして、二重国籍は有利に働くのである。つまり、離れようとする移民を再統合しようとする送り出し国と、移民を受け入れ、自分たちの側に引き寄せようとする受け入れ国の相互作用が見て取れる。言うならば移民をめぐる争奪戦のようなことも、資本の流通経路を追うことによってある程度見えてくるのではないか。特に上述の移民による出身国への送金の問題をめぐって、こうした問題は特に見えてくるのではないだろうか。

さて、五つ目として、「政治参加の場」としてのトランスナショナリズム研究が考えられる。というのは、先述のトランスナショナルな状況では、参政権を持った人々が国境を越えた国外にいるという意味で、国境を越えた新たな「政治参加の場」、すなわち、「脱国民国家」が構築されつつあるのではないか、その「脱国民国家」を対象化する研究が考えられるのではないかということだ。また、NGOやNPOの活動を追いかければ、新しいトランスナショナルな社会連帯ないしは社会組織ができつつあるのを見て取ることができると考えられる。政治参加という意味でトランスナショナルな場や空間を見ていくと、これ

までとは違った研究の可能性が見えてくるだろうということだ。

そして六つ目に、「地域性の再構築」としてのトランスナショナリズム研究を挙げたい。もし、トランスナショナルな空間が存在感を増しつつあるとすると、従来の地域やローカリティにはどのようなあり方が可能なのであろうか。グローバリゼーションに対するローカリゼーションということはよく言われることだが、トランスナショナリズムの観点に立つと、それとは違った現象を対象化できるかもしれない。今では、人々が国を越えて拡がるばかりでなく、インターネットなどを使用すると、情報ばかりでなく人と人とのネットワークも地理的な距離にまったく影響されないような空間に拡がることになる。こういったインターネットにおけるトランスナショナルな空間において、いったいどのような新たな事態が生じるのであろうか。われわれにとってなじみの深いアパデュライのような研究者は、それをトランスローカリティと呼んだらどうかといようなアイデアを出している。だが、ではいったいどのようなものがトランスローカリティの特徴であるのかを含め、私が見たところ、トランスローカリティに関する具体的な研究はまだほとんど進んでいない。

5. おわりに

以上、トランスナショナリズム研究をその成立から転換、現在に至るまでの展開をたどり、あわせて、トランスナショナリズム研究の今後の可能性に関して、私なりにまとめた。ここで示したようなトランスナショナリズム研究の課題と展望は、これまでのトランスナショナリティ研究セミナーにおいて、個別の研究事例としてすでに検討済みかもしれない。そうとすれば、ここで紹介したトランスナショナリズム研究の当初の目論みは、すでに達成されつつあると言ってよいのかもしれない。とはいえ、そうした個別の研究事例を、文化や社会の動態研究の全体の流れの中で見るということはこれまであまりなかったのではないか。トランスナショナリズム研究の可能性を展望する上で、本論が少しでも貢献できれば幸いである。

さて、すでに私の結論は出ているのだが、最後に改めて確認しておきたいことがある。日本でも「越境」などとしてトランスナショナリズム研究は進められてきた。あるいはまた、トランスナショナリティ研究セミナーのタイトルにあるように、トランスナショナリティという観点からもすでに研究はなされてきている。しかし、いずれの場合も、その力

点は「国境を超える」という事実に置かれていると言ってよい。それとともに、そうした概念を用いた研究はどれも個別の事例研究が主体である。しかし、私たちは、欧米の人類学や社会学が1990年代初頭にトランスナショナリズムという概念を導入する際にいったい何を問題にしようとしたのかを改めて考える必要がある。すでに繰り返し述べたように、その際の問題はただ単に「国境を越える」という事実ではなく、それに伴って生じる多重的な帰属や多元的なネットワークの存在であった。欧米の研究者がトランスナショナリズム概念を導入するきっかけとなったのは、移民の多重的な帰属や多元的なネットワークを対象化するためであったのであるから、われわれ人類学研究者はもう一度そこに立ち戻るべきではないか。なぜならば、トランスナショナリズム研究の可能性のうちの相当部分がすでに人類学以外の分野でなされつつあるからである。例えば、「社会形態論」としてのトランスナショナリズム研究は、社会学の分野でしばしば取り上げられているトピックである。あるいは「文化の再生産の場」としてのトランスナショナリズム研究、あるいは「地域性の再構築」としてのトランスナショナリズム研究もカルチュラル・スタディーズの分野で盛んに行われている。さらに、「政治参加の場」としてのトランスナショナリズム研究も、国際政治学や国際関係論として研究されている。これに対し、二重帰属や多重帰属などの「帰属意識」やそれにともなう生活実践の問題に関しては、人類学以外の他の分野ではあまり研究されていない。私たち人類学研究者は、他分野でほとんど研究されていないような、多元的帰属意識とそれに伴う生活実践の問題に焦点を当てるべきではないだろうか。それこそが、トランスナショナリズムあるいはトランスナショナリティという概念を人類学においてもっとも有効に活用する道だと私は考える。

［うえすぎとみゆき・成城大学教授］

［参照文献］

1）文献

◇上杉富之　2004　「人類学から見たトランスナショナリズム研究——研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』（成城大学大学院文学研究科）24: 1-43。

◇床呂郁也　1999　『越境——スールー海域世界から』（現代人類学の射程）岩波書店。

◇Basch, Linda, Nina Glick Schiller, and Cristina Szanton Blanc 1994 *Nations Unbound: Transnational Projects,*

Postocolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States, Utrecht: Gordon and Breach Science Publshers.

◇Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristian Blanc-Szanton (eds.) 1992 *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered* (*Annals of the New York Academy of Sciences* vol.645), New York: New York Academy of Science.

◇Kearney, M. 1995, The Local and the Global: The Anthropology of Globalization and Transnationalism, *Annual Review of Anthropology* 24: 547-565.

◇Portes, Alejandro, Guarnizo, Luis E., Landolt, Patricia 1999 The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field, *Ethnic and Racial Studies* 22(2): 217-237.

◇Vertovec, Steven 1999, Conceiving and Researching Transnationalism, *Ethnic and Racial Studies* 22(2): 447-461.

◇Vertovec, Steven and Choen, Robin (eds.) 1999, *Migration, Diasporas and Transnationalism*. Chetenham: Edward Elger Publishing.

2) ウェブサイト

◇The Centre on Migration, Policy and Society (COMPAS) http://www.compas.ox.ac.uk

◇Transnational Communities Programme http://www.transcomm.ox.ac.uk

歴史、アイデンティティ、記憶の巻きついた力◆

ヴァレンタイン・ダニエル
（松川恭子／田口陽子訳）

この、いささか野心的な論文では、暴力・痛み・記憶・歴史とアイデンティティについて、いくつかの問題を提起し、読者の皆さんと共有しようと思う。そのさいに、三つのミクロな出来事に焦点を絞ることにする。それらの出来事は、1963年の12月から1987年の9月のあいだにスリランカで起こったものである。

1. 三つの出来事

1-1. 出来事 1

第一の出来事は、なんどとなく思い出されているものであり、幼なじみのスニル・ジャヤシンハ（Sunil Jayasingha）の記憶にもとづいている。私たちが知り合ったとき、スニルは高原の町ナワラピティヤの高校の事務員だった。彼はデキンダの村で育ち、彼の父親はその村の村長であった。ナワラピティヤの町からデキンダへ続く道は曲がりくねり、ラヴィンズクレイグとよばれる茶農園を通っていた。ある日、やっと5歳になった頃のスニルが父親と一緒にこの道を通って家へ向かっていたとき、スコットランド人の農園監督官がモーターバイクに乗って通りかかった。監督官を見て、スニルと父親の数フィート先を歩いていたタミル人の農園労働者たち（クーリー）は道の端に寄り、実質的には脇にある浅い溝の中まで退いた。そして監督官が通りすぎるときには、タミルのプランテーション労働者たちは右手を額にかざして、うやうやしく「サラーム」と敬礼した。スニルと父親も

◆――本論文は、2004年6月11日にトランスナショナリティ研究セミナー（於大阪大学大学院人間科学研究科）で発表されたものが元となっている。

道の横には寄ったものの、タミル人たちほど端までは避けなかった。さらに彼はその監督官に対して、敬礼も慣習的な「サラーム」の挨拶もしなかった。監督官は一度彼らの横を通り過ぎたものの、モーターバイクの向きをくるっと変えて引き返し、スニルたちの前で突然止まった。言葉を倹約する男であった監督官は、薄い唇の片端を怒りでねじり上げ、スニルの父親の顔を平手打ちにした。父親はよろけて地面に倒れた。モーターバイクの勝利の雄たけびと共に、襲撃者は去っていった。タミル人の労働者が類まれな気遣いと親切心から、スニルの父親が起き上がるのを手助けした。

それは1952年のことで、島国は独立4周年を迎えていた。イギリス人の支配者層は、すでにシンハラ人とタミル人の親英派に取って替わられていた。しかし、茶園のおおくはイギリス企業によって所有されており、管理運営を行っていたのはイギリス人であった。スニルの父親の県から選出されたシンハラ人国会議員の一人も、その親英派エリートの一員だった。ともかく、市民の権利の擁護と村長の名誉をまもるため、スニルの父親はイギリス人から受けた侮辱に対する賠償を求めて、その県の国会議員のところへ赴いた。彼はその政治家に冷淡にあしらわれたが、それは思慮深く計算されたものだった。次に彼は、県判事のもとへ出向いた。スニルの父親と面会したとき、判事は清廉さのため身体が強ばっていたが、訴えを聞いた後は優柔不断さのために硬直してしまった。結局、行政官は彼の説明ではなく、その出来事の「欽定版」を信じることを選んだ。これもまた、思慮深い行動であった。「君子、危うきに近寄らず」("Discretion is the better part of valor.") 〈*訳注1〉ということわざが示す思慮深さである。

この出来事はスニルに非常に深い影響を与えた。スニルはこの話を私になんども話して聞かせ、息子のウパリにはさらに絶え間なくこの話を刻印した。ウパリは、なんども同じ話を聞かされることにとてもいらだって、「お父さん、またあの昔話！」("Thaththa thama araparana kathavamai") と不満を言ったものだ。

一方スニルも、息子はこの話を理解していないし、真剣に聞いていないといらだっていた。「私がこのことをなんども伝えようとしているにもかかわらず、息子はまったくわかっていないのだ」とスニルはいう。実際問題、ウパリはこの話を父親からのみならず小さいときに直接祖父からも聞いていたのだ。彼は、事件は知っているが、詳細については全く覚えていないと認める。むしろ、この話は彼に、父親と祖父が被ったなにか痛ましく屈辱的なものに対するあいまいな感覚を与えるのだ。知識や記憶があいまいだということは、それらが彼になんの影響も与えないという意味ではない。実際に、まさにこの話こそ

が彼を変えてしまったのだ。私が1984年の春に彼に会ったとき、若いウパリは、復讐の念に駆り立てられた、怒れる青年シンハラ仏教ナショナリストになっていた。

復讐は、差異や他者性がきわだっている所でのみくすぶるものだ。ウパリが成人するまでに、ヨーロッパの監督官たちはすでに遠くへ立ち去っていた。そのため、差異があてはめられるべき他者はタミル人だけであった。若いウパリにとって、タミルの女性たちはこの差異をもっとも明確に表す存在だった。パステルカラーを好むシンハラ女性とは異なり、タミル女性は明るい色、とくに黄、赤、そしてさまざまな色合いのオレンジを好む。とくにオレンジ色のサリーはマリーゴールド（センジュギク）の異常な明るさを彷彿とさせた。彼にとって、これは狂気の沙汰であった。差異は区別を明確にし、区別は嫌悪に形を変えた。ウパリが、タミルのプランテーション労働者とシンハラ人の村人とのあいだに明確な違いを認めたところに父のスニルが見出したのは、アイデンティティの分離に他ならなかった。

心の風景（モラル・ランドスケープ）を見渡し、非シンハラ、非仏教徒の不純物をスリランカは浄化しなければならないとウパリは確信するにいたった。回施状の論理と選択された楕円によれば、不純物とはすべてのタミル人を意味した。「すべてのタミル人」とは、ずっと以前に、倒れた彼の祖父を助けたあのタミル人労働者の子供や孫をも含んでいた。

復讐に駆り立てられた怒りが彼の胸中で渦巻いていないときには、彼は押し寄せる空虚、傷つけられた心の風景（モラル・ランドスケープ）の中で支えきれないなにかを感じた。表面が傷つけられていようがなかろうが、でこぼこした山岳地帯を横断面で見ることができれば、だれもが、火成で、堆積して、塊りとなっている変成岩の層を確認するだろう。そこには、特別な慈悲、個人の愛、美しい良識や忍耐の跡が断層のように横切っているのを見つけることができるのだ。

1-2. 出来事 2

第二の出来事は、私が高校生のときにジャフナ半島の北部にあるヴァッドゥコッダイの村で目撃したものである。それは、1962年1月の涼しい夜のことだった。年配の男性、主に学校の先生たちが数人で溝に腰掛けて話をしていた。私は、彼らの会話の内容のおかげで、その日をとても詳しく覚えている。その話は生徒たちを引きつけるのに十分興味深かった。われわれは盗み聞きできるように近くをぶらぶらしていた。それは、生徒のなかでだれがそれぞれの教科で十分な成績をとって「学校の特別賞」を手にする資格を得るこ

とができるのかに関する話題であった。教師の一人が生徒の名前を漏らしそうになったとき、シンハラ人の警官を満載した警察のジープが彼らの前に現れた。そこにいた教師の一人は、地域の治安判事のヴィナヤガムルティ氏であった。ジープが彼らに近づくと、たまたま葉巻をくゆらせていた判事を除いて、全員が立ち上がった。ジープはけたたましく音を上げて停止し、兵士が判事をジープのところまで来るように呼びつけた。将校は判事に名前を尋ね、判事は迅速にそれに答えた上で自らが治安判事であるという事実も付け加えた。将校はジープから降りてきて判事の顔を平手打ちし、次に軍の将校を見たときには必ず起立するように告げた。兵士たちは、こうしたテロ行為に習熟しており、いいタイミングで実行したが、それでもときたま行なわれるにすぎなかった。しかし20年後には、かつては軍隊のメンバーが独占していた暴力的行為は、はるかに一般的に共有されるようになり、地域のゲリラ兵士や、公式・非公式な民兵、さらには一般市民までが行なうようになっていた。1962年には、そういった行動、とくに市民によるものに対して、居合わせた市民は衝撃を受けて沈黙したものだが、20年後には、同じテロ行為が、見物人の拍手喝さいを受けるようになっていた。

ヴィナヤガムルティ判事に対して起こったような事件は、続く20年間に渡って頻発することになった。イーラム（「タミル・イーラム解放の虎」、Liberation Tiger of Tamil Eelam, 以下LTTE）を設立し、不正に対して復讐するために武装したタミルの兵士たちのことを、おそらくヴィナヤガムルティの子どもたちと呼べるだろう。彼らはお互いに解決も和解も見出せなかったが、現実は耐えられないと知った上で生きていた。ヴィナヤガムルティ氏は、軍隊が彼の村に火をつけた日の前日に亡くなった。彼は幸運だった。息子が井戸に隠れている間にスリランカ政府軍の兵士によって撃たれるのを見るまで生きていなかった。それに息子の体が、息子と歳の変わらない若いシンハラ人兵士たちによって、丸太のように引きずられ、なにか黴のようなものに覆われた遺体が、火にかけられるのを見ずにすんだのだ。

1-3. 出来事 3

第三に、最近の出来事を、私の著作『焼け焦げたララバイ』から引用する［1996: 183］。

> インド兵が平和維持のためにジャフナにやってきたとき、ショーバは10歳だった。私がシアトルで彼女の弁護士と共に彼女に会ってインタビューしたとき、彼女は13

歳だった。彼女によると、ジャフナの市民が花輪をもって歓迎したインド兵たちは、数ヶ月のうちにイーラム人民革命解放戦線（EPRLF）に加わっている者を除いて、全市民の敵となった。EPRLFは、社会主義的平等を原則とした国家の樹立を構想した諸組織のなかで、抜きん出た存在だった。平等原則とは、すべてのカースト、男女、あらゆる地域のタミル人とシンハラ人にとっての平等である。しかし、インド軍の上官から銃と命令の力を与えられると、とくに下層の幹部は権力に酔いしれ、市民を威嚇しながら町をパトロールした。EPRLFの将校が車に乗ると、他の乗り物は道の端に寄せられなければならなかった。敬意を示さないものは連れていかれて罰せられたし、その場でぶちのめされる事もあった。公にEPRLFを支持していない両親を持つ子供たちはとくに、制服を着たEPRLFメンバーたちと出くわすことを恐れていた。彼らは普段、道の端やわき道を選んで自転車で通学していた。ある日、ショーバと友達がアヌシュヤという名前の女の子の言った冗談に笑いながら自転車で学校から帰宅していたとき、EPRLFの指揮官とその部下たちがやってくるのに遭遇した。冗談を言った少女はショーバの親友で、クラスの人気者でとても賢かった。ショーバと友人たちは武装兵士の姿を認めると、恐怖でギョッとし、自転車のサドルから飛び降りた。しかし、アヌシュヤだけは、すぐに自転車を道路の端に向けたものの、驚きのあまり自転車にまたがったままで、さっきの浮かれ騒ぎの笑顔も顔に凍りついたままだった。部下のひとりがアヌシュヤを自転車から引き降ろし、他の男が自転車を道の端に投げつけて打ち壊した。指導官は、アヌシュヤを押さえつけていた男に、彼女を畑に連れていき地面に跪かせるように命令した。ショーバと友達がその恐怖の場面を見ている間、指導官は彼女たちに尊敬、革命、そしてEPRLFについて講義した。そして跪いた少女の方に向き直って、首を撃った。ショーバは、吹き飛ばされた動脈がどくどくと血を噴き出しているのを見た。指揮官は銃をホルスターに収めて、「これを教訓にしろ」といった。子供たちは、パトロールを再開した兵士たちに聞かれるのを恐れて、黙って涙にむせびながら自転車を押して家に帰った。

2. 権力の詩学

イギリスの詩人、ジェフリー・ヒル（Geoffrey Hill）による「マーシア讃歌 Mercian Hymns」

と呼ばれる長編の詩がある。これはある王、イングランド中西部の中世の王国マーシアの王についての詩である。王の名前はオファ（Offa）といい、彼の統治は8世紀半ばから9世紀半ばまで続いた。彼はその当時自身で作り上げた伝説となり、イギリス人の想像の世界に今なお生き続けている。そこでのオファは、イングランド中西部の卓越した守護神とみなすのが、おそらくもっとも有益な位置づけだろう。彼の支配は8世紀半ばから20世紀半ばまで続いたし、それ以降も続いている。これは伝説と神話の創造であり、オファは権力の追求のために伝説を利用したのだ。これからオファが若い生徒として記述されている幾つかの節を引用しよう。

> ガスタンク、原野の中の赤褐色。水車の堰、静かな泥灰土の池。うなぎの群れ。蛙の卵。彼はかつて枝と半分のレンガでその一群を攻撃したのだ。そして静寂と沈黙に背を向けたのだ。
>
> クールレッドは彼の友達で、戦闘機が失われたあの日の後ですら、友達のままだった。複葉機だった、時代遅れでかけがえのないもの。重くて無愛想な銀の2インチ。クールレッドはそれを回転させる。ゆっくりと教室の床の穴を通って、ねずみの糞と硬貨の中に。
>
> 放課後、彼は恐怖でにやにやしているクールレッドを古い石切り場の下に誘って、金をまきあげた。そしてクールレッドを見捨て、彼は何時間ものあいだ、静かに独りで、うち棄てられた彼専用の、アルビヨンという名の砂トロッコで旅をした。

うなぎと蛙の一群への、また「恐怖でにやにやしている」友達のクールレッドへの攻撃という男子生徒ヒーローの暴力行為により不吉な魅力を喚起した後、詩人は少年の激しく荒廃した孤独な力を、ある種の想像上の創始者、もしくは神の出現として賞賛している。

2-1. 幼稚な権力

これら三つの物語に共通するいくつかのテーマがある。第一には、三つの物語すべてにおいて、権力の行使は、不安と未熟さから成るはかない混合物であることを暴露して

いる。スコットランド人、シンハラの警官、そしてEPRLFの指導者は、異なったオファ王の出現である。幼稚な残虐性の要素は、当時のスリランカ共和国の大統領、J.R.ジャヤワルダナ氏においても見られる。彼は自らをプラクママバフ大王の血筋を引く、第183代のスリランカ君主だと確信していた。彼の祖先は数世代さかのぼれば南インド沿岸のムスリムだといううち消しがたい噂にもかかわらず。当時の首相で、ジャヤワルダナ氏の後にその地位をつぐことになっていたプラマダサ氏もまた、幼稚な畜生のように権力を危険に行使していた。彼は実際の、あるいは想像上のライバルたちを暗殺しただけではなく、1980年代後半と1990年代前半には、JVP（Janartha Vimukti Peramuna, 人民解放戦線）に属していると疑いをかけたシンハラ住民の地域で恐怖の治世を引き起こした。JVPはウルトラ・シンハラナショナリスト政党でプラマダサの政策に反抗しており、彼ら自身でも多くの暗殺に手を染めていた。プラマダサもまた自らの低カーストの出自を恥じており、上流階級の出身であるように構成された自伝によって、躍起になって出自を置き換えようとしていた。あの男子生徒、オファが、アルビヨンといううち捨てられた砂トロッコに乗って一人穏やかに旅に出たとすると、ジャヤワルダナとプラマダサは、彼らの遺棄された想像力と実践のなかで、スリランカ国民の権利の上に蹄鉄をつけてまたがったのだ。

2-2. 認知への欲求

第二に、一見したところでは、三つの物語はヘーゲルの主人と奴隷の寓話を体現していると思われる。それゆえに認知の獲得の重要性、もしくは、奴隷に自らの権力が間違って認知されるのではないかという支配者の想像上の不安を示している。この寓話によると、ふたつの等しい意識が初めて偶然に出会う。出会いの前には、それぞれの意識はその世界において、問題視されることのない、それゆえに疑う余地のない視点を保持していた。出会いの結果、彼自身の世界の見方について疑いが生まれ、他者による確認が必要となる。こうして第二の人物が第一の人物の見方を唯一の正しいものとして認知することが要求される。第二の人物も、自らの見方を第一の人物によって真実であると認知される事を要求する。しかし、ふたつの見方は同形ではありえないので、その差異はふたつの意識の間で、疑う余地のない優位性をめぐる争いが生じ、死を引き起こす。勝ち残ったほうが支配者になり、勝ち残った意識が真実だと認知することで敗北を認めたほうが奴隷になる。しかし、これはあまりにもおおきな犠牲を要求する勝利である。なぜなら、ここで追求され

た種類の認識は、真実で快く応じるような、あるいは自発的な、人間的認知であるべきだからだ。拘束の下での認知は、自由に到達する認知ではなく、それゆえに最も高い段階の認識、「人間的」な認識であるとは認められないし、単なる獣の認識でもない。この他者の認識の真実性に関する不確かさは、まさにヘーゲルが「死して倒れるまでの戦い」(“the battle unto death”) と呼んだものに帰結するのである。

ショーバによって語られた三番目の出来事において、死して倒れるまで戦いは、まさに文字通り起こったことである。そこにおいて、支配者が図らずも手にしたものは死体の認識のみであった。ことの本質は、文字通り、すべての立場 (スリランカの軍隊とタミルイーラム解放の虎) の殺人が、手にしているものである。それは物理的な死者、あるいはさらに不吉なことには、道徳的な死者による権力の認知である。これは、認識が全くないのと同程度である。もちろんヘーゲルの寓話においては、避けることができないとしても、討論や議論による弁証法的な戦いによって、この逆説的な結末は変えられる。それらの戦いはしばしば儀礼の形に具現化され、殺人や死を防止するものと想定されている。

上記の寓話によってわれわれは記述された三つの物語 (とくに一番目と三番目) をある程度理解することができるが、いくつかの克服できないアポリアが生じることも避けられない。もし、その限界をしばし括弧に入れておくことができるなら、主人と奴隷の弁証法が機能するある道筋を発見できるだろう。一番目と三番目の出来事において、権力の認知と他者が権力を間違って認知する事への不安は、空間の専有のイメージに支えられている。支配者のために、人は道を開いて通路をあけ、道の最端により——溝にまで入って——支配者がそこを通るのに必要な空間以上のものを引き渡す。それらは権力と不安の、疑いと不確実性の、権威と権威の喪失への恐れを表示するイメージである。

支配者は、権力や地位や権威の安全が空間によって保証されていないと感じるとき、屈辱を与えるという手段に訴える。初めのふたつの物語において、屈辱の手段とそれに対応すると想定された賞賛は、平手打ちによって達成された。南アジア全体において、平手打ちは蹴りについで屈辱を与える力を持っている。平手打ちを受けたものは文字通り「面目を失う」。学校の教師は以前 (そして場所によっては今でも) 逸脱した、あるいは行儀の悪い生徒を平手打ちしたものだし、両親は子供を、警官は容疑者を、そしてときには夫が妻を平手打ちする。それゆえに、打たれた者は、一撃で、子供や犯罪者や女性に変えられてしまうのだ (もしその人がすでにそうではなかったとしたら)。

2-3. メモロペイン (Memoropain)

第三に、痛みと痛みの記憶は存続し、世代から世代へと継承される。ときには危険に修正された形で現れ、心理学的に、または心理社会的な抑圧、転移、投射の過程によって変形されてしまっている。父親の罪は息子に受け継がれるという、聖書の詩句に皮肉なねじれを加えれば、父親がこうむった痛みは息子に受け継がれる（そして孫にもということになる）。ヴィナヤガムリティと軍人やウパリジャヤシンガの祖父とスコットランド人のケースでは、その罪の現われは痛みと記憶、正義への探求からなる複合体である。そして、実現不可能な文化的企図において破壊的なナルシシズムの形をとり得るのだ。

厳密な意味で、われわれは過去を記憶していない。むしろ、われわれが覚えているのは現在である。つまり、われわれは過去から現在の状況にまで継続して生きているものを「覚えて」いるのである［Fabian 1996］。われわれは過去を考え、過去について学ぶ。つまり、われわれはある批判的な手順を元にして、過去を構築し、また再構築しているのだ。これを示すモットーとして、「今を記憶し、過去を思え」（“Remember the present, think the past.”）がある。「私は覚えている」（Je me souvirns：ケベックのモットー）が関連しているのは現在の主観性であり、思われる過去ではない。ほとんど常に、歴史的理解が「回顧（リメンバリング）」として描かれるとき、われわれは現在における、またひとつのもっともらしい集合的アイデンティティを促進させる試みが進行中であることを想定することができる。

しかしながら、痛み、本当の痛みの理解は、実際に世代間に受け継がれる。そのうちになにか新しいものと結合した痛みは、「メモロペイン」（memoropain）という新造語を必要とする。そして、フロイトがわれわれに教えたものがあるとすれば、痛みの記憶は観念的存在ではなく具体的実践だということだ。痛みの記憶と記憶の痛みは相互に内在し、レイモンド・ウイリアムズが感情の構造と呼んだもので強く結びつけられている。厳密には、これを「痛みの記憶」と呼ぶことで、たとえ「痛ましい記憶」としてもなお、構文上痛みと記憶が二つの独立した対象物であるかのようになってしまう。私の主張ではそれは一つである。ウパリにとって、彼のメモロペインは抑圧によって形を変えられ、正義、それも復讐する正義を伴った強迫観念を提供することになった。すべての外国人（彼にとってこれは主に「すべてのタミル人」を意味するのだが）を排除し、スリランカが再び純粋なシンハラ人／仏教徒の国家になったとき、痛みが癒されると、彼は信じていた。ああ、無情にも彼の記憶は深みにはまり、安息を知らないのだ。

2-4. 屈辱への復讐、ナルシシズムと文化事業

第四に、彼らの父親の受けた屈辱に対する復讐を果たそうとする意思が、シンハラナショナリズムの場合と同様に、イーラムの事業の推進力となった。ウパリの事例は多くの点でもっとも明白である。一方で、彼は祖父の屈辱の痛みを共有し、負担していた。しかしもう一方では、彼自身の父親、スニル・ジャヤシンハの痛みを否定し、その痛みに対する権利をけなすことで傷つけている。私はここで十分に詳細な議論を展開する時間がないが、この父親に対する行為は父親殺しの行為と同等であると主張したい。人は罪を犯さずして、文化事業に対する深い情熱的な愛着を育てることはできない。ハイパー・ナショナリズムとは、そういった文化事業である。それは、自己愛的要求に仕えるための罪悪から生まれた文化事業である。祖国の分離のために戦っているタミルの軍事的強硬派もそれ程違わない。彼らは父親の世代に用いられた、非暴力的抵抗という政治的方法を軽蔑するだけではなく、その世代に属する幾人かの個人を暗殺するという地点にまで至ってしまった。

ウパリは、自らのアイデンティティを父や祖父の救いのなさに見出している。父の無力を軽蔑し、祖父の無力に対しては復讐心を燃やし、頻繁に心の風景（モラル・ランドスケープ）を眺めては、彼を無力にした敵を探した。自己同一化の過程において、彼もまた克服しなければならない無力さを共有するようになる。彼は彼の祖父と一方通行の協定を結んだ。それゆえに、かれは復讐の役割を演じることになったのだ。無力に打ち勝つ事業は、敵を追い求めることから始まった。そして、実際の敵を位置づける事が出来ないうちは、身代わりを見つける。身代わりが単独で弱そうであれば、彼もしくは彼女を殺すのだ。そしてウパリと同様に、シンハラ人の政治家も、祖先に多大な屈辱を味わわせた「敵なる異人」に対していかに行動するかという事に関して、過去の亡霊と協定を結んだ。もし敵なる異人が見つからなかったり、あまりに遠くにいて困難なときは、仲の悪い隣人か国内の異なる民族集団が対象となるだろう。復讐の事業が始まってすぐに、いかにそれを終結させるのかという答えのない問いが生じる。行為の一部を占めるような問いである。そしてこの問いは、スリランカの政治家が、そして国自体が予期していないものだった。

復讐の事業をヘーゲルの弁証法と関連付けるために、二番目の事例に戻らなければならない。ここでは、ヴィナヤグムルティ氏の子供たちや孫たちは、彼らの「父と祖父の」痛みと屈辱に対して復讐する。それは、奴隷を見つけることが可能な至るところで、その奴隷に対する主人になることで行われる。もし、それらの奴隷が以前の主人であるなら最高

だが、そうでなければ、無邪気な男子生徒が犠牲になるだろう。暫定的にではあるが、こうした弱者は、不安定な支配者の膨張するナルシシスティックな自己のための手段を与え、場所を用意する。ここでは、タミル人兵士の戦いを必然のものとしたイーラムの文化的な事業そのものでさえも、失われているか、あるいはその文化事業自体があまりにも多くの余剰となってしまっているために、一方で罪を克服する事業が行われている時でさえ、もう一方ではさらなる罪のための地平が広がっている。

しかしながら、イーラムのまさにそのような事業に対する、あるいは国家に対するショーバの応対の仕方は、ここでは対照的な教訓である。彼女は「ネーション」を文化的対象であり、危険な情熱的愛着を育成する、あるいはそれによって育成されるものとして見た。そして、最も不吉な事には、膨張するナルシシズムが駆り立てられるものとして見ているのだ。それゆえに、彼女はそこから逃げ出し、二度と出会わなくていいように願っているのだ。

2-5. 主体の構成

第五に、植民地主義と／あるいはナショナリズムの制度は、特定の主体——彼／彼女自身を植民地主義とナショナリズムの目的に合わせて構築するような主体——を構築するために痛みを負わせた。しかし、痛みによって構成された自己は必ずしも構成された自己ではない。それは扇動された主体・自己であり、いくつかの軌道と目的論を結果としてもたらすかもしれない。もっとも重要なのは、もし、痛みが制度（植民地主義であれナショナリズムであれ）によって自己を構築するために使われるとすると、痛みは権力と権威の制度から自己を引き離すことにも使われるということを覚えておかねばならない、ということだ。

私がこれまで述べた簡潔な所見において強調したいのは、負わされた痛みの結果である。この結果は、すでにウパリの祖父とイギリス人の話のなかで紹介したように、まさに複合体である。つまりそれは、記憶、回顧、正義の追求から成り立つ複合体であり、代用品として働くような文化事業を通して、破壊的なナルシシズムの形をとり得る。

3. ヘーゲルの寓話における問題
——支配者にとっての良い診断、「奴隷」にとっての悪い解決法

ヘーゲル自身による主人と奴隷の寓話で提示された問題の解決法は、合意の袋小路で、弁証法が頂点に達するところでもたらされる休戦である。袋小路においては、奴隷が主人を必要とするのと同様に（それ以上ではないにしても）、「彼の」世界を保持するため、主人が奴隷を必要とするという啓発された認識が訪れる。同意は（社会的）しきたりにまとめられる。そして、いつかは慣習や儀礼や習慣に固定化されるしきたりが、社会の存在を可能にするのである。ヘーゲルからデュルケームへの道筋はまっすぐに繋がっており、同じくメモロペインとその軽減についての問題に直接的影響を持っている。デュルケーム派ならば、集合的意識のさまざまな表現によって痛みの克服が可能であるとみるであろう。そこでの社会や共同体は、そのような集合的意識の貯蔵庫である。この論理は「国家の儀礼」と同様に国家をも含むところまで拡大されるであろう。そこには表通りの儀礼と同様に戦争の儀礼も含まれる。しかしながら、集合的意識はなにか他の似たように構築された意識によって、そのように認知されなければ、なにものでもない。

自身で選択したのであれ、偶然であれ、彼／彼女自身を、社会的に合意された解決策を免除されていると見なす人は、デュルケームのみならず、彼の知的祖先であるヘーゲルと、その主人と奴隷の寓話に対して問題を提起する。痛みの犠牲者の中にも、そのようなカテゴリーに属する人々がいる。そのような痛みの犠牲者に関して特別なのは、彼らもまた社会秩序の外部からひとつのパースペクティブを獲得し、そうすることで、権威を相対化しメモロペインそのものを克服する異なる方法を追い求めている点である。それはつまり、ヘーゲルの認知の構造に基づいてはいないのである。

ヘーゲルの認知構造に組み込まれた問題とそこで提供される解決法の典型例は、現実の、もしくは潜在的な紛争が存在する多民族共同体のアイデンティティ・ポリティクスの中で入手できる諸々の万能薬である。ヘーゲルの視点からすれば、認知への欲求は、（集合的・個人的な、多数派・少数派の）すべての意識に共有された欲求である。多民族共同体においてはとくに、アイデンティティの認知は最も危機にさらされているものである。これぐらいのことは、認知規範の構造において自明である。

問題なのは、アイデンティティが（それが存在する限りにおいて）通常の人生過程にお

いては、決して固定されていないということである。しかしながら「アイデンティティの危機」は、それを定義し境界を定めると共に、恒久的なアイデンティティを創造しようとする傾向にある。現代世界においてはとくに、アイデンティティは流動性の中にある。メディアにあふれた世界、とくに西洋においては、毎週新しいアイデンティティに着替えたい人にとっても十分なアイデンティティが存在している。そういった世界において、ダイナミックな流動性の中でのアイデンティティの要求やディレンマに対応するには、ヘーゲルの認知構造は非常に鋭敏でなければならない。少数派の文化の新たな形成は、こういった状況においてはさらに、気づかれることなく裂け目に落ちることが多い。これは、アメリカのような移民社会と同様に、スリランカにおいても起こり得ることである。この可能性を恐れる集団は、アイデンティティを慣習や厳かな古代神話に対する主張をもって安定させようとする。生成しつつある、ダイナミックな文化は（ほとんどの文化はそうであるが）、文化としてミイラ化されうる。自由主義的な政体においては、多文化主義は「うやうやしく」表通りのパレードで、伝統的な祭で、服装や料理において展示される。多くの少数派集団自身（すなわち、タミル人）も、このミイラ化の共謀者である。その成員によって具現化された文化の未来の方向性は、無視される。固定されて沈黙したイメージ、すべての生ける世界から永遠に引き離されたものに対する、ただ礼儀正しいだけの注目を好むことによって。そこで参照されるのは、卓越した伝統というよりもむしろ、伝統の卓越である。

認知を勝ち得た際にでも、そうした認知は寛容の形をとり得るだろう。少数派文化に対する寛容さ、たとえ関心でさえあっても、望ましくない属性や結果——最も一般的なのは、永続的な文化的ヒエラルキーと自尊心を傷つけるような偏見である——の多くを容易に包み隠してしまえる。最も寛容で自由主義的な政体においても、少数派の声は耳にされるが聞かれず、聞かれたとして理解されず、理解されたとしても真剣に受け取られず、最悪の場合は、間違った理由において真剣に受け取られ、それゆえに即座に打ち捨てられて組織的に破壊される。要約すると、われわれが最後にたどりつくのは、ある種の庇護者ぶった多数派の慈善行為なのである。

そういった懸念に向き合ったとき、ヘーゲル派の人々は難なくこのような落とし穴を認めるが、すぐさまそういった危険にうまく対処することを約束する改良を付け加えるだろう。固定されたアイデンティティの刑に処される事は起こりうるが必然ではない、とヘーゲル派の人々なら言うであろう。すべての集合体の成員は、国によって、あるいはさらに

ひどい場合は当該集団の政治的指導者によって、アイデンティティを強制的に割り当てられるのではなく、自由で動的で多様なアイデンティティを創造・再創造することが可能でなければならない。チャールズ・テイラーはこの自由を、集団が彼ら自身のアイデンティティを定義するために必要な精神的・倫理的な空間だとし、この自由の承認は、自由主義政治の核でありうるし、またそうでなければならないと述べている。

さらに、自由主義的なヘーゲル派のアイデンティティ・ポリティクスの視点から、LTTEのような武装集団による暴力的な解放紛争を避けるタミル人は、アフリカ系アメリカ人の故国に対する想像力の先例に従う事で、暴力以外の道を受け入れることができるかもしれない。詩人であるエメ・セゼールのような個人によって表現されたネグリチュード運動の指針は、アフリカを地理的な空間でも帰るべき故郷でもなく、想像の場であり、精神の状態であるとみなしている。スリランカのタミル人もまた、イーラムを回復可能なアイデンティティの場所にとっての複雑で強力な比喩であり、抑圧から解放された未来を想像するための手段であると見なすことができるだろう。そういった想像の故郷はタミル人とその他のディアスポラ的な集団にとって、類似した目的を与えることができるだろう。

しかしながら、類似した経験を共有し同じような選択をしたショーバのような人物は、ヘーゲルの認識構造に適合させることができない。彼女たちは単純にそれに合わないのだ。さらに、彼らは、ヘーゲルの主人と奴隷の物語から現れるいかなる解決策も主人の解決策であるということを見抜いている。実際彼らには、政体の中でも最も自由主義的な人々が演じる承認の弁証法が、この点において最も狡猾であることが分かっている。自由主義的な人々は、単に少数派のアイデンティティを承認するだけではなく、その真正性におけるアイデンティティを認めることに熱心であるからだ。そして「真正性」(authenticity)は、文化の停滞状態、文化的対象の博物館化や文化事業の自己愛的な物神化に専心する保守的な指導者と同様に、多数派の覇者の特性である。

ショーバは「国家–民族(ネーション)」を文化事業であり、文化の対象だと見なしている。そして、その「国家」がはぐくむ非常に危険で情熱的な愛着(あるいは後者によって前者がはぐくまれる)、そしてもっと不吉なことに「国家」が触媒となりうるような膨張した自己愛について分かりすぎている。社会的なものは認知構造に基づいているのだから、タミル人国家の形をとる社会的なものが、すべての痛みを癒すと考えるデュルケーム派のタミル人同胞と見解を共有してはいない。あらゆるデュルケーム派は、とくに儀礼を痛みの「征服者」と見なす。そしてこの論理は「国家–民族(ネーション)」の儀礼を含むところまで拡大される。しかし

ながら、表通りの儀礼と同様に、戦争の儀礼もまた国家(ネーション)-民族儀礼の真正なる一部分なのである。どちらの儀礼も認知を追い求める。しかしながら痛みの犠牲者は、社会秩序の外側からの視点も獲得し、そうすることですべての社会的権威やかれらの意識をも含むすべての権威を相対化する。犠牲者の中には、そういった国家(ネーション)-民族儀礼によって約束された社会秩序に再統合されることを拒む者もいる。ショーバを含むそういった人々は、社会秩序の外側に立ち、すべての権威を相対化する。さらに、彼女たちは認知されようともしない。それは、アイデンティティ・ポリティクスの中心をなすのであるが。すべての少数派は認知を求めるだろうか。もし、そうする者があっても、それは必要なのだろうか。だれの認知を彼らは求めているのか。多数派による認知だろうか。

ヘーゲルの弁証法では、二つの等しい自己意識がお互いによる認知を求める。一方が主人になり他方が奴隷になるや否や、後者は前者の認知を求める。社会秩序の中で主体がそれ自身のための認知を求める事態に至るような、さらなる並べ替えが起こる。そしてもし、すべての社会秩序がそうであるように、社会秩序が最終的に多数派と少数派で構成されることになれば、少数派がおそらく自らのために「選ぶ」であろうアイデンティティの選択可能性を決定するのは、多数派である。ヘゲモニー的ななだめすかし(指導ではないにしても)によって、少数派は自分のアイデンティティは自分自身の選択であると信じるようになる。自由主義的政治に備わった善意の保護の説得力とはそのようなものである。しかし、多数派は基本的に、認知しないことに関心を持っている。少数派が自らの選択を主張するならば、そこで救い出せるのは、たかだか寛容的、保護的な不承不承の認知であろう。そして、これらすべての事例(非認知、寛容、保護)において、少数派のアイデンティティへの理解はない。それでは、なぜ認知は必要で、認知によってなにが与えられるのか。これはなぜアイデンティティが政治へのスローガンになるのかを問うもうひとつのやり方なのか。われわれは、アイデンティティなしで政治を考える事ができるのだろうか。もしそうだとしたら、結局認知を求めるのはなぜか。なぜ認知は主体のアイデンティティの条件でなければならないのか。主体は主体であるために認知を必要とするのか。そもそも、主体とはいったいなんであるのか。

4. パース＝ニーチェ的代替案

顕在的あるいは潜在的にかかわらず、民族間の暴力を考えるうえで、別の見方がある。ショーバの話はそういった可能性を明らかにしている。私が考える代替案とは、パース的洞察とニーチェ的洞察の理論的複合物である。

パースは、自律した個人というものを、たかだか人為的なものだとみなした。人間の個人というのは、意図的な思考の起源ではないし、根源としての行為主体（エージェント）でもない。デカルトの思考する主体、あるいはタブラ・ラサとしてのコギトも、自律した平等な存在としてのヘーゲルの二つの意識も、フィクションである。人間は習慣の束でしかない。動的で、移ろいやすく、頑固で、弱くて、激しく、一過性であり、相対的に永続性はあるが、はかない習慣の束である。この宇宙のすべての存在は、有機物も無機物も、粗雑なものも繊細なものも、概念も物体も、すべては単なる習慣の束である。しかしながら人間は、良きにつけ悪しきにつけ、習慣を変化させるという習慣を持つことで区別されている。これはしかし、数多くの習慣の中のひとつである。パースのとらえ方は、デカルトの意図的で自律した個人やヘーゲルのふたつの平等な意識からは程遠いものである。もし、平等性というものがあったとしても、それは単に偶然である。行為主体（エージェント）の概念は、この「習慣を変える習慣」の記述としては、あまりにも崇高すぎる。場所と時間、習慣の諸力と機会が収斂し、人間の習慣変化の習慣を活性化させるとき、われわれはそれを行為主体（エージェント）的モーメントと呼ぶことができるだろう。幾何学において点がそうであるように、個人としての自己は便利なフィクションである。自己とは連続体である。連続する自己を個人の意識として考えることは一般的であるが、それは危険な誤解を招く哲学的な便宜性である。ニーチェはこの点に関して、パースにもろ手を挙げて賛同しただろう。

ニーチェの説明では、行為主体（エージェント）としての主体はさらに控えめに扱われている。ニーチェにとって主体そのものは、生産的、あるいは破壊的な、活性化あるいは沈静化するフィクションに過ぎない。主体は、結果を引き起こす行為主体（エージェント）でも、認知という他人の行為主体性（エージェンシー）の産物でもない。ニーチェの観点によると、主体はもう一方の主体の認知によって現れるものではない。個人的であれ社会的であれ、主体に内面性はない。主体は多様な活動あるいは反作用的力が働く結果であり、この作用の結果生じるものでしかないといえるだろう。そこには参加する行為主体性（エージェンシー）は関わりがない、あるいは行為主体性（エージェンシー）とは、

この作業の結果生じるものでしかないといえるであろう。そういった諸力は、人間を超越するものでも、人間に従属するものでもありうる。それらの力が生み出す効果によって、世界のなかで人間を位置づけることによって、人間存在が可能になる。この世界では、人間がいるにもかかわらず、人間の周囲で、人間の内部で、そして人間として、諸力が働いているのである。

パースは、人は記号（生きた記号と死んだ記号の寄せ集め）だと考えた。パースにとって象徴とは真の記号である。なぜなら、その象徴を記号として構成する、表象、客体および解釈項（interpretant）の三者関係は、記号の意味する力、すなわち記号そのものを失うことなしに、二者関係や単一の要素には還元されえないからである。彼のよく知られた記号の三分法における残りの二つ（指標とイコン）は、真の記号ではない。なぜなら、それらはたとえ、解釈項と客体が失われていた（イコンの場合）としても、あるいは解釈項のみが失われていた（指標の場合）としても、それらの意味する潜在力を留めているからである。これは以下のことを意味する。人は、主に象徴という様式において記号であるから、解釈項は、習慣変化の習慣を所有する唯一の存在である人間にとっての真髄である。パースは解釈項を記号学や記号行動（サイン-アクティヴィティ）における意味作用の効果（significant effect）だと定義づける。われわれはパースとニーチェが、（人間）主体を諸力の示差的作用（ニーチェの場合）、あるいは記号学や記号行動における示差的作用（パースの場合）だと見なしている限り、ふたつが収束している様をみることができる。

ニーチェにとって、主体は行為と情熱の様式であり、出来事の表面上の触媒作用である。それは主体がコントロールしないが、参加してはいるような出来事であり、その出来事が、歴史を創り、したがって主体が持つのかもしれないどのようなアイデンティティでも作り出すのだ。似たようにパースにとっては、人間主体や集団のように象徴的に構成された存在は、記号の大海の中で、単に高密度に構成されたひとつの複合的記号にすぎず、よって、主体が持つに至る歴史やアイデンティティのすべてを生み出す潮の満ち干きを管理する者としてよりは、せいぜい意味の大海の中の当事者のひとりとしての存在でしかない。これらの（人間）主体は、解釈項の記号の過多からできており、その中の感情的・動的解釈項群は、ニーチェの情熱と行動の様式にそれぞれ対応する。パースはこれに論理的解釈項を付け加えており、これはニーチェ側に見出しえない対応物、思考の様式を提供するであろう。

それゆえ、人間の生活において抑圧は、単純に認知されないアイデンティティである

とは理解されえないものである。もしも、われわれがアイデンティティの概念に関わる気をもつというならば、現実の動的な形と関わりあおうではないか。それは、実践（ニーチェ）、もしくはプラグマティクス（パース）においてのみ可能である。ニーチェにとって、人は人のすることであり、その人がやってきたことの歴史が、その人の性格を構成する。そして、人が成し得ること、あるいは成すであろうことは、予期できない開かれたものでしかない。パースにとって、人の概念の考えられる実際的な結論が、この世界においてわれわれに意味を与え、存在を構成するものである。このアイデンティティは、いかに人が自らを表象するのかとはほとんど関係なく、人が生み出し参加する過程と行為がすべてなのである。

認知のアイデンティティ・ポリティクスに捕らえられた人々は（アイデンティティ・ポリティクスの理論家であれ、実践家であれ）、習慣変化の習慣の行使のため、時間と空間によって入手可能になる主体的なモーメントに気づかず、行為主体性（エージェンシー）という幻想のなかで、受け継いだ思考と行為の習慣を用いているだけである。ショーバのように、合意による習慣という社会秩序の外側からの視点を得た、痛みの犠牲者は、権威（合意された権威ですら）を相対化することができ、メモロペインそのものに打ち勝つ機会を得る可能性が高いだろう。

おそらく、以下のような政治を実践するほうがさらに生産的だろう。個人、集団、制度間あるいは、個人といかなる集合的行為主体（エージェント）間で、好まれているから、あるいはたとえ唯一利用できる様式だからといって、認知を求めて暴力的な交渉が目の前に現れるのではないような政治である。そうではなく、そのモーメントを警戒し、はびこる力（超人間的なものと準人間的なものの両方）に敏感な闘争としての政治を理解し、実践するということである。はびこる力とは、習慣変化を支持し、調整しうる力である。真正的なアイデンティティの認知は、平等な尊厳を保証しない。平等な尊厳は、アイデンティティを形作る潜在能力に依存している。抑圧を、単に認知を求める諸アイデンティティとみなすことはできない。「アイデンティティ」、もし、そのようなものが考えられるとして、それらは、実践・過程・行為としてみなされるべきだ。人は、そのような行為を生み出し、関わりのある全ての人々に対して、そのような実践がもたらしうる結果に目配りしながら、その行為に参加するのである。

5. 結論

人種主義、植民地主義、民族主義、そして多数派主義によって引き起こされた痛みは、もちろんアイデンティティの非認知の起源として位置づけることができる。今日のアイデンティティ・ポリティクスの多くは、このヘーゲルの寓話に基づいている。この寓話は痛みの原因の診断だけではなく、それを癒す方法も提供している。この寓話の論理によると、もし原因が認知の不在に見い出せるなら、その解決法は認知の中にあるとされる。さらに、集団的意識から生じる認知が、認知における源としては最良だということも示されている。これはさらに、より根本的な問題に答えを与える。すなわち、われわれはいかにして、彼らのアイデンティティの認知を、抑圧された者が欲したものだと確信することができるのか。そして、そういった認知が出現したとき、だれが満足するのか。主人か奴隷か、抑圧するものかされるものか、という問題である。自由主義的な多数派ですら、問題とされる少数派のアイデンティティを認知する以前に、そのアイデンティティがなんであるのか知り、理解しなければならない。これはほとんど達成されないことであり、達成されたとしても、多くの場合は表面的で、問題となっている集団における指導者や覇権を握る人物によって提供される傾向にある。さらに悪いことには、規定され義務付けられたアイデンティティは真正性を要求する傾向にある。そのようなアイデンティティは、凍結され、人の生きている世界から分離される傾向にあり、指導者の便宜を満たし、潜在的な「認知者」の便宜を満たすであろう。そういったアイデンティティは（発見されたものであれ、創造されたものであれ）、差別的・残酷的行為に起源をもつメモロペインを和らげるのか。もしくはナルシシスティックな目的に奉仕する物神崇拝的な文化的事業の形をとるのか。スリランカでは少なくとも、後者の事例が見受けられる。

規定されたアイデンティティを妥当な真実だと見なさない、あるいは、そのようなアイデンティティの要件を満たすことを拒む個人や集団の一部は、アイデンティティ・ポリティクスにより構築され崇拝される認知構造の裂け目に落ちる。遅かれ早かれアイデンティティ・ポリティクスが創造し助長してきた、ナショナルな夢想に対する深い自己愛的な外皮は崩れ去るだろう。スリランカにおいては、実際それは崩れ始めている。逆説的なことに、その崩壊が進むにつれて、多くのシンハラ人とタミル人、とくにその指導者たちは、より情熱的にそれに執着する傾向にある。スリランカ人、とくにその指導者は、この

瓦解を嘆くことができなければならない。それなしでは、彼らの国民は死者の声を聞くことができない。いかにしてわれわれは自己愛的な外皮と取り組み、その喪失を嘆き、それらを手放せばよいのか。これはアイデンティティ・ポリティクスに酔いしれたわれわれの世界の多くが直面している難問である。

スリランカは、いかにして死者を弔い、そして死から解放されるのだろうか。(南アフリカのような)真実和解委員会によってか。裁判によってか。国際裁判所によってか。あるいは謝罪によってか。ひとつの逆説的な選択肢は(私が伝統について述べた意味での逆説であるが)、ヒンドゥー教徒と仏教徒、シンハラ人とタミル人の、陳腐な決まり文句や習慣によって着古されていない文化的資源を深く掘りさげて、そこからなにかを構築する方法、たぶん、強力な儀礼を引き出すことであろう。そのなにかによって、理性の啓蒙的事業への共感によってではないにしても、プラグマティックな力によってわれわれは死者を弔い、同時に死から解放されることができる。それができなければ、あるいはそれができるまで、われわれはポリュネイケスを埋葬できないアンティゴネがそうしたように、われわれの死者を埋葬できず、放浪するだろう(*訳注2)。われわれは死者を弔わねばならない。われわれは死から解放されなければならない。そして、政治的・宗教的指導者は、アイデンティティ・ポリティクスに執行猶予を与え、タミル人とシンハラ人を弔い、死から解放される仕事へと導かねばならないのである。

[Valentine Daniel・コロンビア大学教授]

[訳注]

1――シェイクスピア作『ヘンリー四世』の登場人物フォルスタッフの言葉から。原文は、第1部5幕4場117～118。フォルスタッフは、飲んだくれ、大食漢、大法螺吹きの臆病者で、金に困っては追いはぎに手を染める悪党であるが、人気の高い道化役である。

2――アンティゴネとポリュネイケスはギリシア神話に登場する兄妹。ヘーゲルは『精神現象学』の人倫(Sittlichkeit)の項で、死んだ兄ポリュネイケスの弔いをめぐるアンティゴネの悲劇に言及している。

［参照文献］

◇ヘーゲル、ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ 2002『精神の現象学』(上下) 金子武蔵訳、岩波書店。
◇Daniel, Valentine 1996. *Charred Lullabies: Chapters in an Anthropology of Violence*. Princeton: Princeton University Press.
◇Fabian, Johannes 1996. *Remembering the Present: Painting and Popular History in Zaire*. Berkeley: University of California Press.
◇Hill, Geoffrey 1971. *Mercian Hymns*. London : A. Deutsch.

『再魔術化する世界』をめぐって◆

山之内　靖

木前利秋（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

山之内先生のお名前はすでに私の学生時代から、まず経済史家として、イギリス産業革命論等の主にイギリス経済史研究の分野で知られておりました。その後、『マルクス・エンゲルスの世界史像』（1983年）を手始めに、『現代社会の歴史的位相』（1982年）や『ニーチェとヴェーバー』（1993年）等の著作を次々と出され、もともとの経済史という領域を超えて、幅広く思想史、社会科学、社会学等の分野で活躍されてきました。近年はグローバリゼーション等々を軸にした研究を、特に共同プロジェクトという形で進めておられます。つい最近も『再魔術化する世界』[山之内 2004] という本を上梓されたばかりであります。本日はこの本をめぐって、ということで講義をしていただきたいと思います。では、先生よろしくお願いします。

（以下、山之内靖講演。）

1.「戦後という時代」の終焉

司会をしていただいた木前さんとは昔からの友達でありまして、自主的に集まってやっていた勉強会のメンバーでありました。『現代社会の歴史的位相』（日本評論社）という私の本が1982年に出たのですが、この本が出たときに、木前さんと姜尚中さん、中野敏男さんと私、この4人が月に一回ずつ集まってやっておりました。みなさん大学院のドク

◆――本論文は、2004年7月23日にトランスナショナリティ研究セミナー（於大阪大学大学院人間科学研究科）で発表されたものが元となっている。

ターでありまして、まったく就職の見通しもなく暗い顔をした3人が私のもとにやってきて、みんなでウェーバーを勉強しようということであったと思います。今振り返ってみますと、82年に始まったこの勉強会自体が、いささか大げさに聞こえるかもしれませんが、戦後日本において成立してきた社会科学にとって、その転換点を生み出したひとつの集合体であったと思われます。4人とも、世代が違ったり、所属する大学が違ったり、あるいは専門とする学部が違っていた。こうした異質の人間たちが、ウェーバーの新しい読み方を試みようという一点で集まったのです。木前さんも姜さんも中野さんも、自分の所属する大学院で、指導教授の学問の筋道にぴったりとあわせて研究をして、すでに成り立った学問の道をそのまま歩んでいくというようなことに、多分、疑問を感じていた。私も、教えを受けた大塚久雄先生の方法に疑問を感じて、大塚史学のかつての仲間と次第に疎遠になっていきました。そういう「はぐれもの」のグループだったと思います。

その「はぐれもの」達が、指導教授の学問に従って研究していくという安易な道を断念せざるをえないような出来事があったのだと思います。それは、1960年代の末から70年代の初頭にかけて先進世界の大学をいたるところで激動の渦の中にまきこんでしまった大学紛争でした。私は当時、まだ若くて、東京外国語大学の講師として勤めていたわけですけれど、そこでも学生寮に学生以外の人たちが出入りして住み込んでしまっていたことをめぐって、これを禁止しようとする大学当局と寮生たちとの対立が原因となって、大紛争になってしまった。泊り込んでいる連中たちが実は左翼の学生たちで、ちょっとしたトラブルがキッカケとなって、学生たちが集まって大衆団交というのが行われました。全学部の学生が集まり、教授たち全員が壇のうえに並んで、学生たちが一人一人の教授をつるしあげるという、今では考えられない事態がありました。私もつるしあげられました。

こういったことが、60年代末から70年代初頭にかけて世界中でおこりました。全世界的にこういった事態が生じた下地になったのがベトナム戦争でありました。これは当時の若い世代にとってみればどう考えても不当だと思われる戦争でした。いまもまた、どう考えても不当な戦争がこの地球上におこっています。そして、学生運動という形ではなくても、イラクで行われていることに対する危機感が世界中に広がっているように思われます。それに相当するのが当時はベトナム戦争でした。

ベトナム戦争がきっかけになって、世界中で若者たちの大学を基点とする反乱がおこりました。しかし、これは単なる若者によるベトナム戦争反対運動というものではなく、非常に大きな歴史のターニングポイントだったように思います。それは、後になって社会科

学や歴史学の研究者が振り返ってわかるようになってきたのだと思うのです。その一冊としてエリック・ホブズボームの『20世紀の歴史——極端な時代』という本があります。原著は94年に書かれていて、三省堂から邦訳もでております。ホブズボームはイギリスのマルクス主義系の世界的に有名な歴史学者であります。この本によると、1960年代というのは近代の歴史全体を振り返ってみても前例がないほどの時代でありました。特に経済の領域で、グローバルな規模で秩序をまったく作り変えてしまうような新しい技術発展が先進世界全体にひろがっていきました。「電子メディア時代」の幕開けです。この時代には、テレビが登場して家庭の中にも入っていきました。東京オリンピックや皇太子の結婚といった華々しい出来事、あるいはベトナム戦争を頂点とする世界中の出来事が家庭の中に同時に映し出されるという、まったく新しい事態を生み出しました。ホブズボームは1960年代を「黄金の60年代」と呼んでおります。この「黄金の60年代」が持った意味というのは、テレビを通して世界中の若者がベトナム戦争反対という運動に結集していった、そういう時代をつくったということであったと思います。とすると、どうも、1960年代をきっかけにして人類全体が地球的規模で情報を共有することになったと言えるのではないでしょうか。それがベトナム戦争を通して世界中の若者を連帯させた。中国の文化大革命、これも若者たちを中心にして同時期に起こったということを、いま鮮やかに思い出します。

また、「場所の再定義」というテーマをめぐって、私と成田龍一さん、それに伊豫谷登士翁さんの三人で鼎談をいたしまして『再魔術化する世界』の第二部に組み込んでおります。つまり「場所」、プレイスという問題が社会科学の中に欠かすことのできない領域として浮上してきた。これも「黄金の60年代」とともに登場してきたということであるようです。

ところでそれから約20年後に、時代の転回の意味を明らかにするような書物がでてまいります。ジョシュア・メイロヴィッツという人の*No Sense of Place*という本です。最近になって『場所感の喪失』という表題で邦訳されましたが、私はその内容を「場所感覚の消失」、つまり場所に対する感覚が消えてなくなったという意味で理解しています。というのも、最後の部分の議論をみていくと、コンピューターによって「場所」の問題がさらに新しい次元を迎えていくだろうということが言われていて、従来の意味での「場所感覚」が失われるとしても、新たな代替的感覚が生み出されるであろうと語られています。つまり、必ずしも「喪失」と呼ぶべきマイナスのイメージで語られてはいないからです。原著

がでたのが1985年ですからまだパソコンが登場したばかりではありましたが、パソコンや携帯電話に溢れた今のような時代がやってくることを予想して書かれている書物であります。副題が面白くて「電子メディアが社会行動に及ぼす影響」と書いてあります。とても僕には魅力的だと思われました。

メイロヴィッツがいう電子メディアというのは、主としてテレビのことです。電子メディアの登場によって人々の社会的コミュニケーションのありかたがいかに変わったか、それによっていかに「場所」が意味変容をこうむったかということが書かれています。ところが、どういうわけか社会学のえらい人々にはこの本は評判が悪い。それはおそらく、れっきとしたシカゴ学派系の社会学者であるアーヴィング・ゴフマンとならんで、ちょっと桁外れなところのあるマーシャル・マクルーハンを使っていることに不満があるということではないかと思います。

この本の学問的評価は別として、「場所」に関する社会学とメディアの社会学を組み合わせることによって巨大な社会変容が起こっていると論じた点で、メイロヴィッツのこの本は先駆的だったと思います。巨大な変換が60年代から70年代にかけておこっていたのですが、それを社会科学者が本格的に認識するのは、どうも80年代にはいってからであるということになります。

もう一つ、70年代の学園紛争を振り返ってみて、大きなインパクトがあったと思われることがあります。大学という場所を拠点とした若者の紛争という事態は、まったく予想もされなかったことです。今だったら大学の中でヘルメットをかぶってゲバ棒をもっている数十人の学生が隊列を組んでデモをしていたりしたら、大学の学長はすぐ機動隊を呼んで追い出すでしょう。しかし当時、日本の大学には機動隊など警察権力はいっさい学内に入れないという暗黙のルールがありました。第二次大戦以降、日本の大学は警察を学内に入れるということに大変にナーバスになっておりました。1950年代から60年代かけて、学内に警察官がいたら大騒ぎになるという時代でありました。そこで警察官は普通の背広を着て大学内に入ってくるわけです。私服警官が潜入していることがわかりますと学生たちはすぐに取り囲んで、そこで学長が自らやってきて警官を説得して出て行ってもらう、というようなことが実際にありました。

つまり、大学というところは一切の国家権力が入ってこないという暗黙の了解のもとに自由に学問をする場所だというように了解されていたわけです。特にこれは日本の場合にそうだった。というのも戦時期には、大学は思想研究の自由を持ちえず、マルクス系の社

会科学を研究しているような学者は追放されていきました。そういう暗い時代があったせいで、戦後の日本の大学はいっさい国家権力が統制してはならないという了解がありました。そして私はその時代（1952年）に東京大学に入りました。

その時代の大学において主流をなしていた社会学、歴史学の潮流を振り返ってみますと、戦後の日本の民主主義体制をいかにしてより理想的な状態にまで推し進めていくか、ということを目標としてはっきり掲げていた時代であった。その時代のリーダーとして、（東大）法学部に、『日本政治思想史研究』（初版、1952年）ですでに有名であり、さらに『現代政治の思想と行動』（初版、1957年）という著作で非常に流麗な文章を書かれた丸山真男さんがおられました。そして経済学部には、私が西洋経済史をその下で学ぶことになりました大塚久雄さんがいらっしゃいました。社会政策の領域では大河内一男さんが経済学部で教えていました。法社会学の川島武宜さんも法学部で教えていらっしゃいました。そういう方々によって代表される潮流がありました。

こうした方々によって担われる社会科学は、ひとくくりにして「市民社会派」と呼ばれるようにいつからかなったわけですが、彼らは、明治以来の日本の近代を、アングロサクソン社会で発展してきたような本来の「近代」、本来の「民主主義社会」とは違ったタイプの近代と考えていた。つまり日本の近代というのは、ある種非正統的というべき「歪んだタイプ」の近代であったと考えられていました。日本は、ヨーロッパやアメリカからさまざまな産業技術や科学技術をどんどん取り入れました。しかし「近代化」を進めるとともに、周辺のアジアの地域に次々と帝国主義的侵略を試みていきました。ところが、こうした急速な「近代化」にもかかわらず、日本の場合、広範な親族関係にまでおよぶ序列をともなった独特の家父長制秩序が社会関係を規制し続けていました。特に農村部では、山田盛太郎さんが「半隷奴制的」という表現を与えた零細耕作と、それにともなう旧態そのものというべき共同体および寄生地主制が、頑固に残存し続けました（[山田 1934]）。こうした日本の近代を「歪んだ近代」ととらえ、そういう「歪んだ近代」の反射として、「ヨーロッパの近代」、つまり「正しい近代」があるということが前提とされていました。私が大学に入ったころは、そういう考え方にしたがって社会科学も歴史学も方法的に構築されていた。

それに対してもちろんマルクス主義者のグループがありましたが、彼らのなかにも丸山先生や大塚先生の学問に共感を示すグループがありました。勿論、それとは別に、「真の近代」は共産主義にならないとこないというソ連派、あるいは中国派のマルクス主義者も

おりました。そういう違いはありましたけれど、戦後の社会科学や歴史学において主流をなしたのは、ヨーロッパ近代をひとつの正しいモデルとして設定していた学問のタイプだったと思います。

2. ヴェーバー「倫理論文」とサイード「オリエンタリズム」

ここで第二の問題に進んでいきたいのですが、「市民社会派」のグループが一様に依拠するようになったテクストは何だったか。確かにマルクスも利用されました。とりわけ『経済学批判要綱』の一部に組み入れられている「資本制的生産に先行する諸形態」はよく読まれておりました。しかし、なによりも彼らにとって一種の聖典といっていいほどに大きな意味を持っていたのがマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でした。この本は、日本の戦後の歴史学、社会科学において一種のスタンダードであり、西洋的近代のモデル性を宗教社会学的な方法で明らかにした本としてよく読まれていた。丸山先生の『日本政治思想史研究』においてもウェーバーの『儒教と道教』はヘーゲルの『歴史哲学』と並んで方法的典拠として扱われている。大塚先生の『近代欧州経済史序説』(初版、1944年) 等はウェーバーの学説を大塚さん独自の解釈で組みこんだものになっています。

1964年に「マックス・ウェーバー生誕百年記念シンポジウム」というのが東京大学で行われました。同じ記念シンポジウムは、ドイツのハイデルベルグでも行われました。ここに、今思えば世界の社会学を代表する研究者たちが集まってきました。ハーバート・マルクーゼ、タルコット・パーソンズ、ラインハルト・ベンディックス、レーモン・アロンらです。このシンポジウムの全容はドイツ語で出版されており日本語訳もでております。ハイデルベルグ・シンポジウムでは、実は大変な論争が起こっていたことが記録されています。とりわけフランクフルト学派系のラディカルな社会学者であるマルクーゼは、ウェーバーの社会学は近代資本主義批判においてかなりのところまで進みながら中途半端で終わっているとして、ウェーバーの欠落している部分を批判する発表をおこないました。それに対して、多くのウェーバー信奉者が反論するという形で、大変にこのシンポジウムは荒れました。

ところが、同年の日本の「ウェーバー・シンポジウム」は和気あいあいでありました。

大塚先生と丸山先生の間で少しだけはっとするようなやりとりがあった程度でした。私はその二年前に東京外国語大学に勤め始めておりました。意味もよくわからないままふたつのシンポジウムを見比べながら、一体自分の学んだ社会科学という学問はどういう方向を向いているのだろう、という模索を始めていきました。

問題は、戦後の日本の歴史学や社会科学において、その方法の基準を与えていた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本が、大塚、丸山両先生が解釈したように西洋近代を近代化のモデルとして提示するような本であったのかどうか、ということです。もしそれが揺らげば、戦後の歴史学も社会科学も根本から揺らぐことになります。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は実は戦時中に翻訳されています。最初の梶山力訳は1938年、太平洋戦争勃発の3年前に翻訳されている。その前に、すでに満州事変（1931年）以来、日本は中国大陸への侵略戦争にのめり込んでおりました。戦時期に出ているということは、当時大学ではマルクスを語ることがもうできなくなっていましたから、偽装マルクス主義者たち、転向マルクス主義者たちも含めてウェーバーを使って、実は当時のファシズムの方向に対してひそかに批判していたという面もありました。つまり、明治以来の日本の近代は歪んでいたと言い、デモクラシーを生み出してきた西洋近代をモデル化することで、軍事ファシズムを暗に批判していたのだと思います。

ところが、戦後になっても、そのまま西洋近代がモデルとして提示され、日本の近代は歪んだものとして捉えられていく。確かに戦後の占領政策や朝鮮戦争以来の成り行きはデモクラシーというよりも米国への戦争協力へと向かうものとなっていった。実は、それに抵抗するうえでも、丸山・大塚両先生の仕事は大きな意味を持っていたと思います。つまり、世界に覇権を推し進めるアメリカは、すでに初発の近代の精神を失った異物なのだというわけです。

ところで、そうなるとエドワード・サイードはどうなるのでしょう。一体、『オリエンタリズム』という著作ではウェーバーはどう位置付けられているのでしょうか。サイードはあの名著の中でウェーバーの研究もオリエンタリズムへの傾斜を免れるものではなかったとして批判しています。つまり、ウェーバーはヨーロッパを正統的な近代の社会秩序と見ている。アジアやラテンアメリカといった非ヨーロッパ地域をけなしているわけではないけれど、しかし、違った文化として見ている。もともと違いがあるという前提のもとに非ヨーロッパ世界について「歪んだ像」を映し出しているというのが、サイードによるウェーバー批判の主要な論点だったと思います。オリエンタリズムというのは、非ヨーロッパ的

世界を西洋とは異質なものへと仕立て上げ、それを世界史の中心をなすヨーロッパから距離をもつものとして特殊化し、それを鑑賞するような態度でありますが、そうした類型区分の方法を批判するのが『オリエンタリズム』の主題であったと思います。その著作のなかでは、ウェーバーはやはりオリエンタリズムの潮流に与しているのだと言われている。

私は、サイードという人は大変に尊敬しています。しかし、著作としての『オリエンタリズム』について見るならば、私のなかにそのままサイードを容認するという気はあまりない。というのも、彼もまた、ウェーバーが真に持っていた批判的な意味を理解していないという点では、日本の「市民社会派」の人々と同じだったのではないかと思えるからです。「市民社会派」はウェーバーを「本当の近代」あるいは「正統的な近代」の主唱者だと考えていた。サイードは西洋近代を正統なものとして類型化するような「西洋中心主義」を批判しているという点でそれとは正に正反対なのですが、しかし、ウェーバーの方法に内包されている西洋近代への批判を見ないままでウェーバーをオリエンタリズムだと決め付けている点では、サイードは「市民社会派」と見方を共有している面がある。

詳しくは、岩波新書の『マックス・ヴェーバー入門』という私の本を読んでほしいのですが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を精読しているうちに、私は丸山先生や大塚先生はどうも間違った読み方をしているのではないかと思うようになりました。ウェーバーは17世紀に始まるヨーロッパの宗教改革運動を通じて近代という時代が登場すると論じます。彼は、魂の救いを可能ならしめるような新しい信仰が大衆の間にひろがっていって、日常生活における「行為の動機」を変えていったと論じています。ここが大事なところです。カルヴァンとかルターといったカリスマ的リーダーの行動や教説の分析もされていますが、よく読んでみるとウェーバーはそういうカリスマ的リーダーの教説を大衆的信徒がどう受け取ったかが問題なのだといっています。大衆がカリスマ的リーダーの言うことをどう聞いたのか、これがウェーバーを読むうえでのポイントだと思います。カリスマ的リーダーは、命を掛けて新たな教説を語った特殊な人間です。しかし、その教えは普通の人には日常生活において容易には実行できないような厳しい教説です。人間は死ぬ瞬間にいたるまで神の秩序を地上に実現するために精進しなければならない、とか、自分の作ったものを原価と正当な利潤を越えて高い値段をつけて売ってはならない、といったことを訴えかけるようなプロテスタントの厳しい教えを、信徒大衆はどう受けとめたのか。つまり、ウェーバーが試みたのは、大衆の日常性をベースとする社会学的分析であって、カリスマの言説分析そのものではないということ、これが私には第一に注目す

べきことと思われていきました。

もうひとつ、ウェーバーは重要なことを述べています。宗教改革の精神に支えられて初めて可能になった新しい歴史の可能性として「禁欲的職業労働のエートス」が誕生する。この「禁欲的職業労働のエートス」を文化的基盤として、合理的な経営や科学技術が展開され、近代の経済学や会計学、あるいは合理的な法に基づく裁判制度が生まれてくる。確かに彼はそういいます。しかし、その近代ヨーロッパ社会はやがて、人々の感情的むすびつきを解体させながら、ひたすら法の基準にしたがった合理性にもとづく組織運営に向かっていった。これが、ウェーバーの合理化というテーマであり、ここに近代官僚制という制度的秩序が成立する。この合理的な制度化された秩序が、同時に「鉄の檻」とも呼ばれていることは、皆さんもご承知の通りです。

となると、ここで問いがでてきます。一体、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで、最初に起こった宗教改革の精神と、西洋文化の退廃を体現しているとされる「無なるものたち」——19世紀末の西洋社会にあって、ウェーバーは、そこに「精神なき専門人、心情なき享楽人」といったタイプの人間が圧倒的多数を占めるようになっていると見ていました。しかも、「この無なるものたちは、にもかかわらず人類の最高の文化段階にまで到達したのだとうぬぼれるのだ」というのです——この「無なるものたち」の形成との間の関係を彼はどう考えたのか。

ここがポイントです。この本をよく読むとわかります。ウェーバーは「無なるものたち」が出てくる根拠は宗教改革の初期プロテスタント運動そのものの中にあると言っているのです。だから、この本は、およそ大塚、丸山両先生が読み取ったものとは違うことを語っていたのです。ヨーロッパ近代がモデルになるなどとは言っていないのです。ヨーロッパ近代こそ最初から「無なるものたち」を生み出すように運命づけられていたのだ、と言っているのです。ここにはニーチェと呼応する「悲劇の精神」が読み取れます。サイードはそこを読んでいない。オリエンタリズムといくら批判しても「ヨーロッパ世界そのもの」の批判にはならない。オリエンタリズムとは、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界との間に成立している相互を他者化する「まなざし」に他ならないのであって、その点の批判だけでは、「ヨーロッパ近代」そのものの批判にはならないからです。そしてもし、ヨーロッパの影響を強く受けている非ヨーロッパ世界が、オリエンタリズムを批判している背後で、自らヨーロッパと同じように「無なるものたち」へと向かっていたらどうしますか？

私が読んだ限りでは、非ヨーロッパ的近代もまた「無なるものたち」へと向かっていく

ことをサイードは批判していない、ということです。サイードにしても、ウェーバーの方法論的な意味が、宗教改革にまでさかのぼってヨーロッパ近代の成立そのものにすでに問題がはらまれていることを示すことにあった、ということを見通していないのではないでしょうか。そして、ポストモダンの時代に流行したさまざまなタイプの哲学もまた、そうした論点をどこまで読み取っていたのか、という疑問が私にはあります。

ここまで話せれば幸せだと思って私は来たのですけれど、残る問題も一、二あります。十分に話す時間はありませんが、私の話の周辺にどんな問題がでてくるのか、ということについて付け加えてお話したいと思います。

3.「ニューディール」と社会の「システム論的再編成」——山之内『現代社会の歴史的位相』を中心として

一つは総力戦体制論についてです。戦後日本の社会科学の枢軸をなしてきた「市民社会派」的な方法のあり方は、どこかで西洋近代を理想的なモデルとし、日本の近代を「歪んだ近代」とみなしてきました。そのヨーロッパ的世界こそ、世界を植民地化して帝国主義的に支配したではないか、という批判がされうるにもかかわらず、そう言われてきた。ヨーロッパは悪かったにしても、アメリカはよかったじゃないか、ニューディールはよかったじゃないか、そう言われてきました。ニューディールは戦後日本の社会科学では長いこと見習うべきモデルでした。リリエンソールの『TVA』(原著、1944年、邦訳、1949年)はそうした動向を代表する文献でした。英語原本には「進み行く民主主義」(democracy on the march)という副題がついておりました。アーサー・シュレジンガー・Jr.の『ローズヴェルトの時代』(原著、1957年。邦訳、1966年)も非常によく読まれておりました。しかし、いまでは事情は大きく変わってしまいました。例えば、フィリップ・セルズニック(Philip Selznick)の *TVA and the grass roots: a study in the sociology of formal organization* [1949]は、ニューディールの影の部分を取り上げた社会学文献として、その走りであったと思います。もちろん現代のアメリカでは社会学者でも歴史学者でもニューディールがよい体制だったなどと言う人は少なくなっているだろうと思います。ニューディールの限界を自覚した研究動向として、代表的には、セオドーア・ローウイの『自由主義の終焉』(原著、1969年。邦訳、1981年)が挙げられます。このあたりについては、私の『現代社会の歴史

的位相』の末尾においた「総括——新たな弁証法」を参照してくだされば幸いです。

ところで、ふたつの世界大戦に匹敵するぐらいに日本社会を存亡の淵にまで追い詰めた戦争が日露戦争であったということ、このことが今日研究者の間ではっきりしてきました。日本の兵站線が延びに延びてもう一ヶ月も持たないという状況でしたので、小村寿太郎はなんとしても交渉を停戦に持っていき、日本が勝ったという体裁だけ整えればいい、と考えていたのですが、しかし、ロシア側の代表であるウィッテという老練な政治家を相手に交渉が難航して苦労しました。有名な話ですが、このあいだもNHKがその話を取り上げていました。日本は日露戦争で、全国力をあげても「もう持たない」というところまで突っ走っていた。政府は、はっきりもう悲鳴をあげていたのです。

そういう意味では、日本にとって第一次大戦の前に日露戦争の経験がある。第一次世界大戦では、非常に景気がよかった。ヨーロッパ戦線に物資を送り込んで空前の高度成長を遂げました。このとき日本の近代工業の基礎が作られました。ふたつの世界大戦を経てより確固たるものになった、この総力戦の体制というものが、「無なるものたち」に転落しつつあった近代というものをさらに途方もないレベルにまで転換させてしまったということがあるのではないかということを、私たちは共同研究の中で「総力戦体制論」という論点で展開いたしました［山之内、コシュマン、成田 1995；山之内、酒井 2003］。

一番の問題は戦勝国であったイギリスとアメリカが、総力戦体制とは無関係でありえたのだろうか、ということです。特にアメリカのニューディールについて、これはデモクラティックな改革であり、共産主義体制を向こうにみながら資本主義体制の中に社会化された計画性を持ち込もうとする画期的な試みであったと言われてきました。最近になって、マーク・アレン・アイズナー（Marc Allen Eisner）という人が*From Warfare State To Welfare State*［2000］（『戦争国家から福祉国家へ』）を書いています。これには、“World War I, Compensatory State Building and the Limits of the Modern Order”という副題がついています。この本は、アメリカのニューディール体制というのは、第一次世界大戦への参戦を通じて形成された総動員システムの経験が前提となっていること、その経験にもとづいて、大戦後に大恐慌が来たときに構築されたものだ、ということを言っています。福祉国家のモデルとしてもてはやされてきたニューディール体制は、そもそも、第一次世界大戦におけるアメリカの総動員をベースとしていたのであり、そうしたものとして限界を免れ得ないものであった、というのです。

つまり、ニューディールさえも第一次世界大戦によって基盤が作られていた、というこ

とです。このような研究を私は長いこと探していたのですが、それを主題として掲げたのはこの本が初めてだと思います。

アメリカの研究者たちはこの本を無視しつづけているように見えます。こういう本はアメリカ人にとっては非常に不愉快な本でしょうから。そして副題の最後に "Limits of the Modern Order" という言葉が出てきます。つまり、ニューディール以降に出てきたアメリカ体制の限界、つまり民主主義と称するアメリカの体制の限界を説いているのです。この本は2000年に出版されていますが、このアイズナーさんが現在の米国でイラク戦争反対の論陣を張っている数少ない学者たちの中にいることはまちがいないと思われます。そういう傾向の本であります。

ウェーバー研究における方法論的転換と関連して出てきました新しい見解のひとつがこの総力戦体制論というものですが、もうひとつとして社会システム論を挙げることができます。これを主導したのはタルコット・パーソンズですが、彼も60年代の大学紛争の時に、アメリカ社会科学の主流を形づくってきた張本人だということで、非常に攻撃されたということです。しかし、パーソンズという人はなかなかの人だと僕は思います。勿論、問題の多い議論で、今日では、パーソンズの方法はあまりにも楽観的な機能主義として批判されています。批判者としては、差し当たり、ウルリッヒ・ベックを参照すべきでしょう（[Beck, Giddens and Lash 1994]）。私の『現代社会の歴史的位相』も、第六章でパーソンズ批判を展開しています。

彼はウェーバーを継承してアメリカに導入した人です。彼の社会システム論の方法は、宗教改革による価値体系の転換というウェーバー社会学のテーマを大きな意味を持つものとして位置付けている。その意味で、パーソンズは日本における丸山さんや大塚さんと似たような思考に立っていました。

しかし、パーソンズはアメリカの位置をさらに特殊に重要なものとして付け加えたという点で、ウェーバーとは距離をおこうとしています。パーソンズによれば、ヨーロッパでさえも宗教改革の精神を十分に発展させることができなかった。中世からの長い伝統が宗教改革によってもなかなか克服されず、近代化を妨げたからだ。その精神はアメリカに渡って初めて十分に開花したのだ、という議論になってまいります。そうすると、パーソンズにとってニューディールというのは、まさに望ましい改革として現れてくる。彼の考え方は、複雑かつ多様に分化した専門領域同士、あるいは複雑な社会的下位体系相互の間には機能的に分化した連関があって、それが無秩序にいたらないように価値体系が中心と

なってそれらの下位体系を統合している、というものです。

私は自分についていまでも根本はマルクス主義者だと思っていますけれど、マルクス主義の立場に立つ研究者が社会システム論をまったく評価しない、勉強しようとさえしていない、という状況はついに変わる事がなかった。これは残念なことだったと考えています。マルクス主義の一番の欠点は、経済決定論であるということです。それは経済の領域に特権的な比重を認めるという点である種の要素還元論となっています。そのために、複雑な専門領域ないし下位体系が相互に関係しあい、そのなかで一定の均衡ある統合を達成することはいかにして可能なのか、という社会システム論が提示する中心問題には関心をもたないままできてしまったのです。マルクス主義の方法もパーソンズの社会システム論の方法を批判的に取り入れていかないとだめだと思います。とはいえ、もう手遅れだと思います。それぐらいマルクス主義は時代に遅れました。そのパーソンズですら、今日では確かに社会学一般において歓迎されなくなってきておりますが、しかし、パーソンズに関心をもって、これと真剣に取り組むことを怠ってきたマルクス主義は、さらにどうしようもない。

4. 社会科学と人類学の交流
——パオロ・ヴィルノ『マルチチュードの文法』を中心に

ここで話を人類学へと切り替えてみましょう。今日の大阪大学のプロジェクトでその中心を担っているのは人類学の方々だと伺っていますが、私のような「はぐれもの」のマルクス主義者に、人類学の方々はどの点で関心をもたれたのでしょうか。ここで私のようなこれまで人類学とはまったく関係がなかった人間のいうことを聞いてみようとして頂いているということが実際にあるわけですから、何かのつながりがあるはずでしょう。オーソドックスなマルクス主義がほとんど崩壊という状態で、さらに、かつてあれほどに大きな影響力をもっていたパーソンズの機能主義的システム論もすでに批判の対象でしかなくなっている。そのとき、しかし、人類学の領域はかえって大きく前進しているように思えます。例えば、私が最近になって興味深く読んだイタリアのマルクス主義者、パオロ・ヴィルノの『マルチチュードの文法』[ヴィルノ 2004] は、自らの方向を「哲学的人類学」と名付けています。

実は私のように経済史出身で社会学へと渡り歩いてきたような人間にとっても、今日も

う人類学領域の問題提起を無視なんかできません。というより積極的に取り入れなくてはならなくなっている。デボラ・ローズの『生命の大地——アボリジニー文化とエコロジー』という本があります。原著は1996年にでていまして、翻訳が2003年に平凡社からでました。こういう本は人類学領域でたくさん出ているのだろうと思います。オーストラリアは19世紀以降にヨーロッパから移住してきた白人たちが作った社会であるかのように言ってきたけれども、実は白人たち自身のなかから、自分たちが大規模な牧畜などによって作り変えた結果として自然のバランスが崩れてきているという危機意識が出てきていて、オーストラリアの白人の社会学者、人類学者にもそれが共有されているということは明らかなです。

ここでローズさんが言っていることは、白人が来る前にアボリジニーがある種の開発を行っていて、自然と人間の関係を作ってきていた。そのシステムを再発見して学びなおすべきだということが背景になっています。この本の訳者であり、著者との間で興味深い対談を行っている保刈君は、実は、先日ガンでなくなりました。私はオーストラリアに出かけて、彼と一晩語りあかしたことが今でも頭にあるので、特にこの本を挙げたかったわけです。

また、明治のころに、知里幸恵さんの書かれた『アイヌ神謡集』という、アイヌの失われつつあった歌を残した本が、今になって再評価されて出版されたりしている。私の知っている人類学領域の本などというのは、こういったささやかなものにすぎません。しかし今日、そうした人類学領域から呼びかけられている声を聞かねばならないと思っている。

5.「脱魔術化した世界」の「再魔術化」——ジョージ・リッツアーによるヴェーバー再解釈

それは何故かといいますと、今日の我々の生きている世界では、実はウェーバーが近代化の中心的な動きとした「脱魔術化＝合理化」の過程とは違うものが起こっているということが言われてきているからです。ジョージ・リッツァー（George Ritzer）という人、この人は有名な『マクドナルド化する社会』で知られていますが、これはつまらない本です。読まなくてもよろしい。あまりにも単純なウェーバー合理化論の適用にすぎないです。しかし、その後に彼は*Enchanting a Disenchanted World: Revolutionizing the Means of Consumption*

[Ritzer 1999]. という本を書きます。「消費手段の革命」、つまり消費社会というのはどういう社会か、ということについて考えていくなかで、「脱魔術化」の裏側に実は「再魔術化」のプロセスがあるということをウェーバーは見通していたのではないだろうか、ということにリッツアーは気付いてゆきました。つまり「無なるものたち」に満ちた世界としてウェーバーが批判したこの近代文明とは、単に合理化だけが進む世界ではないのだということです。「脱魔術化」は大量消費、大量生産と結びつきますが、現代の消費社会というのはあらゆる人間の感情を刺激し動員して消費意欲を掻き立てていくものでもある。その「再魔術化」のもっとも代表的な事例として彼があげているのがディズニーランドです。もうひとつは世界を回る巨大な豪華客船で、そこにはプールや映画館や豪華な食堂がふたつもみっつもある。そのような魔術的な豪華さを演出しないと、つまりは次々と演目を変えていかないとお客はきてくれない、ということです。

現代の先端を行く消費社会というのは、「再魔術化」の極限を次々と繰り出しながら絶えず目先を変えていく。だから、このごろは俳優さんでも2、3年たつと消えてなくなりますね。魅力のある人の定義がつねに変わっていく。長く鑑賞されるというものではなくなってしまった。絶えず変えられていく趣味嗜好によって、つねに「脱魔術化」が進行していく。つまり、本来、伝統社会の「魔術的な世界」から「脱魔術化」によって脱出し、合理化を進めていくというものであった近代文明が、実は「再魔術化」によって支えられるようになっている。こうして、本来二元的に対立したものだった「脱魔術化」と「再魔術化」が相互補完的になっている。「再魔術化」の先端の方法を絶えず作り出しながら、そうすることで「脱魔術化」を行っていく。そういう世界の中に我々は生きていることになります。だからこそ人間と自然の関係はますます深刻な問題になってくる。リッツァーは、「脱魔術化」と「再魔術化」が表裏一体になっているような現代の文明を組み替えて、もういっぺん自然の世界の重要性に基礎をおいた文明がやってくる可能性はあるのか、という問題を彼の論文の最後に問うています。彼の答えは残念ながら自分はないと思う、というものですが、みなさんどう思いますか。そここそが問題でしょう。

私は、自分自身もすっかりそういう世界に取り込まれていると思います。リッツァーは、「再魔術化」によって「脱魔術化」が進行していくというこの世界のありさまを、ボードリアールの言葉である「インプロージョン」(内破ないし境界融合) を使って説明します。「脱魔術化」と「再魔術化」という本来二律背反的なものが融合して境界がなくなってしまう、ということです。

6.「場所」の再建を目指して
——ジェラード・デランティ『コミュニティ』を中心として

その「再魔術化する世界」のなかで、私が問題としたいのはやはり自然ということです。人間は最終的には、自然の豊かさを破壊しつくしたままで生きていくわけにはいかないのです。もうひとつ巨大な問題は子供の教育という問題です。現在の社会科学にとって、その最大の問題は教育だと思います。教育の問題に正面から向かわないような社会学も人類学も全部駄目だと思います。そして、今の日本の文部省がやっていることは、この根本問題に気付いていないという点で、まったく駄目だと私は思います。子供の教育というものは、既成の知識をつめこんでいけばいいというような種類の問題ではないと思います。例えば小学校教育の中で、子供達を過疎化した村に連れて行ってそこで一年くらいお芋を作るとか田植えするとか、そういうことがあって初めて教育じゃないですか。なんで、そういうことを教科書でだけ書いてわかるんですか、と思います。今日の大学もそうだと思います。頭に詰め込むだけであって、実際に田んぼで蛭(ひる)に食われたりすることなしに、環境問題だ、エコロジーだと言ってててもどうにもならないんじゃないでしょうか。

教育においては、子供が生まれて育っていく社会的環境と同時に、自然的環境が根本的に大事です。そういう意味でコミュニティというものが非常に重要だと思います。最近になって読み始めた本に、デランティ（Gerard Delanty）という人の*Community*［2003］があります。この本は、解体されてしまったコミュニティについて、その再建を願う声が世界のいたるところから湧き上がっているという事態に注目して書かれた本です。しかし、私が理解する所では、この本にも、あまり華々しいことは出てきません。大体ハーバマス（Jürgen Habermas）に依拠しながら、現代のコミュニティはdiscursive（対話的）な関係に基礎を置かなければならない、と言っているわけです。そして、地球的自然環境とのかかわりをしめす「場所」については、現代的コミュニティは基盤を持ち得ないし、また、もたなくても良いのだ、と語っています。「とぼけてるなぁ」と僕は思うんです。現在、地球的規模でその回復が要請されているコミュニティというのはそんななまやさしいものではない、と思います。「場所」の何らかの意味での再建と関わらざるをえないのだ、というのが私の主張です。

みなさんが尊敬しているような人達にだいぶケチをつけましたので、頭に来ている方も

いらっしゃるかもしれません。どうぞ何でもおっしゃってください。長々とありがとうございました。

＜質疑応答＞

木前　最後のところで自然の問題を指摘されていましたが、自然と再魔術化の話はどう関係するのか、あるいは先生の研究の中で自然というものはどういう位置を占めているのか、お聞かせください。

山之内　『経済学・哲学草稿』という本があります。1970年代、フランスではアルチュセール、日本では廣松渉さんが出てきまして、『経済学・哲学草稿』などという「初期マルクス」の幼稚な本は読まなくていい、『資本論』こそが本当のマルクスだ、というふうに言われるようになり、まったく読まれなくなった本です。

ところが、『経済学・哲学草稿』でこれまで盛んに議論されてきたのは、実はその「第一草稿」の「疎外された労働」と言う部分に過ぎませんでした。若いマルクスの経済学研究は、この「第一草稿」を書いて以後に急速に進展しました。そして新たに「第二草稿」「第三草稿」が書かれています。確かにマルクスは「第一草稿」を書いたところで、自分の論理に欠陥を見出し、方向を転換しなければならなくなったと言えます。しかし、その方向転換は早くも「第二草稿」「第三草稿」において姿を現してきました。この転換を、これまでの「初期マルクス」研究はまったく見落としてきたのです。

「第二草稿」は大部分が失われているために――実は、当時書いていた「ミル・ノート」が失われたとされる「第二草稿」だという有力な見解も出されていますが――、「第一草稿」の末尾で確認された「アポリア」(方法的難点) からマルクスがどのようにして脱出を図ったかは、「第三草稿」を注意深く読むことによって知ることができます。私が間もなく青土社から刊行する『受苦者のまなざし――初期マルクス再興』は、この「第三草稿」の画期的意義を検討したものです。

この「第三草稿」で、フォイエルバッハというマルクスと同時代を生きた哲学者の言葉から、人間の存在は根本において自然を前提としてしかありえないのだという発想をマルクスは援用しています。私が『受苦者のまなざし』と呼んだのは、このフォイエルバッハ

の哲学的命題のことなのです。

一般には、マルクスというと、能動的な観点、あるいは実践的な観点をヘーゲルから受け継いできたと思われてきましたが、しかし、この「第三草稿」ではむしろ反対に、受動性の大切さということをフォイエルバッハから受け取っているわけです。人間と人間の間柄において、自己中心的に関係を作っていくのは不可能であって、自分がどのように他者に受けとめられているかという受動性を中心にした相互投影の関係が無数にあり、その関係のなかで初めて社会秩序があるのだ、ということを強調したのがフォイエルバッハでした。そして、そういった人間の存在全体がまた自然をベースにしてしかありえないという点で、根本的に受動的である。フォイエルバッハの立場からすると、人間は厳しさを含んだ自然をベースとしてしかありえない存在である。だからフォイエルバッハは、自然を征服すべき対象と考えること、あるいは自然は本来的に人間活動の資源的対象としてあるのだ、と考えてきた近代文明のあり方を、徹底的に批判したわけです。

「フォイエルバッハ→マルクス関係」において受動性の意味をもっとも明瞭に示すのは「受苦」——ドイツ語ではLeiden。英語に訳せばsuffering——という言葉です。「受苦」という言葉は受動的（leidend）であるからこそ情熱的（leidenschaftlich）に関わっていくという、能動性と受動性の複雑な相互関係が含まれている弾力的な言葉だと思いますが、それを強調したのがフォイエルバッハであり、「第三草稿」のマルクスでした。しかし、マルクスは一年後に有名な「フォイエルバッハ・テーゼ」（1845年）を書きまして、フォイエルバッハは受動的すぎてつまらない、自分はむしろヘーゲルの能動性の方を評価する、といってフォイエルバッハを捨てました。

私はその結果マルクスはとてもつまらなくなった、あるいは、近代文明が直面する自然環境問題という、いまでは避けて通ることができなくなっている課題への関心を放棄してしまった、と思っています。『受苦者のまなざし——初期マルクス再興』というタイトルで、私はそういう筋道を考えています。

春日直樹（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

サイード批判がなされましたけど、ポストモダンの括りの中にサイードを入れると、彼は大変に怒ったんじゃないかと思います。90年代以降は、とくに区別して語ってきた方ですし、オリエンタリズム以降ずいぶんと世界の情勢も彼自身も変わってきていたと思います。おそらく、ウェーバーの読み方についての先生の批判も、サイードは反対しないだ

ろうと思います。むしろ、プロテスタント的な解釈の中にオリエンタリズムを読み取って批判するんじゃないだろうかと思うわけです。

もうひとつ、私が一番お聞きしたいのは、ヨーロッパ的世界とアメリカとの関係についてどのようにお考えになっているか、ということです。ここに再魔術化の話とかすべてがつながってくると思うのです。と申しますのは、アメリカ的といったときに、アングロサクソン的ということが重なっていたりいなかったりします。ヨーロッパの大陸との関係でいうと、今むしろアメリカニズム批判というのが盛んです。世界の今の動きをどうみていくかということになると、やはりアメリカ化というのが大きく進行しているということが言えると思うのですが、それが一体なんなのか、ということをヨーロッパ的世界というところから位置付けていただけたら大変ありがたいと思います。

山之内　とても大切なポイントとなるところをご質問いただいたと思います。サイードに関しては、もういちど読み直してみたいと思いますが、アメリカをどうみるか、ということですね。それは私にはとても語る資格も能力もないと思います。ただ例えばタルコット・パーソンズは、宗教改革はヨーロッパから始まったけれども、それが持っていた可能性を真の意味で全面的に開花させるためにはアメリカというまったくあたらしい天地が必要だった、ということを強調している。これは一体どう読むべきなのか、ということがずっと頭の中にあります。

また、それとは逆に、イラク戦争に対する対応を見ていますと、EUのリーダーたるフランスやドイツがアメリカに対してはっきりと距離をとることができている。こういうところを見ると、そういう可能性をヨーロッパのほうが持ちえているという気もする。

もうひとつ、最近非常に話題になっているネグリ＆ハートの『帝国』という書物がありますが、あの書物ではアメリカの位置づけはどうなっているでしょうか。どうも読む人によって違うようで、私の読み方では、アメリカを中心として「帝国」ができるということではないということをネグリ達は絶えず強調している。彼らのいう＜帝国＞は、過去に存在していたさまざまな「帝国」とはまったく異なるものであり、どんな国家権力ともむすびつかないまったく新しい世界的秩序を作ってきている、ということになります。その＜帝国＞を支えるものとして、「マルチチュード」という、あらゆる地域性や国境を越えて移動していくような人口があり、それに支えられて＜帝国＞が出てくる。しかしまたその＜帝国＞を絶えず更新していくのも「マルチチュード」だ、という風な、分かりにくい

概念が提示されています。

この本が出たのが2000年です。その後、ハートが書いた論説の日本語訳を読んだのですが（マイケル・ハート「帝国とイラク攻撃」『現代思想』2003年2月号）、どうも今回の9・11とその後のアメリカの軍事発動は自分達が描いたようなそれとは違う国家権力型の帝国がまきかえして出てきているのだ、と言っていました。9・11以後におけるアメリカの軍事行動は「アメリカ合衆国がグローバルな規模においてではなく旧来のヨーロッパ・モデルにそくした帝国主義権力へと急速に歩み始めたことの兆しである」というのです。

このようなテキストをどういう風に読んでいったらいいのかはよくわからないし、目の前で起こっている問題をどう捉えたらいいのか、非常に難しいです。しかし、とてもシビアなポイントとなる問題であって、確かにネグリとハートの『帝国』という本は9・11以後の状態への理解について、一つの基準となっている。市田良彦さんが9・11から五ヵ月後の論説で語っているように、『帝国』という本は9・11事件とその後の状況についての「予言」であった、という側面があります（「帝国の諸問題」『批評空間』2002年2月号）。しかし、私は、ネグリ＆ハートのように「マルチチュード」という概念を表に出して、そこから国境を越えて流動化していくような動向に世界の将来を善かれ悪しかれ託してゆくことには、直ちには賛成できません。というのも、やはり、彼らはコミュニティの再興に向けた新しい歴史の動き、自然と人間の関係をめぐる根本的な再検討への動きをまったく無視している、と思うからです。

小泉潤二（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

私は人類学者で、そして例のゲバ棒の世代です。人類学者もそれほど異人種ではありませんで、私自身振り返ってみても大学院時代に読むことを義務付けられていた必読文献の中にマルクスやアルチュセールがありました。特にウェーバーに関しては、私自身あるいは指導教官も強い関心を持っていたということがありまして、全部とは言いませんがかなり読みました。その中でも、色々と考えさせられるのは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でした。私自身、行為者と経済行為を倫理と価値と関連づけて考察するというアプローチに強く影響を受けていると思いますし、その影響を受けているクリフォード・ギアツという人類学者にさらに強く影響を受けています。

もう一点、先生はポストモダンのウェーバー批判はウェーバーの大事なところを捉えていないのではないか、と仰っていましたが、サイードは別にして、具体的にどのような思

想家の話を考えていらっしゃるのか、もう少しお聞かせください。

それから、再魔術化という概念がなんであるのか、ということをもう少し知りたいと思います。具体例はどのようなものなのか、また常に目先を変えたもので消費者を惹きつける、というような説明がございましたが、目先を変えるだけでなくもうすこし複雑な現象だと思いますのでその辺をお聞きしたい。と思いましたのは、非常に粗っぽい言い方ですが、いつでもどこでも全ては魔術化されていると私は感じるからです。我々自身も、再魔術化という概念を使うまでもなく魔術化されているのではないだろうか、あるいは私が研究の為に行く場所にいる人々も魔術化されている、という言い方ができるのではと思うことがしばしばあるのです。マックス・ウェーバーというのは、常時、魔術化されているというか、常時、中途半端というか、そういう感覚を非常にうまく打ち出した思想家だと思いますので、ウェーバーを使ってさらに再魔術化について語るのは、どういう現象をつかもうとすることなのか、ということをもう少しお聞きしたいと思います。

山之内　まず、ポストモダンについてですけれど、ポストモダンについてその代表的な著作を丹念に読んだというほどではありません。例えばフーコーのものでも有名な著作を一、二流し読みしたという程度でして、ドゥルーズやデリダになると一体何を言っているのだかわからなくて、途中で放りだしてしまうという状況です。そういう人達のものにどうしてもついていこうという意欲がわかないのです。確かに我々の時代というのは非常に難しい時代であって、例えばフーコーのように、我々は生れ落ちたときから規律権力による監視システムの中で日常的に生きているではないかと言われれば、まさにそうだと納得するのですが、しかし、それがもし分かったら脱却できる方法はいかに分かるのか、そのことも語って欲しい。ところが、脱却できる方法についても、それもまた新しい監視であり規律権力じゃないか、というふうに、絶えず堂々めぐりになって脱出口が見えなくなることに私は苛立つタイプの人間なんです。それが嫌なんですね。どこかで、自分はあとで誰に非難されようと自分の生き方の問題としてこの点だけは認めたくない。あるいはこの点だけは主張し続けたい。そういうポイントを持ちたい。それが持てないんだよ、と絶えず言われるかのような時代潮流というのは嫌でした。つまり好き嫌いですね。嫌なんです。学問の方法としてそういう立場はありうると思います。しかし、とにかく私は嫌でした。今でも嫌です。

ニーチェからウェーバーへと流れている「悲劇の精神」からすれば、人間のなすことは、

ことごとく、成功したとしても、その成功の生み出す結果によって覆されるのです。カール・レーヴィットがかつて論じたように、それはギリシャ古代にさかのぼる「永遠回帰」の思想です(『ニーチェの哲学——同一なるものの永遠回帰』原著、1935年。邦訳、1960年、岩波書店)。「永遠回帰」だとわかっていても、その運命性を受け入れて、あるいはその運命性に逆らって、信じることを作り、なしてゆく。そうありたいと願っています。

しかし、ようやく、私のように感情的にではなく、ポストモダン時代の社会理論について冷静に分析し、失われてしまった歴史への語りを回復しなければならないとするウィトロックのような人もでてきました(「社会理論と知の歴史」『思想』2004年5月)。私がお答えできない部分について、このウィトロック論文が、いくつかの手がかりを与えているのではないでしょうか。なお、ウィトロック論文の概要については、私の『受苦者のまなざし』の序章「マルクス主義以後のマルクス」で紹介しておりますので、参照くだされば幸いです。

そういう意味では、私は自分なりの「世界像」を持ちたい。「世界像」と言った場合、そこには同時に未来像も含んでいると考えています。自分はこの問題になったときは真剣になって膝をぐぐっと立てて言うぞっていう、ポイントは持ちたい。そういうポイントを持った人間同士の討論じゃないと、どうも真剣な議論にはならないんじゃないかと思います。ポストモダンの哲学は、確かに、我々の思考のうちで未開拓なままできた問題を暴いたから、どうにも認めざるをえないところがあるんですけれど、人間というのは絶えず過ちを繰り返せばいいんだと思います。イラク戦争のような過ちは困りますけれど、「完全な知」というのはありえない。しかし、主張する根拠だけは絶えず構築しておくということなしには、いいかえれば、「完全なものを求める」者同士の真剣な討論なしには、人間の歴史に将来はないんじゃないかと思っています。

「再魔術化」の話についてですが、リアルなものとヴァーチャルなものがあるという話があります。「そうらしい」ということと、本当に手触りがあってこれはこういうもんだということの違いはあると思ってずっと来ているわけですね。しかし「再魔術化」した世界になるとリアルなものは消えてしまって、自分の身体感覚の中で何か確からしいと言えるものがあるかというと、もう見えなくなってしまった。ボードリアールが言うことは確かに当たっているとも思う。僕らの周りにあるものもすべてヴァーチャルなものであって、本当にリアルであると言えるのはほとんどないじゃないか、と言われれば、その通りじゃないか、と思います。ですが、いつのまにかヴァーチャルなものをリアルなものだとして

生きていってしまう、そういう環境を「電子メディアの世界」は作り出してしまっている。

非常に単純なんですけれど、このごろの子供達が楽しんで見ているような多彩な映像が、現実にはとてもありそうにない動作を次々と繰り広げてゆくゲームみたいなのね、私はあんなもの嫌いだから見ないんですけど、あんなものばっかりで遊びを覚えていくのとは違って、僕らの子供のときには「だるま落とし」とかがあって。なんで、「だるま落とし」や「おしくら饅頭」や「なわとび遊び」とかがもう通用しなくなったのか。そういうような遊びの場というのが僕はやっぱりリアルだと思うのです。僕は前世紀の人間でして、今の時代には生きていけないような人間ですけれど、やっぱりリアルなものはあるんじゃないの、と言いつづけることに僕のような存在の意義があると思っています。ボードリアール風にスマートに納得するようなことはしたくないのです。

最後に、フィールドの領域をやっていると、どんな領域でも魔術化されているではないか、と。多分そうではないかと思います。特にデボラ・ローズさんなんかがやっているアボリジニーの研究ですと、アボリジニーの人たちは、私にはとうてい理解不可能なことを語っている。それをデボラ・ローズさんと翻訳者の保刈君とが最後に討論していますけど、こんなことを研究するのもまた西洋的人間が勝手に思い入れをしてやっているのではないか、という困難な問題も論じられています。「ハイブリッド化」という専門用語がそれに当たるようですが、そういうことを言えば現地のアボリジニーが語っている言葉もまた白人社会によって植民地化され搾取され収奪される過程で変容している、というようなことも、同時に議論されています。この種の本を読むのは、実はしんどいのです。あまりにも「僕には理解しがたい世界」について、「本当にそう思っているらしく」書かれているものだからです。

そこで言われていることはあまりにも僕からは遠いものでありまして、時には「それをなんとか理解しようとしている僕とはいったい何者なんだろう」、と思うわけです。多分、人類学の方は、そういう距離のあるところにわざと入っていくという大変に苦しい作業をされていると思います。しかし、そういう苦しい作業を通して、「再魔術化された世界」を当たり前と思い、ヴァーチャルなものをリアルだと思って生きている人間を——ポストモダン以降のグローバルな世界に生きている人間を——ハッとさせるものが見出されることもあるだろう。私としてはそんなレベルで理解している状態です。

［やまのうちやすし・フェリス女学院大学国際交流学部／東京外国語大学名誉教授］

[参照文献]

◇ヴィルノ、パオロ 2004『マルティチュードの文法——現代的な生活形式を分析するために』広瀬純訳、月曜社.
◇ヴェーバー、マックス 1989『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店.
◇大塚久雄 1981『近代欧州経済史序説』岩波書店.
◇サイード、エドワード・W. 1993『オリエンタリズム』上下巻、今沢紀子訳、平凡社.
◇シュレジンガー、アーサー（ジュニア）1966『ローズヴェルトの時代』岩野一郎ほか訳、論争社.
◇知里幸恵 1978『アイヌ神謡集』岩波書店.
◇ホブズボーム、エリック 1996『20世紀の歴史——極端な時代』河合秀和訳、三省堂
◇丸山眞男 1983『日本政治思想史研究』東京大学出版会.
◇丸山眞男 2006『現代政治の思想と行動』新装版、未来社.
◇メイロウィッツ、ジョシュア 2003『場所感の喪失——電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』上巻、安川一、高山啓子、上谷香陽訳、新曜社.
◇山田盛太郎 1934『日本資本主義分析——日本資本主義における再生産過程把握』岩波書店.
◇山之内靖 1982『現代社会の歴史的位相——疎外論の再構成をめざして』日本評論社.
◇山之内靖、ヴィクター・コシュマン、成田龍一編 1995『総力戦と現代化』柏書房.
◇山之内靖 1997『マックス・ヴェーバー入門』岩波書店.
◇山之内靖、酒井直樹編 2003『総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社.
◇山之内靖 2004『再魔術化する世界——総力戦・＜帝国＞・グローバリゼーション　山之内靖対談集』伊豫谷登士翁、成田龍一編、御茶の水書房.
◇山之内靖 2004『受苦者のまなざし——初期マルクス再興』青土社.

◇Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash 1994 *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Stanford: Stanford University Press.（ベック、ウルリッヒほか 1997『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文ほか訳、而立書房.）
◇Delanty, Gerard 2003 *Community*. London: Routledge.（デランディ、ジェラード 2006『コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容』山之内靖、伊藤茂訳、NTT出版.）
◇Eisner, Marc Allen 2000 *From Warfare State to Welfare State: World War I, Compensatory State Building, and the Limits of the Modern Order*. University Park, Pa.: Pennsylvania State University Press.
◇Hardt, Michael and Antonio Negri 2000 *Empire*. Cambridge: Harvard University Press.（ハート、マイケルほか 2003『帝国——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲ほか訳、以文社.）
◇Lilienthal, David E. *TVA: Democracy on the March*. New York: Harper & brothers.
（リリエンソール、デーヴィット・イー・1949『TVA——民主主義は進展する』和田小六訳、岩波書店.）
◇Lowi, Theodore J. 1969 *The End of Liberalism: Ideology, Policy, and the Crisis of Public Authority*. New York: Norton.（ロウィ、セオドア 1981『自由主義の終焉——現代政府の問題性』村松岐夫監訳、木鐸社.）
◇Ritzer, George 1999 *Enchanting a Disenchanted World: Revolutionizing the Means of Consumption*. California:

Pine Forge Press.
◇Rose, Deborah Bird 1996 *Nourishing Terrains: Australian Aboriginal Views of Landscape and Wilderness*. Canberra: Australian Heritage Commission.（デボラ・ローズ 2003『生命の大地——アボリジニ文化とエコロジー』保苅実訳、平凡社.）